エトリアの冒険者

かすみづき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エトリアの冒険者

【Ｎコード】
Ｎ１３９７Ｍ

【作者名】
かすみづき

【あらすじ】
樹海に挑み、街で暮らす。冒険者としての日々。

００１）ありがちなプロローグ

「やっと着いた……！」

冴え冴えとした紅髪の下から、疲労と待望の入り混じった声が吐き出される。

「あれが世界樹か……。伊達に『世界』を名乗ってないなぁ」

雪より白い髪と褐色の肌と云う鮮やかなコントラストの人物が、遠くに見えるシルエットを認めて口を開く。

彼らふたりは、少年と青年の狭間に見えた。

「気を抜くのはまだ早いよ。まだ街に足を踏み入れてもいないんだからね」

感慨深げにしている少年達にそう声を掛けたのは、明るい金髪をゆるく三つ編みにした妙齢の女性だ。

「迷宮には今日から入るですか？」

見た目よりも少し幼い言い回しで訊ねた少女の、肩より少し上で切り揃えた栗色の髪が楽しげに跳ねている。

「いいや。手続きやら準備やらと色々あるだろうからね。潜るのは明日以降の予定だよ」

「そうですか」

少女の答えに落胆した様子は無く、全ての行為が楽しくて仕方な

いと感じているかの様だった。

「さてそれじゃあ、行こうかね」

＊　＊　＊

エトリアの街の外れに聳(そび)える巨大樹。
その根元に、ある日大地の裂け目が見つかり、そこには広大な樹海があった。
地下に広がる深遠な世界を根で支える巨大樹は、いつしか世界樹と称された。
世界樹に護られた地下世界を、人々は「世界樹の迷宮」と呼んだ。

「世界樹の迷宮に挑む者達が集う街に、また新たな冒険者が足を踏み入れた。
彼らは何かを成し遂げるのか。それとも人知れず消えるのか。
その答えを、まだ誰も知らない」

「……何してるの？」
「ん？　ちょっとした導入部だよ。冒険譚(サーガ)らしくて良いだろう？」
「僕らで英雄(サーガ)伝は大袈裟でしょ」
「長話(サーガ)なんか退屈なだけだろ？」
「さーが、てなんですか？」

噛み合わない彼らの行く末や如何(いか)に。

００１）ありがちなプロローグ（後書き）

本文あとがきに入れる程でも無い呟きを、活動報告にてしています。興味を持った方は作者名をぽちっと押して、覗いて見て下さい。

００２）まずは冒険者ギルドへ

冒険者ギルドの扉をくぐると、左目に眼帯をした筋骨隆々な人がそこに居た。
僕ら四人を見ると「ようこそ、新たな冒険者ども」と言って、暇そうだった態度を一変させてにやりと笑った。

「樹海に潜る手続きってのは、何をすれば良いんだい？」

分かってるなら話は早いとばかりに、セ・セツが要件を切り出した。

「樹海に潜るにはここで冒険者として登録して、後はギルドに入りゃ良い」
「なら登録は今済ませるとして、ついでにどこか入れそうなギルドを教えてもらえるかい？」
「登録は問題無いが、ギルドの方はちと厳しいな」
「おや、どうしてだい？」
「最近はどこも飽和状態でな、新人を受け入れてるギルドがねぇんだよ」
「それは参ったねぇ」

セ・セツと眼帯の男の会話はさくさくと進んでいく。
置いてきぼりになった僕らはカウンターを離れて、フロアのソファに座って待つ事にした。

「どうだい、あんたらでギルドを立ち上げちゃあ？」

眼帯の男のそんな言葉と、即答で是（イエス）と答えるセ・セツの声が聞こ

えて来た。
その声は、背中しか見えないセ・セツがどんな顔をしているかを手に取る様に教えてくれた。
絶対かなりの笑顔に違いない。

「じゃあこの書類に記入してくれ」

眼帯の男が出して来た一枚の紙をセ・セツが受け取る。
多分申込用紙みたいなものなんだろうと思っていると、呆れた様にセ・セツが言った。

「随分とまた手抜きの書類だねぇ。書く意味あんのかい？」

どんな書類なのかちょっと気になって、カウンターへ行くとセ・セツの手元を覗き込んだ。
一番上にギルド名を書く枠があって、その下に構成員の名前を書く場所だろう枠が並んでいる。
その紙にあるのは、それだけだった。
後は、書類を受理した証明印なりサインなりを記す為のスペースくらいしか無い。

「……無茶苦茶シンプルだね」

予想外の適当さに呆然とする僕の横で、セ・セツがさらさらと書類にペンを走らせる。

「昔はもうちっとマシな書類だったがな。ひと月でメンツががらりと変わるんじゃ、手間かけるだけ損ってもんだろ」

セ・セツの手元を見つつ、やってられないと言わんばかりの溜息

を吐く眼帯の男。

「もっとも、そんな奴らでもギルドが続いてるだけマシかもな」

「なくなるギルドも多いのかい？」

「多いなんてもんじゃねえ」

訊いたのはセ・セツだけど、書類を書いているから視線を向けて来ない彼女の代わりなのか、僕に向かって指を三本立てて見せて来た。ごつい腕に見合うごつい指だった。

この人、絶対元冒険者だ。

「何の数だか分かるか？」

武器を扱う人間特有の手に気を取られていた僕は、慌てて訊かれた事について考える。

「えーと、……なくなったギルドの数、とか？」

会話の流れから行けばそうじゃないかなぁ、と思った事をとりあえず言ってみる。

眼帯の男は僕の答えを聞くと満足そうに頷いて手を引っ込めた。

「正確に言うと、冒険者ギルドで登録抹消が行われたギルドだ。それが先月で三十組」

……うん。多いのか少ないのか分からない。

「通常、ギルドってのは何十年、下手すりゃ数百年と続くもんだ。それが一週間や一ヶ月で解散に次ぐ解散だ。真っ当な書類なんざ作るだけムダだろ？」

そんな事を言われても、僕にはギルドと云うものに対する常識が無いのでよく分からない。
どう返すべきかと困っていると、セ・セツが眼帯の男に書類を突き付けて「嘘を言うもんじゃないよ」と言った。
「オレは別にウソは言ってねぇぜ？　これでもここのギルド長だ。冒険者ギルドの登録数くらい把握してるさ」
突き出された書類を受け取って確認する眼帯の男、改め、ギルド長。
別にギルド長である事が意外とは言わないけど、ギルド長がカウンター業務をやっている事は意外としか言い様が無い。他に職員は居ないんだろうか。
そんな疑問を持ったのは僕だけだったらしく、セ・セツはそのまま話を続けた。
「確かに先月解散したギルドは三十行ったのかも知れないけどね。ギルドは連綿と続くものだって云うその前提がもう変じゃないか。創成期のギルドなんて、作られては消えるもんだよ。潰し合いとも言えるそいつを生き延びたギルドだけが、モノになるんじゃないのかい？　長く続くモノにさ。この街のギルドはまだまだ現れ立ち消えが当然の段階なんだろうさ」
「言うねぇ、姉ちゃん」
口笛でも吹きそうな調子でギルド長が言った。
「観察眼が鋭いのは良い事だ。だが、書類の書き方はなっちゃいねぇな」
「何がだい？」

「確かにギルド名とその構成員について書くだけだがな、メンバーの職業くらいは書いてくれても良いんじゃないか？」
「職業？」
「つまりだな、樹海に潜るからには必要なものが色々とあるだろ？その必要なものの中でも何を選び取るかって事だよ。防御を固めるのか、回復に重点を置くか――」

セ・セツがギルド長から各職業についての説明を聞き始めたので、僕はカウンターを離れてソファに戻る事にした。
そう云えば妙に静かだなぁと思って見ると、アークの足を枕にしてオトーが眠りこけていた。
どうやらアークは、オトーを起こさない様に黙っていたらしい。
戻って来た僕に気付いたアークが、静かに、と目だけで告げて来た。
分かってる、と同じく目で返して対面に腰を下ろす。
セ・セツとギルド長が普通に会話してるからあんまり意味は無いかも知れないけど、僕らくらいは静かにしていようと、アークと無言で頷きあった。

「――無論、一撃必殺を狙っても良い。攻撃は最大の防御とも言うしな」
「なるほどねぇ」

一通りギルド長から説明を訊いたセ・セツは、再び書類を受け取ってぐりぐりと書いて行く。僕ら四人の職業を書いてるんだろう。
つまり、僕らに選択の余地は無いらしい。まぁ、別に良いけど。

「これでどうだい」

ギルド長は再び眼前に突き出された書類を受け取ってざっと目を

通すと、ひとつ頷いた。

「まぁ良いだろう。バランスも悪くない」

そう言うと、何やらさらさらと書類に書いている。

「ギルド名は〈ハバキ〉　ギルドマスターはアルケミストのセ・セツ、と。まずは、これを持って執政院ラーダへ行って来い」

記入はすぐに終わり、たった今セ・セツから受け取ったその書類をもう一度返して来た。

「ギルドを作った所で、執政院の許可が無ければ樹海に潜る事は出来ねぇからな」

「そうかい、ありがとよ」

ふと前を見ると、いつの間にかオトーは目を覚ましていて、アークの隣にちょこんと座っていた。

「最後にもうひとつ」

書類を受け取ってカウンターから離れようとしたセ・セツに向かって、ギルド長が声を掛けた。

「こいつは冒険者全員に言ってる事だ。冒険者ギルドでは、樹海探索は五人パーティーを推奨している」

「五人？」

「ああ。お前らハバキは四人しかいねえ。誰かもうひとり、メンバーを増やす事を勧めておくよ」

「まぁ、考えてみるよ」

「そうしてくれ。増員メンツもその都度登録する事になってるから、忘れねぇようにな」
「それも、頭の片隅には置いとくよ」
「片隅かよ」
「充分だろ」

００３）「金鹿」と書いて「こんろく」と読む

冒険者ギルドを出ると、太陽がちょうど真上に来ていた。

「とりあえず、お昼にしない？」

「ゼンに同じく」

「ごはんです！」

僕の言葉にアークは賛成の意を示し、オトーは素直に喜んだ。

「そうだね、そうしようか」

セ・セツの同意も得られたので、近くにあった店に入る。

『金鹿の酒場』と云う名前からアルコールを出すのが本業だろうけど、昼は軽食を扱っている酒場は多い。

立地的に夜の客層は樹海帰りの冒険者だろうから、一度夜に来てみても良いかも知れない。情報はあって困るものじゃないし、と思いながら扉を潜る。

入ってすぐの所にカウンター席があって、そこそこの奥行きがある店内には丸テーブルが等間隔で並んでいる。少し薄暗く感じる店内に、お客さんは誰も居なかった。

ひょっとしてまだ営業してないのかなと思った時、カウンターから人が出て来た。

「いらっしゃいませ。お食事かしら？」

落ち着いた色合いの、だけどちょっと目のやり場に困る服を来たその人は、雰囲気通りのおっとりとした笑顔を浮かべた。

＊　＊　＊

「ギルドに所属していない冒険者？」

店は営業していた。

酒場として明け方近くまで店を開けている為、開店はお昼少し前にしているんだと、サクヤさんが教えてくれた。

今日の客第一号になった僕らが頼んだ料理を待っている間に、他にも数人のお客さんが入って来ていた。

ちなみにサクヤさんと云うのは僕らを出迎えてくれた女将さんの事で、女将と呼ばれるのが好きではないからと名前を教えてくれた。

運ばれて来た料理を食べながらの雑談で、誰かギルドに入ってくれそうな冒険者を知らないかとサクヤさんに訊ねる流れになったんだけど。

「お客さんに何人か居るには居るんだけど……皆、それなりに事情があってギルドに入っていない人たちなの。だから、ギルドに入ってくれそうな人となると、すぐには思い当たらないわ」

「そうですか……」

ごめんなさいね、と本当に申し訳なさそうに言うものだから、訊ねたこちらが悪い事をした気になってしまう。

「いえ、居たら良いなぁ、くらいの気持ちだったんで。あんまり気にしないで下さい」

「そう？　良さそうな人が居たら教えるから、ぜひまたお店に来てね」

こう云う切り返しはさすが客商売だな、と関心しながら「ありがとうございます」とだけ返した。
やっぱりそう簡単には行かないらしい。
サクヤさんが店の奥に戻るのを見送ってから、食事を再開する。
全員が食べ終わり、この後どうするかを話し合っていたら、再びやって来るサクヤさんを見つけた。

「サクヤさん？」

ぱたぱたと小走りに僕らのテーブルへとやって来る様子は、どう見ても注文訊きと云う感じじゃない。

「お食事中にごめんなさい」
「いえ、もう食べ終わったんで良いですけど……どうかしたんですか？」
「ええ。さっきの話なんだけど」
「ギルドに入ってくれそうな冒険者、ですか？」
「ええ。あの子なんてどうかしら」

そう言ってサクヤさんが細い指で指し示したのは、カウンターに座っているひとりのお客さんだった。

「以前はギルドに入っていたんだけど、合わなかったみたいですぐに抜けたらしいの。今はひとりで樹海に潜ってるみたい」
「ひとり？」

思わずその背中を凝視する。
腰まで伸びた鳶色の髪と華奢な肩幅から見て、間違いなく女性の筈だ。
大の男が束で挑んでも帰って来ない事があると云う樹海にひとり

で潜り、しかも無事に生還している猛者にはとても見えなかった。
「本人は浅い所しか行かないから大丈夫だって言うんだけど、やっぱり心配で……」
話題の人物の背中を見つつ、眉根を寄せて心配そうにしていたサクヤさんは、ぱっと僕らに向き直った。
「だからね、あなたたちさえ良ければ、あの子を誘ってもらえないかしら。冒険者ではない私には、あの子の実力を保証する事は出来ないけど……性格は、太鼓判を押せるくらい良い子よ」
顔の前で両手を合わせて「お願い」と言うサクヤさんから、決定権を持つセ・セツへと視線を移す。
多分アークもセ・セツを見てるんだろう。オトーが僕とアークをきょろきょろと見てからセ・セツに視線を移した気配から、そう判断した。
僕ら三人の視線を辿って、サクヤさんもセ・セツを見る。
計四人の視線に晒されたセ・セツは、しばらく黙って話題の人の背中を眺めていた。
そしてやっぱり黙って席を立つと、すたすたと歩いて行って隣の席に座った。
ガラガラのカウンターでわざわざ隣に座った見知らぬ人間に対して、渦中の人物はひと言ふた言何かを言ったみたいだったけど、さすがに声は聞こえない。
僕ら四人が見守る中、しばらくふたりで話していたかと思うと、座った時と同じく唐突に席を立って戻って来た。
しかもカウンターに居た女性の腕を掴んで一緒に連れて来た。絶対、相手の了解を得ていない連れてき方だった。

００４）何はともあれ自己紹介を

何がどうなったのかさっぱりな僕とアークは、思わず顔を見合わせた。
僕らの戸惑いなんて気にする事なく、セ・セツは引っ張って来た女性を僕らの前まで更に引っ張る。

「紹介するよ、レンジャーのクレアだ」

後ろ姿から感じた通り、やっぱり女性だった。
羽根飾りの付いた帽子を被り、右目は黒い布で隠され、口元も衣服で覆われている。
そんな、顔の半分以上が隠された様な状態なのに、間違いなく綺麗な人だった。
顔を隠さずに街を歩いたら、ナンパされ過ぎてなかなか前に進めないんじゃないか、と思えるくらいの美人。
ただ、もの凄く無表情なのが気になるけど。

「えっと……クレアさん？　初めまして、イーゼンです」

セ・セツの意図は僕らに自己紹介をさせる事にあるんだろうな、と思ったから、とりあえず席を立ってクレアに向かい合うと、右手を差し出した。

「……あの？」

握手のつもりだったんだけど、彼女はじーっと僕の差し出した右手を見ているだけだった。
そしてふい、と視線を逸らしてしまう。

あれ、嫌われた？　絶対何もしてないよ？　初めましてって言っただけだし。

「……クレアで良い」

僕がひっそりと心の中で落ち込んでいると、ぼそりとそんな言葉が聞こえた。

「え？」

「……さんは要らない。敬語も要らない」

僕が聞き返したら、もう一度言葉を変えて、そして足して言ってくれた。

「……うん、分かった。よろしく、クレア」

声に全く抑揚が無かったけど、無表情と合わせて彼女の個性だと思う事にした。

嫌われた訳ではないみたいだから、単に握手が好きじゃないんだろうと納得しておく。

「じゃあ、次はアークね」

「はいはい。……ダークハンターのイアークです、初めまして。俺もクレアと呼んでも良いのかな？」

クレアはアークの質問にこくりと頷いた。

「分かった。よろしく、クレア」

僕とのやり取りを見ていたアークは、クレアに握手は求めなかっ

た。

「えっと、アークは真っ黒なのは外見だけで、中身はそうでもないから安心してね」

「どーゆー紹介だよ、それは」

机を挟んで僕の向かいに居るアークを指差してクレアにそう告げると、アークが不満げに突っ込んで来た。

「言った通りの意味だよ。だってアーク、よく絡まれるじゃん。何を企んでいる！　とか言われてさー」

「確かによく絡まれるけど、それは俺が何も企んでない時に絡まれるんであって、何かを企んで絡まれた事は一度も無い」

「その言い草が何か企んでる様に受け取られるんだと思うけど。素直に何も企んでない、て言えないの？」

「そう言ってるけど？」

「いや全然言ってないから。今の、企んでる時は絡まれてないって聞こえるから」

そんなどうでも良い会話をしていたら、いつの間にかオトーが机を回り込んでクレアの前に立ち、自己紹介をしていた。

「オトーです。よろしくです」

ぺこりと下げた栗色の頭を、クレアが無言で撫でた。

僕の握手は却下された事を思うと、何だかちょっと淋しい。

「えへへー」

……オトーが嬉しそうだから、まぁ良いかと思う事にした。

ひとしきり頭を撫でてもらったオトーが、てててっとセ・セツの方へ寄って行った。

「挨拶は済んだかい？」

「うん」

「ああ」

「はいっ」

セ・セツの言葉に、僕とアークとオトーがそれぞれに返事を返す。

「それじゃあ最後に、私が〈ハバキ〉のギルドマスターで、アルケミストをやってるセ・セツだよ。まだまだ未熟だけどね。メンバーはこれで全員だ」

……自己紹介してなかったんだ、セ・セツ。

「ついでに言えば、そこのイーゼンはソードマンで、この子はメディックで登録してある。イアークは……自分で言ってたから問題無いね」

そこの、では僕を親指で示し、この子、の辺りでオトーの頭にぽすっと手を置く。

「後は……まぁ、その都度話せば良いか。さて、それじゃあクレア。何か質問は？」

このセ・セツの問いに対するクレアの答えで、話の流れが止まるどころか覆（くつがえ）った。

「……私は、もうギルドに入る気は無いと言った筈」

「あぁ言ってたね、そんな事」

断られたのにクレアを引っ張って来てしれっとしているセ・セツは、常識的に見ればおかしい事この上ない。

ただし、セ・セツに常識は通じないと云う前提が、僕の中には既にある。多分、アークにもあるだろう。

「どうしてもと言うなら入っても良い、とも言ったよね？」

「……他に居なかったら考える、とは言った。それが、どうしてそうなるのか分からない」

なるほど、何となく分かった。

多分、さっきの対話で、クレアはセ・セツのギルド勧誘を断った。それでもしつこく誘うセ・セツに対し、他を当たってどうしても見付からなかったらまた来い、その時改めて考える、みたいな事を言ったんだろう。

なかなか引かない相手をあしらうには巧い返事だ。

とりあえずその場は引かせる事が出来るだろうし、後々誘われても、やっぱり入らないと断れば良い。

考えると言っただけで、入るとは言ってないんだし。

その意図に気付けないタイプはそのままあしらえるし、意図に気付ける人間なら彼女が絶対に頷かない事まで読んで諦めるだろう。

口数が少ないタイプは押しに弱い事も多いけど、クレアは我を通す術をしっかり習得済みらしい。

「だから、だよ」

にやり、と云う言葉が似合う笑みを浮かべたセ・セツが言った。

「譲歩したと見せかけて、全力で断る。しかも極力波風を立てずに、

と来た」

セ・セツに頭を使った湾曲的な断り方をしたのは失敗だろう。クレアは知らない事だから、仕方がない事だけど。

「私はあんたが気に入ったよ、クレア」

セ・セツは、そう云う頭が良くて我が強い人間が好きなのだ。

「あんたの、もうギルドはこりごりだって云う思いは理解した。十二分に理解した上で、それでも言うよ」

クレアと視線をひたと合わせて、セ・セツが改めて口を開いた。

「私らの仲間になってはくれないかい？」

００５）シリカ商店で武器選び【前編】

目の前に並んだ武器達を眺める。
長さや太さが様々なそれらは全て剣だ。
ざっと見て、気になったものは手にしてみる。
重さもそれぞれだった。

「……むぅ」

ひと通り目を通してみたけれど、しっくり来るものがない。
どうするかな、とひと息ついて店内を見回すと、棚の向こうに白い頭が見えた。
ユキウサギよりまだ白いんじゃないかと云うくらいの白髪は、間違いなくアークだろう。
アークって、肌は浅黒いし着るものも黒っぽいのを好むから、白い頭だけやたら目立つんだよね。
捜し易いから良いんだけど。

「ちょっとおにーさん」

今居るのは武具を扱う店で、来ているのは僕とアークのふたりだけ。
セ・セツはクレアを追加登録して来ると言って冒険者ギルドへ出掛けて行き、オトーはそれに付いて行った。
無表情で引っ張っていかれたクレアは……まぁ、大丈夫だろう。
ちゃんと「入る」と云う意思表示はしてくれたし。

「おにーさんってばー」

しかし、クレアが割とあっさり入ってくれたのは意外だった。
まぁ、よっぽどの事がない限りセ・セツが諦める事は無いだろうから、それを察したクレアが折れてくれたのかも知れない。
前のギルドを辞めた理由が絡んでいるんだろうけど、まだ仲間になったばかりの僕らが触れて良い事ではない気がする。
僕らだって、クレアに一から十まで全部話せるかと言ったら、そうでもないし。

「そこの紅い髪したおにーさん！」
「ん？」

紅い髪、と云うフレーズに反応して振り向くと、小麦色の肌を惜し気もなくさらした黒髪の女の人が立っていた。

「えっと、僕？」

自分の顔を指差して尋ねる。
僕の髪は確かに紅いが、他にもいない訳じゃない。そう思っての確認だったのだけど。

「そうだよ。今お客さんはおにーさんとあっちの白い髪のおにーさんしかいないんだから」

何度も呼んだのに無視しないでよね、とちょっとご立腹な感じでその人は言った。

「あー、それはごめんなさい。ちょっと考え事してて」

自分が呼ばれていると思ってなかったとは云え、話し掛けられたのを無視した形になってしまったのは間違いの無い事なのでおとな

しく謝っておく。

「うわ意外……まぁ、良いや。謝ってくれたから、許したげる」

意外、てどう云う意味なんだろう。

そう思ったけど、向こうも思わず呟いただけで僕に言ったつもりは無いみたいだから、そのまま流す事にした。

そんな細かい事に時間を使っていたらキリが無い。

「で、何ですか？」

僕に声を掛けたと云う事は、僕に用があると云う事だろうと先を促す。

「あ、そうだったそうだった。やー、うっかり忘れる所だった」

危ない危ない、と全く危機感なく笑うと、自分はこの店の店主だと言った。

シリカ商店の店主って事は、彼女の名前はシリカさんな訳だ。

「それじゃ本題に入るけど、お兄さん冒険者だよね？　見ない顔だけど新人さん？」

「あ、うん。分かるの？」

まさかエトリアに居る冒険者全員の顔を覚えてる訳じゃないだろうけど、長く居る人はやっぱり覚えてるんだろうなと思いながら返事をする。

「冒険者って独特の空気持ってるからね。それに武器も決まってないみたいだし」

「あ、なるほど」

確かに、もう樹海に潜った事がある人間なら、片っ端から剣を手に取って唸ったりはしないだろう。

と云うか、樹海に潜る前に武器を決めていない様な冒険者は、そもそも生きて帰って来ないんじゃないだろうか。

「実は、今日ギルド作ったばっかりで」

「わ、じゃあ正真正銘新人だ。よし、それじゃおにーさん達のギルドの門出を祝ってー」

「値引きしてくれる？」

「武器選びに付き合ったげる」

「ビミョーなお祝いだなぁ」

一度も樹海に潜ってない僕らのギルドは、はっきり言ってお金がない。

「何言ってんの。ここはボクの店だよ？　商品の事はボクが一番分かってるんだから」

「うーん。そう言われると、なんかちょっとありがたい気がして来た」

シリカさんの好意に素直に甘える事にして、予算と目の前の棚にしっくり来るものが無かった事を伝える。

「うーん、剣はこれしか在庫ないんだよね」

「じゃあ、妥協しないと駄目かな……」

「それはダメ！」

僕の独り言とも取れる呟きに返されたあまりにも強い否定に、ち

ょっとびっくりする。

「武器は自分と仲間の命を繋ぐものだから、違和感があるものは使わない方が良いよ。しっくり来るものが欲しいってキミの感覚は間違ってない。その感覚を大事にして」

真摯な瞳と言葉。

もしかしたらしっくり来ない武器で迷宮に潜り、帰って来なかった人が居たのかも知れない。

冒険者ギルドで聞いたじゃないか。

先月三十組のギルドが消えた、と。

「……分かった。妥協はしない」

「うん、それが良いよ」

僕の言葉を聞いて笑ってくれたシリカさんに、少しだけほっとしたけど。

妥協しないって事は、つまりこの店の剣は買えないじゃないかと僕とシリカさんが気付いたのは、それから割とすぐだった。

００６）シリカ商店で武器選び【中編】

武器に妥協はしない方が良い。
勿論、予算と云う上限はあるけど。
そして、シリカ商店（このみせ）の予算内の剣はどれもしっくり来ない。
と云う事は。

「……他の店に行くしかないかなぁ」
「うっ……できればウチで買ってもらいたかったんだけどね。でも合わない武器を売る訳にもいかないし……」

シリカさんが残念そうに息を吐く。

「一応言っておくけど、どこの店でも大して品揃えは変わらないと思うよ」
「え、そうなの？」
「ふたつほど理由があってね。初心者向けはあんまり性能に差がないってのがひとつ。もうひとつは――」

「すみませーん」

カウンターの方からそんな声がして、店の人を呼ぶベルの音も響いた。

「――っと。ごめんね、お客さんが呼んでるから、ちょっと待ってて」
「僕も行きます。あれ、同じギルドなんで」

カウンターの方を見れば白い頭が見えるだろうけど、そんな確認

をするまでもなく、さっきの声はアークだった。
「そうなんだ。じゃあ、彼も新人さん？」
「そう」
棚をひとつ迂回してカウンター前に出ると、こちらを見たアークと視線が合った。
「あれ、ゼン」
「武器選ぶの付き合ってもらってたんだ。店長さんだって」
「ご利用ありがとねー」
アークに片手を上げつつ手短に説明すると、シリカさんも乗って来た。
「で、ご用は？」
「あ、そうだ。武器の試しって出来ます？」
「試し？　試し斬り？」
「試し斬りって云うか、試し打ちって云うか……」
うーん、とちょっと困った様子で、アークはカウンターに置いていたものをふたつ、取り上げてシリカさんに見せた。
「使い勝手が知りたいんだけど、店内で振り回したら大惨事だし、外に持ってく訳にもいかないし」
アークが両手に持ってシリカさんに見せたものは、鞭だった。
「なるほどね。分かった、中庭使って良いよ。そのふたつだけで良いの？」

「ああ。グリップ握った段階で一番しっくり来そうなのがこのふたつだったんで」
「ふーん。じゃあ案内するね、こっち来て。キミはどうする？」
前半はアークに、後半は僕に対して向けられていた。
「うーん、アークの鞭捌きって云うのも見てみたいけど、ここは自分の武器選びを優先しとく」
前衛は僕とアークで務めるだろうから、どうせ間近で見る事になるだろうし。
まぁ、見る余裕があればだけど。
「そっか。それじゃ、すぐ戻るからちょっとだけ店番お願いねー」
「え？　ちょ――」
引き留める間もなく、シリカさんはアークを連れて奥へ行ってしまった。
「店番、て……」
ただの、それも今日初めて来店した客に、短時間とは云え店を任せてしまって良いんだろうか。
と云うか、接客なんか出来ないんだけど、僕。
ちょっと途方に暮れかけたけど、すぐに、もう行ってしまったものはしようがないと開き直る。
中庭に案内するだけなら五分も掛からないだろうし、もしその間に誰か来たら待ってもらえば良い。
だけど、もし商品を盗もうとする奴が居たら、僕が阻止しないと駄目なんだろうか。

「まぁ、大丈夫……かな？」

新米冒険者に止められるかどうか分からないけど、上級冒険者がそんなせこい事するとも思えないから、平気だろうと思う事にした。

００６）シリカ商店で武器選び【中編】（後書き）

ゲームの公式設定に逆らい、シリカ商店以外にも武具販売店がある設定になっております。

００７）シリカ商店で武器選び【後編】

十分ほどして、シリカさんが戻って来た。

「お待たせー、店番どうもありがとね」

「ん、良いよ。僕の仲間が頼んだ事だし、誰も来なかったから武器見てただけだったしね」

五分も掛からないだろうと云う僕の予想は外れたけど、その程度でいらいらするほど短気じゃないし、急いでいる訳でもない。

商店としては誰も来ないと云うのは問題だろうけど、僕としては苦労しなくて済んだので素直に喜んでおきたい。

「それで、やっぱりしっくり来るのは無い？」

「うーん、これだ！　て剣は無いね、やっぱり」

シリカさんを待ってる間に、もう一度剣に目を向けてみた。

どの剣も文句がある訳じゃない。具体的にここが不満だ、と云う様な事も無い。

だけどどれも、何か違うと思ってしまうのは、どうしようも無い事だと思う。

「だけど、これにしようかな、て武器は見付かったよ」

一拍置いて、シリカさんが目を丸くした。

「しっくり来る剣は無かったんだよね？」

「うん、無かったね」

これだ、と思える剣が無い。
それは今も変わってない。

「まさか妥協した……って訳でもなさそうだね？」

僕の顔を探る様に見て、シリカさんが言った。

「うん。ヒントはアークからもらったんだ」
「あの、白い髪のおにーさんだね？」
「そう。武器眺めてて思い出したんだけど」

アークは武器に鞭を選ぶつもりの様だけど、確かダークハンターも剣を扱える筈だ。
そう思った時、ふと気付いた。

「剣士（ソードマン）なんて言うからには剣を選ばないと、て思い込んでたみたいなんだよね」

絶対に剣を選ぶ必要は無かったんだ。
ダークハンターが剣と鞭を扱える様に、ソードマンにも剣以外の選択肢がある。

「て云う訳でこれ下さい」

僕の言葉を聞いてまた目を丸くしているシリカさんへと、一振りの斧を差し出す。
シリカさんは、差し出された斧を見て、斧を持った僕の右手を見て、僕の顔を見上げると口を開いた。

「キミ、ソードマンだったの？」

「……何だと思ってたの？」

あんまり以外そうに言うから訊いてみたら、「吟遊詩人（バード）か施薬衛生士（ツク）かと思ってた」と返って来た。

……どう云う意味なんだろう。

「……バードはともかく、メディックは剣を持たないよ？」

「うん。だから前衛に出たがりのバードかなって」

だから、どう云う意味だ。

「えーと、これは初心者向けの中じゃ一番重いヤツだけど、それだけ軽々と持てるなら問題ないね」

僕が半眼で見つめると、僕の持ってる斧に視線を逸らしてそう言った。

確かに一番重いと感じたし片手で持てるからそれは正解なんだけど、視線を逸らしたのと、その意外そうな声音が引っ掛かる。

「……バードとメディックって、仲間の支援がメインの後衛職で、個人での攻撃力は弱いんだよね？」

呟く様にそう訊くと、シリカさんの肩が微かに震えた。

しかも「弱い」の所で。

つまり、僕は弱そうに見えると云う事だろうか。

これでも、旅の間の荒事担当だったんだけど。

ちなみにバードとメディックが弱いと云うのは、平均を他の職業と比べると、と云う前提が付く。

中には敵を一撃で撲殺する、ばりばり前衛のメディックなんかも居るらしい。

オトーなんかは割と馬鹿力だからそんなメディックにもなれそうだけど、妹みたいなあの子を前衛に立たせる気はない。
これは、前衛メディックの話を聞いた時にアークと確認し合った決定事項だ。

「……まぁ良いや。で、売ってくれるの？」

深くは切り込まない事にして、話を戻す。
思えば旅してる時も、絡んで来たチンピラとか襲って来た山賊とかに絶対バカにされてたし。

「斧は一撃の威力はあるけど、速さは無いよ。それでも良い？」

シリカさんもすんなり店主の顔に戻って訊いて来た。

「うん。パーティーにダークハンターとレンジャーが居るからね。ひとりくらい威力重視が居た方がバランスも良いでしょ？」

ダークハンターの鞭はかなり速い筈だし、レンジャーの弓は全職業中最速だと聞いている。
僕が剣を持った所でこのふたりを超える速さは出せないだろうし、何より。

「剣よりかなりしっくり来るんだよね。もっと重くても良いくらい」

言いながら、軽く斧を振ってみせる。
店内だから、縦横無尽にとは行かないけど、鞭と違って軽い素振りくらいなら問題ない。

「へえ……キミには斧が合ってるんだね」

「みたいです」

やっぱり意外そうな声音が引っ掛かるけど、もう突っ込まない事にした。

＊　＊　＊

シリカさんの「また来てねー」と云う言葉に手を振って、僕らは店を後にした。

僕は最後に選んだ斧を、アークは試した鞭の片方を選んで買っていた。

斧の鞘と鞭のホルダーは、初回来店記念だと言ってサービスしてくれた。

もしも僕らが有名ギルドになったら良い宣伝になるから、とも言っていたけど、これだけ読めない先行投資も珍しい。

ほとんどイチかバチかの賭けに近いと思う。

そんな事を思いながら、隣を歩くアークを見る。

適当に丸めた鞭を提げたベルトの後ろに、短剣を一本装備している。

これもシリカさんの店で買ったものだ。

「鞭だと近距離戦闘はちょっと厳しいんだ。近寄らせないつもりだけど、一応ね」

僕の視線に気付いたらしいアークがそう教えてくれた。

「だったら剣にすれば良かったんじゃない？　剣が使えないって事無いよね？」

「そうだけど。どうせなら、ダークハンターしか使えない武器使おうかと思ってさ」

せっかくなった職業だし、とアーク。

確かに、剣を持てる職業は多いけど、鞭はダークハンターしか扱えない。

「それで行くと僕も斧を選んで良かったかも。斧ってソードマンしか使えないし」

そう言うと、ふ、とアークが笑った。

「……何？　その笑い」

「いや、斧で戦う剣士（ソードマン）とは、またややこしい立ち位置を選んだな、と」

「悪い？」

「いや全然？　むしろゼンらしくて良いんじゃない？」

「ややこしいのが僕らしい……て、どう云う意味？」

アークは「さあね？」と言うだけで教えてくれなかった。

００７）シリカ商店で武器選び【後編】（後書き）

※施薬衛生士＝メディック
作者の勝手な当て字です。

００８）広場を突っ切る

武器を買った僕らは、待ち合わせ場所として決めた街の広場へと向かった。
ここを待ち合わせ場所にした理由はとても簡単で、武具屋も冒険者ギルドもこれから足を運ぶ執政院も、全部この広場に面していたからだ。
待ち合わせの場所としては文句無しのこの広場は、しかし待ち合わせるには広過ぎた。

「広場の北側とか南側とか、それくらいは決めとけば良かったな」

冒険者でごった返した広場を見廻しながら、アークがぼやいた。

「そうだねー。まさかこうなるとは……」

僕も返事を返しながら赤く染まった広場を見ていた。
時刻は夕方で、探索を切り上げて戻って来た冒険者と、何か意図があるのか夜を狙って潜ろうとしているらしい冒険者とで、それはもう大賑わいな感じになっていた。
人影まばらだった昼間が嘘の様だ。
もしかして早朝もこんな感じなんだろうか。
単純に考えて、出て来る冒険者と入る冒険者の立場が逆転するだけだから、こうなる可能性は高い。

「……潜る時間を考えた方が良いかもな」

アークがそんな事を言った。
どうやら僕と同じ事を考えたらしい。

「そうだね。相談してみないと」

その前に合流出来るかどうかが問題な訳だけど。

「執政院の方に行ってみない？　何もヒントが無いよりは良いんじゃない？」

エトリアの街に来た冒険者が、樹海に潜る為にするべき事がふたつある。

ひとつは冒険者ギルドへ行き、冒険者として登録する事。

もうひとつは執政院へ行き、迷宮に入る許可を貰う事。

「……勝手に潜る人とか居ないのかな？」

これだけの数の冒険者が毎日の様に出入りしているなら、無許可で入る事も可能なんじゃないかと思う。

まさか、樹海の入り口で関所みたいに通行証の確認とかしてるんだろうか。

冒険者だらけの広場を突っ切って進みながら、ふとこぼした疑問にアークが答えた。

「確かに無許可で潜ろうとするヤツは居るだろうけど、まさか関所作って出入りを管理する、て訳にはいかないだろう」

「……何で？」

大して考える様な時間があった訳でも無いのに同じ推測に辿り着き、更には追い越して結論まで言ってしまったアークに疑問符を投げかけるのは、もうしようがない事だと思う。

「そんな出入りに時間掛かって行列出来そうな迷宮に、冒険者が集う訳が無い」
「あ、そうか」

アウトロー、と云う言葉があるけど、冒険者はまさに「法の外」に位置する人種だ。
理由はそれぞれだけど、依る社会が無い彼らは自分にとても忠実で、ちょっとでも気に入らないなと思ったら、ふらりと他所へ行けてしまう。
根無し草だから、我慢をする理由が無いのだ。だから気楽に居なくなる。
……まぁ、同じ冒険者の僕が語る事でもないけど。
ちなみに、ちょっと……いや、かなり辺鄙な場所だけど、僕らの家はちゃんとある。
今帰っても誰もいないけど。

「今回総出で来たからなぁ」

ぼそりと呟くと、アークが「ん？」と云う目でこっちを見た。
聞き取れなかったらしい。

「何でもない。セ・セツ達執政院に居るかな？」
「居ると良いけどね。先に宿取っとくべきだったか」

その日泊まる場所が決まっていれば、最悪でも夜には合流出来たんだろうけど。

「後の祭りだね」
「だな。……まぁ、何とかなるだろ。同じ街に居るんだから」
「そーだね」

完全に日が落ちても会えなかったら、今日の合流は諦めて宿を取ろうと云う話になった。

００９）広場の真ん中

結論を言うと、僕とアークだけで宿の手配をする必要は無くなった。

勿論、セ・セツ達が見つかったからなんだけど……。

「……アーク、行って来なよ」

「いや……ここはゼンが行くべきだろう」

僕とアークは人混みの中で、譲り合いをしていた。

「僕よりアークの方が口が回るんだから、事態の収拾には向いてるって」

「俺よりゼンの方が腕が立つんだから、現状の打開には持って来いだって」

ぼそぼそと会話する僕らの前方で、何度目かの閃光が弾ける。

「腕力に訴えるのは最終手段でしょ？　穏便に話し合いでケリ付けて来てよ」

「どうせ相手の逆鱗逆立てて終わりで、結局力でねじ伏せるんだ。最初っからゼンが行くべきだろ」

……訂正しよう。

僕とアークは野次馬に紛れつつ、なすり付け合いをしていた。

「どうして相手を怒らす事前提な訳？　しかも逆立てるって何、逆鱗て触るものだよね？　むしろ触っちゃいけないものの代名詞だよね？」

「何もしてなくても絡まれる人間が積極的に関わって、穏便に済む筈無いだろ。逆鱗だって剥がないだけマシだろうに」
「いや剥いじゃ駄目でしょ。て云うか剥げるの？」
「何なら順鱗にしようか？　こう、ぐっと立ててぱたっと倒せば」
「うん、止めとこうね。意味分かんないし」

こんな感じでどーでも良い会話をしばらく続けた。
どうせどっちも巻き込まれるだろうと分かっている。分かっているけど、抵抗してみるくらい良いじゃないか、とも思っている。
きっとアークも似た様な心境だろう。じゃないと今みたいな不毛な会話に付き合ってくれる理由が無い。
単なる現実逃避に近いなすり付け合いが一区切りした所で、僕は溜息をひとつ吐いた。

「……はぁ」（訳：諦めよう、アーク）
「……だな」

僕は溜息で話し掛け、アークはそれを理解する。
これは、別にアークが溜息言語を理解した訳じゃなくて、溜息と一緒に送ったアイコンタクトが通じただけだったりする。
僕とアークはある程度ならアイコンタクトでの会話が可能だ。
色々とクリアするべき前提条件はあるけど、非常時かセ・セツ絡みならまず間違いなく通じるので、割と便利だ。
今回はセ・セツ絡みだなぁとか考えつつ、僕らは諦める決意を固め、けれど渋々と進み出た。
そこは広場のほぼ中央、冒険者達のど真ん中だ。
さきほどまでの喧騒は、いつのまにか静まっていた。

「おや、あんた達」

進み出た僕らを見付けたセ・セツが声を掛けて来た。
その声音はごくごく普通で、だからこそその空間は異様だった。
「武器は買えた……みたいだね」
「ああ……うん」
僕が背負った斧とアークが腰に提げた鞭を見て、質問を断定に変更するセ・セツ。
「……あのさ、セツ」
「ん、何だい？」
正直あんまり訊きたくない。だけど訊かないと進まない。
て云うか、そもそも何て訊いたら良いのか分からないんだけど、どうすれば良いんだろうか。
「えっと……何してたの？」
何だか普通の質問になった。
「何……って、見て分からないかい？」
セ・セツの隣にオトーが居る。これは普通。
問題は、オトーが居るのとは反対側のこんもりした人の山だ。十人くらい居るんじゃないだろうか。
「変なのに絡まれたんでちょっと灸を据えたんだよ。頭の悪い奴ってのはどこにでも居るもんだね」
セ・セツは呆れた様にそう言った。

なぜか全員がちりちりアフロなのは、さっき見た雷が原因なんだろう。
そもそも僕とアークがセ・セツ達を見付けられたのは、地から空へと伸びた雷光の発生源を覗いてみようと寄って来たからだし。
多分、セ・セツは撃退ついでに術式の発動実験をしてみたんだろうな、と想像した。
中には頭皮がちょっと焦げてぷすぷすと細い煙を上げている人も居たけど、気にしない事にした。雷光こそ派手に立ち昇っていたけど彼らの状態を見るに命に別状は無いみたいだし、そもそも自業自得だ。

「うん。それは何となく分かってるけど……」

そこら辺は簡単に推測出来る範囲だから、まぁ良い。セ・セツが乱闘をしているくらいでは、僕とアークは驚かない。
その程度なら、現実逃避に近い無駄話なんかせずに、さっさと加勢するなり止めに入るなりすれば良い話だ。

「えっと……誰？」

人山（ひとやま）を挟んでセ・セツの反対側に居る人を指差し、思い切って訊ねた。

０１０）広場でお説教

その人は、くすんだ赤毛に褐色の肌をした、長身の女性だった。
淡いモスグリーンの瞳に宿るはっきりとした意志が印象的で、一度見たら絶対忘れない目だと思った。
けれどそれは近くで見た時に気付いた事で、遠くから見た場合は別の印象が残る。
彼女は、自身の身長の三分の二はありそうな、大きな盾を持っていた。

「私らが絡まれてたら助っ人してくれたんだよ」
「あ、うん。それは分かってる……何となく」

何故なら途中から見てたから、とは言わない。
僕らがセ・セツ達を見付けた時、撃退に動いていたのは盾を持ったあの人だけだった。
彼らは雷撃で倒された余波でアフロになったんじゃなくて、わざわざ髪の毛だけをちりちりに焦がされた人達だ。
結果だけを見ると誤解しそうだけど、僕とアークは過程を見ている。
一対多数の乱闘が起こっているその場所で。
気を失って転がる男達に雷撃を浴びせ、順次髪の毛だけを焦がして行くアルケミストなんて、他人のふりをしたくなるには充分過ぎる光景だと思う。
アフロにする為だったと云うのは、近寄ってから気付いた事だけど。
つまり、どうしてそう云う事態になったのか、なんでそう云う事をしようと思い立ったのか、とかを訊こうとしたんだけど……。
駄目だ。僕には欲しい情報をセ・セツから訊きだせる自信が無い。

割と一瞬でそこまで考えて結論を出すと、無理です助けて、と云う思いを込めて隣に立つアークを横目で見た。
アークは溜息とも言えないほど小さく息を吐き出すと、一歩だけ僕より前に出た。

「そもそも何で絡まれたの？　て云うか、誰が？」
「どうして絡んで来たかは、こいつらが起きたら訊いとくれ。誰が、は……そう云えば、誰だろうね」
「て事は三人揃ってる時に寄って来たんだ？」
「そうだよ。口で言って分かる輩じゃなさそうだから無視していたら、いつの間にやら人数が増えててねぇ――」
アークがセ・セツと話すのを横で聞いていると、人山（ひとやま）の向こうの女の人が手招きしているのに気付いた。

「……？」

僕に用？　と云う意味を込めて自分の顔を指してみると、うんうんと頷かれた。
ちらっと隣のアークを窺うと、何故かセ・セツの錬金技術の話になっていたので、これはまだまだ長そうだなと判断して、声を掛けずにその場を離れた。
離れた、と言ってもそもそも断りを入れるほど離れてないから、十歩も歩かずに辿り着く距離だ。
その短い距離の最中、人山の横を通る時に、人山の中のスキンヘッドの人が眉毛をちりちりに焦がされていたのを見付けてしまった。
アフロヘアーならぬ、アフロマユゲ。
……放置する事にした。

「僕にご用ですか？」

「あの人たちの仲間の人だよねー？」
「はい。あ、助けてくれたそうで、どうもありがとうございました」
ぺこり、と軽く頭を下げてお礼を言う。
しばき倒している時の妙にイイ笑顔は気になったものの、助けてくれたのは素直に感謝している。
「それは良いんだけどー」
それまでにこにこしていたその女性は、ふと真面目な表情になると、こちらを覗き込む様に顔を少し近付けて来た。
「……何ですか？」
その行動と気配にちょっと圧されて仰け反ってしまった僕を気にする事なく、女の人は口を開いた。
「めっ」
「……はい？」
まるで小さな弟か妹を叱る様な事をして来た女の人に、思考が軽く混乱した。
「ダメだよー、男の子は女の子を守らないとー」
なんだか間延びした話し方をする人だなぁ、とちょっとだけ関係の無い事を考えつつも、どうやら叱られているらしいと云う事とその理由は理解出来た。
要するに、女性だけで行動させるな、と云う事らしい。
確かに、冒険者と云う荒くれ者だらけの街で女の人だけで行動す

るのは、安全だとは間違っても言えない。

「……すみませんでした」

結果としてセ・セツ達は無事だし、色々と反論しようと思えば出来る材料はあるけど、ここで反論すると云うのは、結構最低な男になってしまうので出来ない。て云うか、したくない。

彼女はそんな僕の顔をしばらくじーっと見ていたけれど、ふぅと小さく息を吐くと姿勢を戻した。

「うん、反省してるみたいだしー。今回は無事だったから許してあげるー」

でも次はあったらダメだよー、とにっこりと笑顔で諭された。

０１１）広場に地雷原（前書き）

今回はイアーク視点です。

０１１）広場に地雷原

「私らが絡まれてたら助っ人してくれたんだよ」
「あ、うん。それは分かってる。……何となく」

ゼンは歯切れの悪い返しをした一拍後に、無理です助けて、と云う視線を寄越して来た。
きっと今の一瞬で色々考えた結果のギブアップだろうし、一応は訊き出そうと頑張った様だし。
まぁ、良いか。
そう結論を出すと、小さく息を吐いて、ゼンの隣から一歩だけ踏み出す。

「そもそも何で絡まれたの？　て云うか、誰が？」
「どうして絡んで来たかは、こいつらが起きたら訊いとくれ」

セツのその言葉で、答えは出た様なものだった。
よく考えたら、いや、よく考えるまでもなく、女だけで歩いていたら、ガラの悪い奴が良いカモだと思って寄って来ても仕方がない。
俺は内心で自分達の迂闊さに舌打ちした。

「誰が、は……そう云えば、誰だろうね」
「て事は三人揃ってる時に寄って来たんだ？」
「そうだよ」

旅の間に人の視線に慣れてしまったからか、うっかりしていた。
セツは何故か人目を引く。
これはセツの外見や行動がどうこうじゃない。
悪目立ちしない程度にフードを被せて、ただ黙って歩いていても

視線を集めたから、間違いない。
クレアは誰が見ても美人だろうし、オトーはまだ子供だ。
そんな三人が男手もなしに出歩けば、寄って来るバカが居るだろう事くらい気付くべきだった。
勿論、そんな頭空っぽ野郎共にセツとオトーが負けたり騙されたりするとは思っちゃいない。
思っちゃいないが、そんなボケ共が俺の家族に近付いたと思うと腹が立つので、次からは俺かゼンが同行する事にしよう、と内心で決意した。
今回の奴らは、誰か知らないが赤毛の女が全員伸してくれたみたいだから、まぁ良しとする。

「口で言って分かる輩じゃなさそうだから無視していたら、いつの間にやら人数が増えててねぇ」
「多分、退路を断つ為に待ち伏せしてた仲間が居たんだろうな」

そいつらが、仲間を全く相手にしないセツ達に痺れを切らして出て来たんだろう。
あーゆうバカ共の考える事なんてたかが知れてる。
今もバカっぽい顔で気絶してるし。

「ところでセツ、いつのまに雷術使いこなせる様になったんだ？」

しばき倒されて気絶した奴ばかり狙って雷を落としていたから変だなと思っていたが、人山（ひとやま）になった奴らを間近で見てその理由は分かった。
動機はさっぱりだが、セツが何考えてるか分からないのなんて今に始まった事じゃないので、気にしない。

「……使いこなしている様に見えたかい？」

「見えた。髪の毛だけを焦がして頭部に損害が無い様にするのは、かなり精密な作業だと感じたんだけど？」

見た所、後遺症が残りそうな奴も見当たらない。

つまり、失敗してないって事だ。

セツは錬金術に手を出してからまだ日が浅かった筈、と思って軽い気持ちで訊いたんだけど……、後から思えば、これが地雷原の入り口だった。

「そうかい。使いこなしている様に見えたかい。実際はまだまだの筈だけどねぇ」

何だろう、いやーな予感がする。

視界の端にゼンが人山の向こうに歩いて行くのが映ったが、それに構ってはいる暇はなかった。

「まぁ、イアーク。他ならぬあんたにそう見えたってんなら、私の錬金術も、そこそこの精度にはなったんだろうさ」

「……いや、俺の目はそこまで信頼を置かれる程良くないけど……」

お前はミスをしたぞ、と俺の中から声がする。

どうせならそのミスを挽回する方法でも教えてくれれば良いのに、その声は諦めろと囁いて来た。

「良いじゃないか。私が勝手に信を置いてるんだ、見立てが外れてたって、見込み違いと責めやしないよ」

「いや、セツがそんな事するとも思ってないけどさ……」

伊達に長年一緒に居る訳じゃないから、セツの性格くらい把握している。

そう、知っている筈なんだ。
なのに、俺は話題を変えようとして、とうとう地雷を踏んだ。
「そう云えば最初は炎系がオススメらしいけど炎系は使わないの？」
しかも息継ぎ忘れた。
「あぁ、炎系は御し易いって聞くね。だから初心者はまずそこに手を出すらしいけどさ、一度燃したら中々消えないだろう？　うっかりで樹海の植物を焼き尽くしちまったら笑えやしない」
それじゃ本末転倒だよ、と言うセツを見ながら、俺は自分のミスが何だったのかを悟り、そして内なる自分のアドバイスを受け入れる選択をした。
それは「諦めろ」と云う囁き。それが、何に対しての諦めかと言えば。
「それで雷系の実験をしていたのかと言えば、少し違うんだけどね。それしか無かったって言うのかね。人間相手に炎系使ったって、程度の大小はあっても火傷くらいしか成果は出ないだろう？　なら、もうひとつの氷系かと言えば、これだって凍傷が精々だろうし。それに、あんまり強過ぎてショック死されても寝覚めが悪いだろう？
まぁ、雷系でもショック死の可能性はあるんだけどさ」
探究者としてスイッチが入ってしまったらしいセ・セツから、延々と話を聞かされる事に対する諦めだった。

＊　＊　＊

「汎用性と威力調整面から判断すると、やっぱり雷系なんだよ。見た目としても派手だしね」

いきなり始まった息吐く間もない喋りは相槌を打つ暇さえ与えてはくれないが、かと言って聞いていないとまた一から説明を始めて永遠に終わらないと云う事を経験で身に沁みて知っている俺は、途中さっぱり付いて行けなくなったりしたセツの錬金術談議をとにかく頭に叩き込む事に集中していた。

オーバーワーク気味になった俺の頭の回転速度は普段よりも鈍くなっていたんだろう。

目の前に居るセツの背後に現れた人物に対する反応が、致命的に遅かった。

「はい、そこまでー」

音もなくセツの背後に回り込んだ赤毛の女（名前は知らん）は、朗々と語っていたセツの口を塞いで遮ると云う、俺やゼンにはとてもじゃないがマネできない行動に出た。

暴挙と言っても良い。

「術者が術式について語りたいのは分かるけどー、あんまり長いとあの子がカゼひいちゃうよー？」

セツの口を塞いだ赤毛の女は、やっぱりセツの口を塞いだままでちらりと視線を後ろへ流す。

促されたセツと俺がその視線を追ってみると、オトーがクレアの膝枕で気持ち良さそうに眠っているのを見付けた。

「クレアって、小さい子が好きなのかな」

いつのまにか俺の隣に立っていたゼンが、そんな事を呟いた。

０１１）広場に地雷原（後書き）

イアークはイーゼンに比べて、ちょっとガラが悪いです。
そんでちょっとだけ猫かぶってます。

セ・セツの「使いこなした」発言は、「今の実力で使える術」についての出力調整とコントロール力の話です。
一度も樹海に入ってないのに使いこなした、て何？　と思った方、紛らわしくてすみません。
レベルが上がって上がるのは、最大威力と使える術のバリエーションになる感じです。

０１２）広場で治安の話

セ・セツ達に絡んで来た男達を気絶させたのは、たった今僕が叱られたくすんだ赤毛の女の人。

気絶した男達の髪の毛をアフロにしたのは、何を考えたんだかまったく不明なセ・セツ。

じゃあ、その気を失った挙句にアフロにされた人達を積み重ねてちょっとした人の山にしてしまったのは誰か、と言うと。

「まさかあのちっさい子がわたしより大きな男の人を動かせるとは思わなかったよー。動かすって云うより投げてたけどー」

びっくりしたよー、とそんなに驚いた風にも見えないほけほけとした笑顔でキルシェさんは言った。

彼女はキルシェ・カードと言うそうだ。

冒険者が家名を名乗ったのがちょっと意外だったけど、どうも偽名らしい。

なんでそう思ったかと言えば。

「キルシェ・カードだよー。キルシェ、て呼んでくれると嬉しいなー。カードはまだ慣れてないからー。キルシェは結構馴染んだんだけどねー」

あはははー、と隠す気ゼロにもの凄くあっさりと「偽名です」宣言をしてくれた。

人にはそれぞれ事情があるし、悪い人には見えないから、まぁ良いかと流す事にした。

ちなみにオトーが意識のない男達を放り投げたと云うのは本当の事で、効果音を付けるとしたら「ぺいっ」になるだろうな、と云う

くらいに軽々と投げていた。
十代前半の小柄な女の子が大の男をまるでゴム毬みたいに投げる、と云うシュールな事態を目撃したにも関わらず、この余裕は凄いと思う。
何が凄いのかよく分からないけど。
そんな風にキルシェさんと話をしていると、街の巡回兵らしい人が二人やって来た。
もう乱闘は終わっているから野次馬もほとんど居なくなっていたけど、十人ほどの人間が積み上げられているのはさすがに目立つ。
一方的に僕らが何かしたと思われては大変だ、と慌てて事情を説明しようとしたら、遮られた。
「いや、大体の事情は分かっているよ。実は、女性がガラの悪い冒険者に絡まれていると報せが入ってね」
「それで急いでやって来たんだが……君達が助っ人に入ったのかい？」
人山（ひとやま）を見て、その隣でセ・セツと話しているアークの背中を見て、最後に僕を見た。
「いえ、僕らは何もしていません。助けに入ったのはこの人です」
そう言いつつ、掌でキルシェさんを指し示す。
「失礼だが、貴女がひとりで……？」
戸惑った様な声で確認する兵士のひとりに、キルシェさんはやっぱり笑顔のままでこっくりと頷いた。
「そうか……あ、いや、失礼した。貴女の様な淑女が腕が立つとは

少々意外だったものだから」

淑女て。

鎧を着込んで一メートルを超す大きさの盾を持っている、淑女。

いや、そう云う淑女がいないとは言わないし、キルシェさんが淑女じゃないって言ってる訳でもないけど……。

僕の何か言いたげな視線に気付いたのか、もうひとりの兵士がこっちを向いた。

「こちらのレディが助けたのなら、君達は？」

あなたもですか。て云うか今度はレディですか。

何だろう。この街の兵士は実は騎士なんだろうか。

何となく突っ込んだら負けな気がしたので、ぐっと堪(こら)える。

「……僕らは、その絡まれていた人達の仲間です。別行動をしていて、合流した時にはもう騒動は終息していて」

正確には、僕らが諦める決意をして渋々進み出た頃には、だけど。

そこを正確に正直に言うと、なんだか仲間を見捨てたみたいに取られそうなので誤魔化す事にした。

こう云うのはアークの方が得意なんだけどなぁ、と心の中だけでぼやいておく。

「そうか。……夕方以降は、女性だけで出歩かせるのは止めておいた方が良い。この街は少々治安に不安がある。我々も尽力してはいるが……」

兜で目元は見えないのに、苦々しそうな顔をしてるんだろうなぁ、と想像出来てしまう声音で、兵士はそんな事を言って来た。

治安が不安な原因は、多分僕らみたいな冒険者の流入が原因だろうに、その冒険者に力及ばず申し訳ない、みたいな事を言うこの兵士に好感を持った。
……女性をレディとか言っちゃう人だけどね。

「では、後の処理は我々が請け合おう。君達は早く宿に行くと良い」

苦々しげな様子を一瞬で消すと、兵士はそんな事を言った。

「え、でも良いんですか？」

僕ら側からしか事情を聞いていないのに解放しても。
そんな意図を込めて尋ねると、構わないとあっさり言われた。

「彼らは度々騒ぎを起こしていてね。我々の間でも、要注意ギルドとして顔が知られているくらいなんだ」

それに、見物人と云う目撃者も沢山居ただろう？　と言われて、あぁそう云えばと思い出した。
そもそも、女性が絡まれてると兵士に報せに行ってくれた人も居るんだった。

「それじゃあ、お言葉に甘えて失礼します」
「ああ、ゆっくり休むと良い」

そのままセ・セツ達の方へ行こうとして、ふと思い付いてもう一度声を掛ける。

「あの、知ってたらで良いんですけど、どこか良い宿屋知りませんか？」

街の兵士が紹介してくれる様な宿があれば、安全面で段違いのものがある。
世の中には性質(たち)の悪い兵士も居るだろうけど、この人は大丈夫そうだし。

「……ふむ。君達は、最近街に来たのかい？」

僕の質問に、顎に手を当てて少し考える仕種を見せた後、そんな事を訊いて来た。

「はい。今日着いたばかりです」
「そうか。それなら、この広場に面した『長鳴鶏の宿』と云う所に行くと良い。新米冒険者には便利な宿だ」

そう言って店の方向と看板の特徴を簡単に教えてくれた。

「分かりました『長鳴鶏の宿』ですね。ありがとうございます」
「何、大した事じゃない。それじゃあな」
「はい、では今度こそ失礼します」

僕は兵士にお礼を言うと、今度こそ会話を切り上げた。
もう日は完全に沈んでいて、辺りはすっかり暗くなってしまっている。
早く教わった宿に行こうとセ・セツ達に声を掛けようとして……固まった。

「ゼン君？　どうしたのー？」

僕が不自然に停止したのを疑問に思ったらしいキルシェさんが話

し掛けて来た。
そう云えば一言も喋らなかったけど、キルシェさんもずっと居たんだよな。
この人も早く宿に行かなくて良いのかな、とふと思う。

「……いえ、セ・セツのスイッチが入ってるみたいで……」
「スイッチー？」
「はい……」

見れば分かる。
滔々と喋り続けているセ・セツと、疲れた様なアークの背中。
あれは、セ・セツの探究結果を延々と聞かされている最中だ。僕も何度も体験したからよく分かる。
これは困った。
あのセ・セツを止めるのは結構な覚悟が要る。
下手な切り上げ方をさせると逆効果で、セ・セツの語りが更に長くなりかねないのだ。
どうしようかと悩んでいる僕と、アークに延々喋り続けているセ・セツ。そのふたつの間で何度か視線を往復させたキルシェさんは、何か納得したのか、ひとつ頷くと、すっと動いた。

「キルシェさん……？」

僕の声にちらりと振り向いて、にっと笑った。
それは「まかせて」と言ってるみたいに見えた。

０１２）広場で治安の話（後書き）

名も無き兵士さんに、変なキャラが付きました。

０１３）それぞれの寝起き事情

「おはようございます、今日も良い天気ですよ」

聞きなれない声の、そんな言葉で目が覚めた。

「探索には持って来いの天気……と言いたい所ですが、地下ですから、入ってしまえば関係ありませんかね」

爽やかそうなその声の後に、シャッ、と何かが走る音がする。

直後に室内の明かりが強くなったので、カーテンを開けたんだな、と分かった。

それまでが薄暗かったから、いきなりの光で一瞬視界が白く染まる。

「まぶし……」

思わず呟くと、もう一度「おはようございます」とその声が言って来た。

「……おはようございます」

「よく眠れましたか？」

「えーと……おかげさまで？」

「それは良かった。朝食はどうされますか？　お連れ様は階下にて召し上がるそうですが」

「あー……おなじく」

「了解しました。それでは準備が整いましたら一階の食堂へとお越し下さい」

「……はい」

では、と声の主はさっさと部屋を出て行く。
その後ろ姿をぼんやりと見送る。
しばらくして、ようやく頭が働き出した。
「……泊まった客の部屋に勝手に入って来る店員さん、てどうなの？」
僕の呟きに返って来たのは、まだ眠るアークの静かな寝息だけだった。

＊　＊　＊

昨日スイッチが入って語り倒していたセ・セツは、キルシェさんの無理矢理口を封じると云う手段でスイッチを切る事に成功した。
この方法、過去に僕やアークも試した事は勿論ある。
だけど、その時は見事に逆効果になってしまい、更に倍の時間を拘束されると云う結果に終わった為、それからは実行していなかった。
だったらどうして昨日のキルシェさんは成功したのかと云うと、オトーが眠ってしまっていたからだ。
日が暮れた広場の石畳の上でなんて寝ていたら、体が冷えて確実に風邪をひいてしまう。
風邪をひかせる訳には行かないと、さすがにセ・セツも話を切り上げ、すぐに宿屋に向かう事になった。
ちなみにオトーがどこででも寝てしまうのは今更で、僕らが起こすと云う選択をした事はあまりない。
僕とアークはオトーが寝ているのを見ていると癒されると云う理

由で。
セ・セツは本人が昼夜無視した無茶苦茶な生活サイクルだったので、他の人も好きにすれば良いと云うスタンスらしい。
そんな訳で、オトーは起こさずに背負って行こうと云う話になり、アークが宿まで運ぶ事になった。
アークに決まった理由は簡単で、まず男手で前衛担当と云う体力がありそうな僕かアークに的が絞られ、僕の方は斧を背負っていた為、消去法でアークになった。
斧みたいな重いものを腰から提げたりしたら、重心がそっちにぶれてしまう。
いつ戦闘になるか分からない場所に行くのにそれは致命的だろうと、背中に背負う事にしたのだ。
キルシェさんは別に宿を取っていると言うので、その場で別れた。
そうして僕らは兵士さんに教えてもらった宿へと向かい、部屋を取った。

＊　＊　＊

店員さんの乱入にも朝日の眩しさにも負ける事無く寝ていたアークを何とか起こして、一階にあると云う食堂に向かう。
「オトーはともかく、セツまでもう起きてるとは珍しい」
欠伸を噛み殺しながらアークが言う。
「寝たのが早かったんじゃない？　セ・セツって、睡眠時間自体が短いみたいだし」
「あぁ、そーいえば」

僕らがもっと小さい時に「五時間とは、寝過ぎたねぇ」と、ぼやきながら起きて来た事があった。
しかも寝過ぎて頭痛がすると顔をしかめ、頭を押さえて呻(うめ)いていた。
その頃僕は毎日八時間は寝ていたから、セ・セツの感覚について行けないと思った覚えがある。
今は五時間くらい寝れば問題ないけど、理想としては七時間くらい寝ていたいし、セ・セツの感覚にはやっぱりついて行けてない。
ついでに言うと、アークはセ・セツの真逆で長時間寝ないと持たないタイプらしく、放って置いたら半日は余裕で寝ている。

「クレアも早起きみたいだね」
「……ひとりで樹海に潜ってたら、そんなモンなんじゃないか？」

やっぱりまだ眠そうに口を開くアーク。
七時間以上は寝た筈だけど、以前「十時間は寝ないとキツイな」とぼやいていたのを思い出す。
だけど起きるのがキツイだけで活動に支障はないらしいので、特に気にしない事にしている。

「……で、食堂ってどこ？」

階段を降りきった所でアークが訊いて来た。
実を言えば、僕も正確な場所は知らない。
昨日は部屋まで案内してもらっただけだったし、今朝も「一階の食堂」としか言ってなかったし。

「うーん……あ、あっちじゃない？　皆向こうに向かってるし」

明らかに冒険者っぽい人達が出入りしている扉を指差す。
そうやって意識を向けると、その扉から良い匂いが漂って来ているのにも気が付いた。

「確かに……。じゃ、行くか」
「うん。セ・セツ達すぐ見つかるかなぁ」

部屋を出てから女性陣の部屋を訪ねてみたけど、誰も居なかった。
先に食事に向かったんだと思うけど……。

「……何だか、昨日からセ・セツを探してばっかりな気がする」
「……言うな、ゼン」

アークも似た様な事を考えたらしい。
微妙にテンションが下がった僕らは、だけどすぐに頭を切り替える。

「今日は樹海に潜るんだよね？」
「だと思うけど……執政院はどうなったんだ？」
「昨日セ・セツ達が行ったんじゃない？」

この程度で落ち込んでいたら、セ・セツと一緒には居られない。
今日これからの予定を話題に、僕らは食堂へと向かった。

０１４）朝の食事とこれからと

「あぁ、執政院なら昨日行ったよ」

芯まで火の通った目玉焼きをナイフで切り分けながらセ・セツが言った。

僕らが食堂に入る前に話していた予想は当たっていたらしく、ギルドでクレアを登録した後、執政院にギルドの届け出を持って行ったらしい。

つまり、広場の騒ぎはその帰りに起こった事になる。どうでも良い事だけど。

「じゃあ、もう樹海には潜れるの？」

「潜れると云えば潜れるんだけどねぇ」

フランクフルトソーセージに齧（かぶ）り付きつつの僕の質問に、セ・セツが微妙な表現をした。

「探索に条件でも付くとか？」

ロールパンを割って色々と挟みながら適当に言ったっぽいアークの言葉に、セ・セツがにやりとする。

「なかなか鋭いね、イアーク」

「え、ほんとに条件付きなの？」

「ギルドを組んだばかりの冒険者は、冒険者として認めないんだってさ」

セ・セツは割とどうでも良さそうな口調でそう言うと、かりかり

に焼かれたベーコンをフォークで丸めて突き刺した。

「なにそれ」

まさか、ギルドを作ったら樹海に入るまでに待機期間でも設けられるんだろうか。

いや、それはさすがに意味が分からない。

「執政院が指定した範囲の地図を作って持って来い、だってさ。それが出来れば最低限の実力はあると見なして、探索範囲を広げる許可が出されるんだそうだ」

そこまで言って、ジンジャーエールをぐいっと飲み干す。

実は朝からアルコールを頼もうとして、僕とアークどころかクレアにまで止められて、かなり渋々諦めたセ・セツだったりする。

ちなみにそのクレアは、セ・セツを止めた時と朝の挨拶以外は喋らずに、今も黙々とシリアルを食べている。

更にどうでも良い話をすると、朝食はバイキング方式になっていて、好きなメニューが好きな量だけ食べられる様になっている。

おかげでオトーがさっきからずーっとフライドポテトを齧っているけど、それだけだと栄養が偏り過ぎるので、後でサラダでも取って来て食べさせようと思いながら話を続けた。

「えっとつまり、探索出来るって事で良いんだよね？」

「そうだよ。一応、だけどね」

「要するに、探索は出来るけどある程度で切り上げないとダメ、て事か」

アークがそう言いながら、ロールパンにレタスとトマトとスクランブルエッグを挟んだものをオトーの前に置いた。

色々挟んでいたのはオトーに食べさせる為だったらしい。サラダ取って来なくて良いかも。

「まぁ、初日から無理する気も無かったし、構いやしないんだけどね」

「じゃあ、食べ終わったらすぐに樹海に入ると考えて良いのか？」

「そうだねぇ……いや、その前に寄り道して行こうか」

「寄り道？」

ライ麦パンにバターを塗りながらセ・セツに訊き返すアーク。

「施薬院（せやくいん）に寄ってみようかと思ってね」

「施薬院？」

そう、と頷くとセ・セツはクレアを見た。

「昨日の晩にクレアが言ったんだよ。樹海に潜る前に一度は足を運んどいた方が良いってさ」

その言葉にクレアを見ると、いつの間にかシリアルを食べ終えて、半分に切ったピンクグレープフルーツをスプーンでつついていた。

僕らの視線が自分に寄せられたのに気付くと、スプーンを置いてゆっくりと口を開く。

「……そう、ケフト施薬院。場所を知っていないと、最悪の事態になった時、手遅れになる。それに出来れば、メディカをいくつか買って行った方が良い」

「メディカ？」

メディカって確か、消耗した体力を回復する薬、だっけ。

僕の言葉にクレアはこっくりと頷くと、言葉を続ける。

「……そうだけど、それだけじゃない。メディカは、軽い傷ならその場で癒せる」

「ウチにはメディックもちゃんと居るけど、それじゃあ足りない、てコト？」

アークが、自分が作ったロールサンドを頬張っているオトーを目で示す。

別にアークに他意は無いんだろう。

そんなに長く潜る予定も無い上に、回復スキルを持ったメディックが居る。

初めての樹海と云う事もあって、荷物は出来るだけ軽い方が良いんじゃないかと云う考えだと思う。

けれどクレアはふるふると首を横に振った。

「……その子は、メディックになったばかり。成り立てのメディックなら、メディカの方が回復量は多い。それに、薬があれば、メディック以外でも回復が可能になる」

なるほど。

回復量云々は見た事無いから何とも言えないけど、後半は確かに重要だ。

メディックの回復手段と云うのは、メディック以外には使えない。

何が起こるか分からない事を考えれば、誰もが使える回復手段はあった方が良いに決まっている。

「ま、そんな訳で施薬院へ寄り道する訳だけどさ」

僕とアークが納得したらしいのを見て取ったセ・セツが声を上げ

る。

「他に誰か、どこか寄っておきたい所はあるかい？」

その言葉に、僕とアークが同時に手を上げた。

「おや、どこだい？」

セ・セツの言葉に、僕とアークは視線を交わす。

どうやら、言いたい事は同じらしい。

セ・セツに視線を戻して口を開く。

『シリカ商店』

僕とアークの声が重なった。

「理由を聞こうか」

「防御をもうちょっと何とかしといた方が良いかと思って」

「昨日行った時にいくつか軽そうな防具も見たし」

一応、旅をしている時から山賊やら何やらと戦闘になった時用に、そこそこの防具は付けている。

だけど、迷宮の生物はそれとは別、と云う印象をクレアの言葉から受けた。

それで少し不安になった所で、そう云えば昨日のシリカさんの店でいくつか防具を売っていたなと思い出した。

あまりお金が無いから買うとしても安い装備になるだろうし、良いものが無くて結局買わないでこのまま迷宮に向かうかも知れない。

だけど迷宮に入る前に見ておく価値はあると思う。

昨日は防具まではよく見てなかったから、もしかしたら丁度いい

ものがあるかも知れないし。
そんな感じの事を、アークと交互に説明した。

「まぁ、及第点かね」

僕とアークの説明を聞いたセ・セツはそんな事を言った。

「……セ・セツ」
「ん、何だい？」
「そのさ、全部分かってるのに僕らに説明させる癖、止めようよ」

分かってる人に説明するほど、むなしい事もあまりない。
だけどセ・セツはにやりと笑うと、僕とアークの抗議を無視して話を進めた。

「それじゃあ、今日の予定はシリカ商店とケフト施薬院を回ってから樹海に潜る。これで良いね？」
『……了解』

僕とアークは諦めを込めた返事を返した。

０１５）戦わない錬金術師

世界樹の迷宮には、いくつもの名があると云う。
失われし大地。
未踏の楽園。
神の箱庭。
地下世界。
そこは人間にとって、未知の領域。
見た事もない生物達が作り上げる生態系。
これまで人間が組み込まれていなかったのは、人間がそこに存在しなかったからに過ぎない。
一歩でも足を踏み入れれば、誰であろうと何であろうと食物連鎖に組み込まれる。
何も分からない迷宮の、分かり易い絶対の法則。
それがつまり、弱肉強食。

＊　＊　＊

こちらに向かって敵意とも殺気とも取れるものを放つ敵と向かい合う。
足の運び、鋭い門歯（もんし）に注意を払い、飛び掛かって来るだろう時を待つ。
距離とタイミングを計り、今だと思った所で一気に腕を振り下ろすと、斧を持つ手に確かな手応えが返った。
次のターゲットを探して辺りを見回すと、今のが最後の一匹だったらしく、少し離れた所からアークが手を振って合図して来た。

「ふぅ……」

構えていた斧を下して、一息吐く。

人跡未踏の地下樹海だって聞いていたから、それなりの不気味さや薄暗さを覚悟していた。

だけど、いざ樹海に足を踏み入れると、そんな覚悟は霧散した。

木々を通した太陽の光は柔らかで、さわさわと静かな葉擦れの音は優しい。

時折甲高い鳥の鳴き声が響いてくるこの森は、目的を忘れて森林浴に耽(ふけ)りたくなるほどに魅力的だった。

いきなり何の脈略もなく襲ってくる森の生物達が居なければ、だけど。

「みんな、無事かい？」

セ・セツの声に、思考が現実に戻される。

頭の中でさっきまでの戦闘を再現して、攻撃を受けたかどうか思い返す。

冷静に対処したつもりだけど、命の奪い合いをしていた訳だから、神経が昂っていてもおかしくない。

そしてそんな精神状態だと、怪我をしても意外と気付けなかったりするから要注意だ。

気付いたら失血死寸前、なんて笑えない事態は遠慮したい。

だから、攻撃を受けていないと判断した上で、それでも自分の体を目で見て、怪我が無い事を確認した。

「僕は平気みたい」

「俺も問題ナシ」

僕の返事にアークが手を挙げて同意する。

クレアを見ると、彼女も大丈夫だと言う様に頷いた。
オトーは前線から離れたセ・セツの隣に居たから大丈夫だろう。
誰も大した怪我を負っていない事にほっとする。
ほっとすると、樹海に入ってからずーっと、じわじわと気になっていた事がまた気になりだして、その元凶へと視線を向けた。

「なんだい、イーゼン。そんなじとーっとした目で」

問題の人物はセ・セツだった。
彼女は戦闘になると、オトーを連れてさっさと安全地帯へ下がってしまう。
セ・セツが打たれ強いとは全く思わないから前衛に出ろとは言わないし、むしろ安全圏に下がってくれるのはオトー共々心配が減るから良い事だ。
だけど、もう少し戦闘に参加してくれても良いと思う。
アルケミストの術式は、かなりの戦力になる筈だから。

「私が出ないのは保険だよ」

そんな僕の言い分を聞いて、セ・セツはさらりとそう言った。

「保険？」
「そう。今は物理攻撃で何とかなっているけどね。いずれ物理耐性の高い輩（やから）が出て来るだろうと、私は踏んでいるんだよ。いざ遭遇した時に、火力切れになってたら拙（まず）いだろう？」

アルケミストが術を放てる回数には制限がある。
本人のレベルや使う術の威力にもよるけれど、今のセ・セツはまだまだ駆け出しだから、すぐに限界が来るんだろう。
居るかどうかも不確定な敵の話ではあるけれど、現状セ・セツ抜

きで対処出来ている以上、戦力の温存に損は無い。
つまり、セ・セツが正論なのだ。
僕がそう結論付けるのを待っていた様なタイミングで、アークが僕の肩に手を置いた。

「ゼンの負けだな」
「……そーだね」

僕自身、最初からセ・セツに勝てるとは思ってなかったから、ほとんど言ってみただけに近い。

「じゃあ避難に徹してくれて良いけどさ。危ないと思ったら手を貸してよね」
「分かってるよ。温存が過ぎてあんたたちの命を危険に晒す様な、馬鹿な真似をする気はないさ」
「うん、よろしくね」

とりあえず会話を切り上げ、移動を開始するべく準備する。
準備と云っても、倒した敵の換金部位を採取するだけだけど。
樹海の生物は色々と加工して使える部位が多いそうで、「持って来てくれれば買い取るからね」とシリカさんが教えてくれた。
どこをどう採取するかは冒険者の裁量次第だと言われたけど、今回の敵はネズミだったから大して採るべきものは無い。
とりあえず、鞣(なめ)したら使えそうな皮と鋭利な牙を採取しておく。
三匹倒したので、僕とアークが一匹ずつ、女性陣で残る一匹を担当してもらう。
本来なら、血と戦闘の気配が残る場所は他の獰猛な生物を呼び寄せてしまうからさっさと離れるべきだけど、この森は違う。
どうしてなのか、この森の生物は戦闘の気配を感じる場所へはほとんど近付いて来ないらしい。

活動資金の残りがかなり不安な僕らにとって、換金部位をしっかり採取出来るこの事実はありがたかった。

「ところでさ、セ・セツ」
「何だい、イーゼン」
「物理耐性を持った敵、てどんなの想定してるの？」
「そうだねぇ……硬い外骨格を持った輩なんか、居るんじゃないかと思ってるよ」
「外骨格て云うと、……カニとか？」
「いや、こんな森の中にカニは居ないだろう、ゼン」
「じゃあアークはどんなのが居ると思う？」
「外骨格だろ？　うーん……昆虫、とか」
「昆虫？」
「そう。カブトとかクワガタとか？」
「……それが、敵？」
「すっげぇ巨大かもよ？　さっきのネズミだって、ネズミにしては大きかったし」
「知ってるかい、あんたたち。ムカデも外骨格の持ち主なんだよ」
「巨大ムカデ？」
「……やめてよ、二人共。足をわさわさせた巨大ムカデに立ち塞がられる光景を想像しちゃったじゃないか」
「っそれを具体的に言うなよゼン！　俺までうっかり想像したじゃないか……うぇ」

巨大ムカデ説にぎゃあぎゃあ騒ぐ僕らを見ているクレアが何か言いたげだった事に、僕もアークも気付かなかった。

０１５）戦わない錬金術師（後書き）

ムカデが苦手な方、申し訳ありません。

016）ここはどこですか

陽光を反射してきらきらと輝く粉が舞う。
風上では巨大な蝶が、紫色の羽をひらめかせてホバリングしている。
いけない。
――これを吸い込んではいけない！
そう叫んだのは誰だったのか。
或いは自分の心の声だったのかも知れない。
気付いた時にはもう遅かった。
どさり、と云う音を耳が拾う。
いくつも、いくつも。
それはまるで絶望の足音の様に、鼓膜を強く揺さぶった。

＊　＊　＊

僕は叫んだんだと思う。
何と言ったのかは分からないけど。
「……あ、れ？」
そこは、知らない場所だった。
上半身を起こすと、僕の上から白いものが滑り落ちる。
それはきちんと折り目の付いたシーツで、ふわりと石鹸の匂いがした。

僕はベッドの上に居て、その横には水差しが置かれた小さなテーブルとシンプルな椅子が一脚だけ。
扉と窓がひとつずつのこの部屋は、僕しか居ないと一目で分かった。
大きめの窓が少し開いてレースのカーテンを揺らしている。
改めて観察してみても、やっぱり知らない場所だった。
自分の声で目が覚めるなんて冗談みたいな体験をしたせいで、寝呆けているのかなと思っていると、ドアノブが微かな音を立てた。
扉が内側にそっと開いて、中を窺う様に白い頭が覗く。

「アーク」

僕が起きているのを確認する様にしてから、アークが部屋に入って来た。

「お早うゼン。気分はどうだ？」

訊きながら、ベッドの横に置かれた椅子にどかっと座る。

「うん、まぁ普通、かな。アークは？」

いつもならもっと静かな挙動をするアークが派手に音を立てて座った事に違和感を感じて、訊き返す。

「お前よりは良いさ」

即答だった。
しかも、僕よりは、てどう云う意味だろう。

「アーク」

「ん？」
「ここどこ？」
外から入って来たアークなら知ってるかな、と訊いてみる。
「覚えてないのか？」
意外そうに目を眇（すが）めたアークに「何を？」と訊き返そうとして。
唐突に、思い出した。
頭の中を抑えつけていた何かがふっと消えた様な感覚。
のんびりとした思考は、一気に甦（よみがえ）った記憶の波に追いやられて体の外に弾き出された。
「アーク！」
「ん？」
アークに掴みかかるくらいの勢いで体を乗り出すと、叫ぶ様に訊ねる。
「体は大丈夫！？　他のみんなはどうなった！？　オトー……そうだ、オトーは無事！？　僕オトーに無理させて、」
「イーゼン！」
いきなり捲し立てる僕の肩を掴んで、アークが僕の名前を怒鳴った。
「落ち着け。俺は見ての通りだし、他も全員無事だ。勿論、オトーもな」
「本当？」
「嘘なんか言って何になる？」

そう言うアークがいつもと同じ、何を考えているのかよく分からない表情を浮かべるのを見て、あぁ本当なんだな、と思った。
アークがそんな顔をする余裕を持てるくらいには、皆無事だって事だから。

「そっか」

みんな無事なんだ。

「良かったぁ……」

脱力してずるずるとベッドに横になると、アークがシーツを掛け直してくれた。

「あ、ありがと」
「……ゼン、お前なぁ」

なんか深々と溜息を吐かれた。

「俺達の心配も良いけどさ。自分がどんな状態だったか分かってる？」
「……なんか、拙(まず)かったの？」

質問の形を取りはしたけれど、アークの言い回しから答えは明白だった。

017）そこは樹海でした

ふっと意識が浮上して、あぁ、気を失っていたんだなと気付く。
酷く重く感じる瞼を何とか押し上げると、ぼんやりと定まらない視界の中に、僕を見下ろす栗色が見えた。

「……オトー？」

自分よりも小柄な少女に見下ろされると云う矛盾。
けれど、じわじわと戻って来る五感が、それが間違いではない事を告げて来る。
僕は地面に横たわり、オトーはそんな僕の頭を抱え上げていた。
しばらくして、やっと目の前のオトーの顔がはっきり見える様になると、それを待っていたかの様にオトーが口を開く。

「イーゼ、時間がないです」
「時間……？」

感覚はかなり戻って来たけど、頭がまだ上手く回っていない。
それでも、オトーのちょっとやそっとでは見せない決然とした表情から、非常事態だと云う判断は出来た。
手を着いて起き上がろうとして、自分の体が異様に重い事に眉を顰(ひそ)める。
僕が自分で体を支えたのを確認して、オトーが僕から離れる。
そこでやっと周りの状況が見渡せて、思考が一気に覚醒した。
すぐ側に在るのは、倒れて意識の無い三人の仲間。
たった今まで僕も同じ様に倒れていたんだから、原因は一緒だろう。早く解毒しないと命が危ない。

「……確かに、時間は無さそうだ」
「はい」
オトーを見ると、空になった瓶を片付けている所だった。最後の回復薬（メディカ）で僕を回復させたんだと思う。
小柄なオトーひとりでは、意識の無い人間を四人も運ぶ事は不可能だから。
多分、一番体力のある人間を、と云う判断だったんだろう。
「……オトー、悪いけどクレアとセ・セツを頼んで良いかな？　僕はアークを連れて先陣を行くから、後から付いて来て欲しい。出来る？」
何とか立ちあがって、少し離れた所に落ちていた斧を拾いながらオトーに声を掛ける。
柄を握って持ち上げると、これまで感じていなかった重さをずしりと感じた。
「やるです。できなくてもやるです」
ぐっと両手で拳を作って見せる仕草は、今の状況に似合わない可愛らしいものだった。
けれどどうやら、オトーも正しく理解している様だ。
このままでは、僕らハバキは全滅だと。
気を失ったままの三人は勿論、僕とオトーもそう長くは持たない筈だ。
メディカで多少回復をしていても、僕の体はまだ毒に冒（おか）されたままだし、オトーだってそうだろう。
少し移動しただけで簡単に息が上がったけど、今は呼吸を整えている様な時間は無い。

倒れているアークに近付き、何とか持ち上げて背負う。落とさない様に、揺すって位置を調節する。
意識の無い人間の体は、なぜか重い。
命の重さだと考えれば軽いくらいだと、意味の無い励ましを自分に送ってからオトーを見ると、彼女もクレアとセ・セツを両脇に抱えた所だった。
二人の爪先を引きずる事になりそうだけど、それはこの際しようがない。

「……ごめんね。僕が二人運べれば良いんだけど」

普段のオトーなら百キロくらい軽いだろうけど、現状ではあまり無理をさせるべきじゃない。
それでもオトーに二人任せたのは、樹海の生物に襲われる可能性を考えた結果だった。
僕が武器を振るえなければ、戦える人間が皆無になる。

「へーきです。イーゼは敵に注意です」

そんな僕の意図を、オトーはしっかり理解してくれていたらしい。

「うん、そうだね」

こんな時なのに、思わずふっと笑ってしまった。
だけどすぐに気を引き締めて、向かうべき方向を確認する。

「……じゃあ、行くよ」
「はいです」

僕の言葉に、オトーがすぐに返事を返してくれる。

「全力で走るよ。温存出来るほど体力無いし」
「はい」
「着いて来れなくなったり、はぐれそうになったら、とりあえず声を上げる事」
「はい」
「それから、もし僕がオトーより先に倒れたら、僕とアークは置いて、とにかく街まで戻る事」
「いやです」
「ダメです。……見捨てろって言ってるんじゃないよ。街まで戻って、誰か助けを呼んで来て欲しいんだ」
「……うー」

それまでぽんぽんと返事を返していたオトーが、初めて返事を渋った。
理屈は分かるが、感情が納得してくれないんだろう。

「……一番体力が無いセ・セツを、施薬院に連れて行く事を、最優先にしないと」

まずい。ちょっと息が切れて来た気がする。
これから全力で走らないと行けないって云うのに。

「……オトー？　分かった？」
「……はい」

それはもう渋々と、気が進まないけれど選択肢が他に無いから本っ当に仕方なく、と云う声だった。

０１８）ここは施薬院です

「――とまぁ、そんな感じで街へ戻ろうとした事までは覚えているんだけど……」
「どこをどう走ったのか、無事街へ辿り着いたのかどうかさえ覚えていない、と？」
「……はい、そうデス」

ふーっ、とこれ以上ないくらい重々しく溜息を吐かれた上に頭を抱えられたら、思わず敬語が出た上に発音が変になってもしようがないと思う。

「……街までどころか、しっかり施薬院まで駆け込んだよ、ゼンは」
「え、うそ」

見事に記憶が吹っ飛んでいるものの、現在の状況……つまり、清潔そうなベッドに僕が寝かされていた事から考えて、街までは戻れたんだろうと思っていたけれど。

「まさか、そこまで体力が持とうとは」
「持ってない」

思わず呟いた事を、間髪入れずに否定された。

「でも、無事施薬院まで来てるんだよね、僕？」
「……そうだな。百歩譲って、オトーは持ったと言っても良いな」

つまり、僕は持ったとは言えない、と？
僕の問いたげな視線に対して、アークが苦々しい顔で口を開いた。

「施薬院に駆け込むなり一言も発さずぶっ倒れるのを、持ったとは言わない」

どうやら生存本能だけで辿り着いていたらしい。

あーだから記憶が無かったのか、とひとり納得していたら、アークが更に言葉を続けた。

「しかもそのまま昏睡状態に陥った様なヤツの事を、無事とは言わない」

それはさすがに予想外だった。

「えーと……どれくらい経ってるの？」

「樹海で毒蝶に遭遇してからなら、二日弱てトコかな。お前とオトーが施薬院に駆け込んだのが、一昨日の夕方らしいよ」

僕はカーテンの揺れる窓を見た。

太陽の光から判断すると、今は朝。つまり施薬院に来てから、一日半は経っている事になる。

つまり僕は、一昼夜どころじゃなく寝ていたらしい。

「アークはいつ起きたの？」

「昨日の昼。セツとクレアはもう起きてた。オトーは……ずっと寝っ放しだけど、問題ないだろうって診断されてる。疲れたのか、いつも通りに寝てるだけなのかは分かんないけどさ」

「オトー、無理させちゃったからね」

毒に冒されているにも関わらず、大の大人を二人も運ばせたんだから、疲れていて当たり前だろうなぁ、なんて思っていると。

「……オトーは、吸った毒の量が一番少なかったらしい。あの蝶から一番離れていたし、気付いたセツが真っ先に口を塞がせたからな」
「そっか」
「ああ。で、俺は二番目に多く吸ってたらしいけどこの通り、まぁ歩き回っても問題無い」

部屋に来た時のアークがいつもより粗っぽい動作だった事を思い出したけど、何となく今言うのは拙い気がして、黙ってアークの続きを待った。

「つまり、セツとクレアも問題無い訳だ」
「それは良い事だね」

何だろう、何か見落としてる気がする。
こう、いつかのアークじゃないけど、地雷原に足を踏み入れている様な。

「さて、ゼン」
「な、なに？」

嫌な予感に気を取られていた僕が思わずどもった返事をしても、アークの態度は揺らがない。

「問題です。一番毒にやられていたのは誰でしょう？」
「へ？」

一番……て、オトーが最小でアークが二番目に多くて、クレアとセ・セツがアークよりマシ……て事は。

「……僕？」
「はい、正解」

こわごわ自分を指差してアークの様子を窺ってみると、満面の笑みで答えが返って来た。
うわ、あの笑顔は含む所がある時の笑顔だ。

「そんな訳で、ゼン」
「な、何でしょう？」

怯える僕を眺めてますます笑みを深くしたアークは、それはもう恐ろしい一言を放って来た。

「セツが『後で話がある』ってさ」

019）そして宿屋です

僕は広場で会ったキルシェさんの事を思い出していた。
あの人には、会って早々「めっ」なんて云う小さい子にするみたいな叱り方をされた。
だけど逆に言えばその一言だけで終わらせてくれたキルシェさんは、もの凄く良い人だった。
そんな、今この場に何の関係も無い事を頭の一部が考える。
なぜならどうにかして気を逸らさないと限界だから。
僕の足が。

「ちゃんと聞いてんのかいイーゼン」
「はい聞いてます！」

僕は今、施薬院を出てから取った宿の一室で正座をしている。
正面には腕を組んだセ・セツが居て、滔々（とうとう）と話を続けていた。

「イーゼン、あんたが一番危なかったんだよ？」

そんな言葉から始まったそれは、僕がどんな無茶をしてどれほどの命の危機に直面していたのかをひとつひとつ具体的に取り上げて懇懇と説いて聞かせると云う手法の、お説教だった。
始まってからそろそろ一時間は経っていると思うのにまだまだ終わる気配を見せないそれを、僕とアークは「保護者モード」と呼んでいる。
三日前（丸一日寝込んでいた僕の体感時間としては二日前）に広場で見せた「探究者モード」と対をなしていて、名前から分かる通り保護者としてのスイッチが入った状態のセ・セツを指す。
このスイッチが入った事の判断材料として、叱る相手を「話があ

る」と呼び出す事が上げられる。
つまり、施薬院でアークが僕に言った言葉だ。
僕とアークとオトーの三人相手にだけ入るこのスイッチは、探究者モードに輪を掛けて解除が難しい上に、逃げると云う選択肢が許されない。
家の壁にラクガキしたり食器をうっかり落として割ったり、なんて理由ではスイッチは入らない。
黙って森へ遊びに行ったり刃物の近くで暴れたりすると、ほぼ確実にスイッチが入る。
小さい頃には分からなかった、そんな保護者モードの発動条件に気付いてからは、探究者モードと違って回避する事が可能になり、もう何年も遭遇していなかったのに。
足の痺れが切れている僕は、頭の一部でそんな事をつらつらと考えては何とか痺れを忘れようと努力していた。
話を聞いていない場合何度でも一から始めて永遠に終わらないと云うのは、探究者・保護者の両モード共通しているから、セ・セツの話に耳を傾ける事を忘れてはならない。

「あの状況下で、全員が生き残る為に最善の道をあんたなりに探った結果、多少無茶をするしかないと判断したと言うのなら、それはまぁ仕方が無いと認めるよ」

認める、と云う単語が出て来た事で、僕は話の終わりが近いだろうと予想する。
セ・セツの説教の順序として、まず最初に理解させたい事を手短に告げて、次にその理由を事細かに教えてから、何がいけなかったのか、と云う説明に入る。そして叱っている相手の行動で認めるべき箇所があった場合はそれを伝えてから、再び最初に言った事へと戻り、それが理解出来たかを確認する。
ここで理解したのだとセ・セツを納得させられなければ、同じ手

順で同じ話を何度でも聞かされるので、話が終わりそうな時を見逃してはいけない。

「その時あんたが自分の命を軽く考えていやしないか……なんて問題なんだったら、まだ良かったんだけどねぇ」

セ・セツが僕の目をひたと見据えて、言う。

「イーゼン、あんた樹海を走って突破すると考えた時、それで自分が死ぬかも知れないって可能性を考えたかい？」

正直、全く考えて無かった。

あの時考えたのは「このままだと全滅だ」と云う事であり「全滅を避けるにはどうするべきか」だけだった。

別に命に代えてもとか思った訳じゃないから、問題無いと思うんだけど。

セ・セツにとっては、それこそが問題らしかった。

「命を懸けると云う意識すら無く命を懸けるのは、『命に代えても』と考えるよりも性質（タチ）が悪いとは思わないかい？」

思わないかい、と聞かれても……ここで「思わない」なんて答えたら話がループするのは目に見えているし、かと言って、その場しのぎの返事が通用しない事も過去の経験から学習済みの僕としては、返答に困るしか出来ない。

そんな僕の様子をどう捉えたのか、セ・セツは小さく息を吐くと何とも言えない視線を向けて来た。

また一から話が始まるのかと固まりかけた僕の耳に、信じられない言葉が飛び込む。

「仕方がないね。今日の所は、この辺にしとこうか」
「え、嘘」

うっかり口が滑ったけど、こればっかりは本当にしようがない。
こっちが理解していないのに保護者モードのセ・セツの話が終わった事は、これまで一度も無かったからだ。

「なんだい、まだ叱られたいのかい？」
「いえそんな滅相も無い！」

思わず首をぶんぶんと振って否定したら、ちょっと半眼で睨まれた。

「そこまで拒否されると、逆に話してやりたくなるねぇ」
「えぇえっ！？」

本気で悲鳴を上げた僕を見て、セ・セツは愉快そうにくつくつと笑った。

「安心しな、今日は本当にお終いだよ。どうやら今のあんたには、得心（とくしん）どころか理解させるのも難しいみたいだからね」

今の僕には、と云う事は、改めてお説教される日があるんだろうか。
ここで話が終わるのは嬉しいが、後日に回されただけだとするとかなり微妙だ。
なんとも言えない思いは顔に出ていた筈だけど、セ・セツはそれには触れなかった。

「最後にひとつだけ言うよ」

「……はい」

セ・セツが真剣そのものと云った表情でそう言ったので、僕も気を締め直して背筋を伸ばす。……別にそれまで丸めてた、て訳じゃないけど。

「誰かが死ぬかも知れないと思った時は、必ずそれを自分にも当て嵌める事。今回みたいに選択肢が少ない場合でも、結果としてあんた自身がどうなるか、きちんと意識して行動する事」

それ二つ言ってる気がする、とは言わなかった。

さすがにそれくらいの空気は読める。

「今後これを守ると言うなら、今日の話はこれで終わりだ。約束出来るかい、イーゼン」

要するに、命を大事にと云う事だと僕は解釈した。

＊　＊　＊

「おはようございます、今日も良い天気ですよ」

爽やかそうなその声の後に、シャッ、とカーテンを開く音がする。

薄暗かった部屋が、一瞬で光に包まれた。

「もう朝……？」

結局セ・セツから解放された頃には夜明け間近となっていたので、

全然寝足りないんだけど。
そんな僕の事情なんてお構いなしと云った感じで、再び「おはようございます」と声を掛けられた。

「……おはようございます」
「よく眠れましたか？」
「あんまり……」
「それは残念でしたね。今夜はよく眠れると良いのですが」

もう少し寝かしておいてくれると非常に有難いのに、相手にそう云った選択肢は存在しないらしい。
前と同じく朝食をどうするかを尋ねると、では、と言い残してさっさと部屋を出て行った。
ベッドの上に起き上がってぼーっとする事しばし。

「……何このデジャヴ」

僕の呟きに返って来たのは、やっぱりまだ眠るアークの静かな寝息だけだった。

０２０）僕の休養日１

「あ、ゼン君だー」

店に入るなり、名前を呼ばれた。

この街に知り合いは居ない筈、と思いながら声の方を見ると、街に着いた初日に出会った人が居た。

「キルシェさん」

カウンターの奥の席に座って「やっほー」と手を振るキルシェさんを見て、ぎょっとした。

ぶんぶんと振られる手には大きなジョッキが握られていて、半分近い量の液体がたぷたぷと揺れていたからだ。

「ちょ、キルシェさんストップ！」

カウンターは入口近くにあるから、奥とは云えそう遠くはない距離をそれでも慌てて詰めると、ジョッキを振るのを強制的に止めさせる。

「ゼン君、素早いねー」

「素早いねー、じゃないですよ」

まだ床にもカウンターにも中身がこぼれた様子はなかったのでほっとしつつ、キルシェさんに注意を促す。

「こぼしたらどうするんです。店の床が大惨事じゃないですか」

「大丈夫だよー、そんなヘマしないからー」

「してからじゃ遅いんですっ」

どうして酔っ払いは根拠なく楽観視するんだろう。て云うかまだお昼なんだけど。

「あれ、全然冷えてないですね？」

ビールらしき液体が入っているにも関わらず、ジョッキは全然冷たくないし、水滴も付いていなかった。

「そりゃそうだよー。だってこれエールだもんー」

エールは常温がおいしいんだよー、と言いながら再びジョッキに手を伸ばし、残りをぐいっと飲み干してしまう。

……結構な量がまだ入っていたんだけど。一気飲みしちゃったよキルシェさん。

「冷やしたビールもおいしいけど、すぐにぬるくなっちゃうからねー」

ぬるいビールはマズイよー？　と眉間に皺を寄せて「不味い」を表現してくる。

「ゼン君も飲むー？」

「いえ、僕は……」

くいくい、と後ろから服を引かれて振り向くと、オトーが僕を見上げていた。

「あ、ご免ねオトー。置いてっちゃって」

「だいじょぶです」

僕の服の裾を掴んで立つオトーを見たキルシェさんは、「あ」と彼女を指差した。

「ちっさい力持ちの子だー」

他に表現の仕方は無かったんだろうか。

「うちのメディックのオトーです」

後ろから顔を覗かせていたオトーを、隣に立たせて紹介する。

「オトー、この人はキルシェさん。一度会ってる筈だけど、覚えてる？」

「はい。セーセがかみなり落とした時の人です」

「あー、うん。そうだね」

僕かアークが叱られてたみたいな響きだなぁ、なんて思いながらキルシェさんに視線を戻すと、なみなみと中身の入ったジョッキを手にしていた。いつの間に。

「……どれだけ飲む気ですか」

「えー、そんなに飲んでないよー？」

キルシェさんは僕の言葉を否定する様にぱたぱたと手を振ると、「まだ四杯目だしー」と朗らかに言った。

「充分です」

この酔っ払い、と云う言葉は何とか飲み込んだ。

「ところでゼン君、今日はどうしたのー？」

酒場に来たら酒を飲むしかないだろう、と暗に訴えて来る相手に内心溜息を吐きつつ「ただの食事です」と答えた。

「昼は食堂メニューを扱う酒場って多いですよね」

キルシェさんが言外に真昼の飲酒を正当化して来るなら、こっちも言外にそれは非常識だと匂わせてみる。

「冒険者が常識を説かないでよー」

言葉にしなかった僕の言い分をしっかりと聞き取ったキルシェさんは、今度は直球で抗議して来た。

「冒険者だからって非常識だとは限りません」

同じく直球で返してから、あれっと思う。

「僕、冒険者だって言いましたっけ？」

キルシェさんと会ったのは一度だけで、その時僕は冒険者だと言った覚えは無い。

だけどキルシェさんは確信している。

どうしてだろうと思った時、「私が教えたの」と言う声がした。

「サクヤさん」

「いらっしゃい。〈ハバキ〉の新米冒険者さんたち」

カウンターの向こう側に姿を見せたのは、店主のサクヤさんだった。
この店で飲んでいるキルシェさんがサクヤさんと知り合いだと云うのは、おかしくも何ともない。
そしてサクヤさんには、仲間になってくれる冒険者を探していると相談まで持ちかけたんだから、知ってて当たり前だった。

「また来てくれて嬉しいわ。今日もお食事かしら」
「あ、そうでした」

お昼を食べに来ていた事を思い出し、ひとまず注文をする。
アルコールは頼まなかった。
キルシェさんに言った様にまだ飲む時間じゃないと思うし、あれだけ言っておいて飲むと云うのも変な話だ。
そもそも、飲ませられないオトーが一緒だし。

「何でまた僕らの話を？」

奥からキルシェさん、オトー、僕とカウンターに並んで座って、頼んだ料理が来るまで待つ。
その間も、キルシェさんのアルコール摂取量はどんどん増えて行ってるんだけど、もう突っ込まない事にした。

「えっとねー。ゼン君達と会った日の夜にもここに来たんだけどー。広場の騒動知ってるかって訊かれたから、当事者として教えてあげたのー。そしたらサクヤがその子達知ってるって言って、お昼にあった事を教えてくれたって訳ー」

そう言ってキルシェさんは、手に持ったジョッキの中身をまたも

飲み干した。
これで四杯飲み切った訳だ、なんて思いながらふと思い出したのは、武器を選んだ武具屋の店主。
――冒険者って独特の空気持ってるからね――
当の本人である僕にはさっぱり分からない雰囲気的なもので見破ったシリカさん。
ひょっとしてキルシェさんもそうなんじゃないかと思ったんだけど、こっちはちゃんとした情報ソースが存在していた。
分からないと言えば、何故かバードだと思われていた事も思い出した。
話のタネくらいにはなるかな、とキルシェさんにその事を話してみたら「なんか分かるなー」と言われた。
「わたしも今日のゼン君を最初に見てたら、そう思ってたかもー」
言われて僕は、自分の服装を改めて見下ろした。
今日の装備は護身用ナイフが一本だけと云う身軽さだ。
街に出るだけならそこまでの装備は要らないだろうと思って、斧も防具も宿に置いて来た。
キルシェさんも共感出来るらしい僕がバードっぽいと云う見立てについて、ぜひ詳しく説明して欲しい所だけど。
シリカさん同様教えてくれそうになかったので、別の質問をする事にした。
「冒険者が持っている空気って、キルシェさんは分かります？」
「うーん……そのお店の人が判るのは、無意識の経験からだと思うよー。何人も冒険者を見て来たんだろうしー」

それだけ言うとまた次のエールを注文しているキルシェさんに呆れつつ、聞いた言葉にはなるほどと思う。
確かに、世界樹の迷宮があるこの街の、しかも武具屋の娘なら、生まれた時から冒険者を見ているかも知れない。
それなら、冒険者と自分の違い、みたいなものが分かる様になっていてもおかしくない。

「でも、冒険者でも冒険者を見て育ったんでもないわたしには、難しいかなー」

いや、冒険者本人の僕だって分かりませんよ、と言おうとして。
その言葉の意味に気付いて、びっくりした。

「キルシェさん、冒険者じゃないの？」

僕の驚きを知ってか知らずか。
キルシェさんは「うん違うよー」と笑顔で頷いた。

「故郷で騎士の真似事やってたんだけど、どうにも窮屈でねー。思い切って旅に出たのー」

なんだかさらりと凄い事聞いた気がする。
詳しい事は分からないけど、確か騎士になるのって今も昔も貴族とかそう云う……。
なるほど、偽名を使う訳だ。

０２１）僕の休養日２

「他のメンバーとは一緒じゃないのー？」

キルシェさんがそう訊ねて来たのは、僕とオトーが料理をほとんど食べ終えた頃だった。

「そう云う質問って、最初にするものだと思うんですけど……」

僕らが食べ終わるのを待ってた、と言うのなら分からなくもないけど、僕もオトーもまだ食事を完全には終えていない。

このタイミングである意味が全く分からなかった。

「だって思い出しちゃったんだもんー」

それだけらしい。

キルシェさんの人となりが見えて来た気がする。何となく。

「執政院に行くって言ってましたけど……あ、ちゃんと男手が一緒ですよ？」

キルシェさんと初めてあった時にまず注意された事を思い出して、付け足した。

「あの白い頭の子ー？」

「そうです」

そう云えば、アークとキルシェさんってまだ話した事ないんじゃないだろうか。

気付いたからってどうなる事でもないけど。

「ゼン君とオーちゃんは行かなくて良かったのー？」

オーちゃん、と云うのはオトーの事だ。

どうやらキルシェさんは、適当に愛称を付けてしまうタイプの人らしい。

まぁ、オトーもキルシェさんの事を「キーシェ」と言っていたからお互い様だろう。

「ちょっと寝不足だったんで残ったんです。そしたらお昼まで寝ちゃって」

セ・セツのお説教が明け方まで続いて寝不足だったにしても、お昼までは寝過ぎだろう。

自分で思うよりも、体の調子が戻っていなかったのかも知れない。

ちなみに、目が覚めたら隣のベッドでオトーが丸まって眠っているのを見た時には、さすがにちょっと驚いた。

僕があまりにもぐっすり眠っていたので、伝言ついでに残ったそうだ。

そのまま一緒になって眠ってしまう辺りが、すごくオトーらしい。

「まぁ、調子が悪い時は仕方ないんじゃないかなー」

「自覚は無かったんですけどね」

「死にかけたんでしょー？　助かっただけ良かったと思わないとー」

それはそうですけど、と言おうとして。

「……言いましたっけ？」

出て来たのは、そんな言葉だった。

「やっぱりー。三日前に施薬院に駆け込んだ冒険者、てゼン君達なんだねー」

何で知ってるんですか。

「噂でねー。特に、ちっさい女の子が大人ふたり抱えて走ってたって聞いたから、もしかしてこの子かなってー」

言いながら、隣に座ったオトーの頭をうりうりと撫でるキルシェさん。

オトーはおとなしくされるがままになっている。

「後遺症なんかは無さそうだねー」

最後にわしゃっとかき混ぜてからオトーの頭を解放すると、僕の方を見てそんな事を言った。

「あ、はい。多分、ですけど」

施薬院では大丈夫だろうと言われたし、今の所身体の不調を訴える人も居ない。

だけど、僕らはまだ戦闘と云うものをしていない。

日常生活に支障は無いけど戦闘行為には耐えられない、なんて事が無いとも限らないから、次に樹海に潜ったらまずその辺の事を確認するつもりだった。

「うん、慎重なのは良い事だよー」

僕の説明に、キルシェさんは少し目を細めると満足そうに頷いた。
「今日は街に居るのも、その用心の一環なのー？」
「そうなりますね」

朝食の時、寝不足や疲労を差し引いても動作が鈍いとセ・セツに言われた。
アークもまだ所作が粗いと言われたけど、僕らからすれば一番体力の無いセ・セツの回復具合だって不安だ。
結果、樹海に潜るのは明日以降と云う事になり、寝不足だった僕は部屋にとんぼ返りして二度寝した。
ちょっと寝過ぎたけど、休養日の過ごし方としては割と正しいのかも知れない。

「執政院には何の用で行ったか知ってるのー？」
「えーと確か、あとどれくらい書いたら合格なのか確認して来るとかなんとか……？」

記憶を探りながらオトーを見る。
セ・セツ達の行き先はオトーからの伝言で聞いただけだから、オトーの方が確実だ。
僕の視線を受けたオトーは「はいです」とこっくり頷いた。

「何か受験してるのー？」

不思議そうに首を傾げたキルシェさんを見て、本当に冒険者じゃないんだなと改めて思った。

「受験と云うか、冒険者になる為の試験みたいなものです。地下一階の地図を完成させないと、本格的な探索の許可が出ないらしくて」

執政院の人は「任務（ミッション）」と呼ぶらしいけど、実情は冒険者になる為の前提条件と言った方が近いものだ。
それを知らないと云う事は、やっぱりキルシェさんは冒険者じゃないし、冒険者が身近なエトリアの住人でもないんだろう。
別に、旅人だと言ったキルシェさんを疑ってた訳じゃなくて、実感したと云うか、理解が納得に変わったと云うか。

「へー。冒険者って認可制だったんだねー」

知らなかったよー、と感心した様に言ってから。

「あれ、それじゃ今のゼン君たちは不認可冒険者って事ー？」

ふと気付いたみたいに、キルシェさんはそう言った。いや実際ふと気付いたんだろうけど。

「……せめて、未認可とか未公認とかにしてもらえませんか」

不認可って、法を犯してそうで何となく落ち着かない。

「冒険者ギルドにはちゃんと登録して認可されてますし」

僕の抗議に「ごめんねー」と笑顔で謝罪したキルシェさんは、手に持っていたもう何杯目か分からないジョッキをまたもや空にした。

「さて。ゼン君たちはこの後どうするのー？」

いくらなんでももうそろそろ止めるべきだろうか、と僕が思った事を察した訳じゃないだろうけど、キルシェさんの昼間の飲酒はこ

れで終わりらしい。
空のジョッキをカウンターに置くと、少し前に食べ終わっていた僕とオトーにそう訊いて来る。
「この後ですか？」
多分明日は樹海に潜るだろうから、それに備えて体を動かしておこうと考えていた。
特に僕の場合は一日以上寝ていたから、絶対に体が鈍（なま）っているだろうし。
それをそのまま伝えると「じゃあ一緒にやろうよー」と云う言葉が返って来た。
「それは、僕としては有難いですけど……良いんですか？」
「何がー？」
「キルシェさん、僕より数段強いですよね？」
チンピラもどきの冒険者を複数相手取って暴れていたのをちらっと見ただけだけど、駆け出し冒険者の僕より強い事だけは間違いない。
格下の僕と手合わせをしても、得るものは少ないだろう。
「でも、ひとりで武器を振り回すより、ふたりで仕合った方が良いでしょー？」
「それはそうですけど……」
良いのかな、と少しだけ考えて、良いんだと思う事にした。
せっかく自分より強い人が手合わせしてくれると言ってるんだから、その厚意は素直に受け取っておこう。

「それじゃあ、よろしくお願いします」
「うん任せてー」
「オトーもそれで良い？」

僕とキルシェさんの間で黙って話を聞いていたオトーに訊ねると、
「はいっ」と答えが返って来た。

０２２）彼女の休養日１

どこの街でも、人の集まる場所と集まらない場所がある。
集まるのは明るく開けた場所であり、集まらないのはその逆だ。
交通の便がなく日当たりも悪ければ人の足は遠のくものだが、そのひと気の無さを好む者も居る。
それは隠遁者ではなく、むしろ俗世を離れた彼らが嫌う要素を凝縮した様な人間だろう。
そう例えば、彼らの様に。

「なぁ、悪いようにはしねぇからよぉ？」
「黙ってついてくるだけで良いんだぜぇ？」

にやにやとした笑みを顔に張り付けて、口々に言ってくる。
男対女である事、多対一である事が彼らに絶対の自信を与えているのだろう。

「……バカバカしい」
「は？　今なんつったよ姉ちゃんよぉ？」

思わずこぼれてしまった私の本音を耳聡く聞き付け、集団のひとりが凄んで来た。

「……失礼、間違えた」
「なぁにと間違えちゃったのかなぁ？　えぇ？」

凄んだ男とはまた別の男が、顎を前に押し出す様にして喋る。
おそらく本人は迫力があると思ってやっているのだろうが、こちらからすれば滑稽な事この上ない。

「……バカバカしいのではなく、正真正銘の馬鹿と言うべきだった」

この街で冒険者を始めてから半年経つが、この手の人間は何度見ても馬鹿としか言いようがない。

「あぁん？　だぁれがバカだってぇ？」

「おい姉ちゃん、人が下手にでてやってるからって、つけ上がっちゃいけねぇなぁ？」

「……語尾を上げずに話す事はできないのか？」

その無意味な疑問形の喋り方は、間違いなく彼らを馬鹿に見せている一因だろうに。

「あぁ！？」

「んだとぉ！？」

「どうやら痛い目みてぇらしいなぁ姉ちゃんよぉ！？」

親切心からの忠告だったのだが、彼らに喋り方を改める気はなさそうだ。

いつ襲いかかって来てもおかしくない彼らの様子に、仕方ないかと肩に掛けた弓を下ろそうとした時だった。

「ちょぉおっと待ったー！」

既に短気を起しかけていた男達の更に背後から、そんな声が掛かる。

「あぁ！？　誰だてめぇ！？」

「ジャマすんのかこのヤロウ！？」

血が上った頭そのままでその声に向き直る男達。
私の位置からではその姿は見えず、さきほどの声から男だろうと見当を付けるのがせいぜいだった。
こちらを見ている者が居ない事を確認して、そっと静かに弓を下ろす。
そして数本の矢を手に取り、まとめて番(つが)えて引き絞る。

「邪魔すんのか、だぁ？　そんなもんなぁ、」

いまだ姿の見えない闖入者(ちんにゅうしゃ)の声からその位置を割り出し、矢の軌道を調整する。

「全力でするに決まってんだろーが！」

啖呵を切ったその声に罵声がいくつか返された時、私は弓弦(ゆづる)を手放した。
矢の軌跡は確認しない。
すぐさま地を蹴り、男達の脇をすり抜け闖入者へと辿り着く。

「へ？」
「……こっち」

事態を把握しきれていない相手の腕を掴むと、そのまま引っ張って走るよう促す。
相変わらず戸惑った様子の彼は、それでも咄嗟に合わせて駆け出してくれた。

「え、あっ、おい！？」
「ま、待ちやがれてめぇら！？」

「おいっ、追うぞ……って、うわぁっ！？」

一瞬呆けていた男達は、だがすぐに我に返って後を追って来ようとしていた様だが、直後に悲鳴が上がるのが聞こえた。

その原因を作ったのは私だが、狙いが成功した事はその声で知れた為、そのまま振り返らずに走り去る。

ひとつ目の角を曲がる際、ふと、最後まで語尾が上がるのは直らなかったな、とどうでも良い事を思った。

＊　＊　＊

入り組んだ路地を無作為に曲がりながら走り続け、誰も追って来ていない事を確認して足を止めたのは、それから五分ほどしての事だった。

「はー……ひー……」

私の隣では、疲労困憊となった男が膝に手を着いて酸素を貪っている。

掴んだ腕は途中で放していたが、何となく同じ道を走り続けて今に至っていた。

「ふー……へー……」

灰色の髪をしたその男は随分と使い込んだ様子のリュートを背負っており、年季の入った奏者である事が窺えた。

「ほはぁ……」

この男も冒険者だろうか。

「ひふぅ……」

しかしそれにしては体力が無い。

「へほぉ……っと」

もうここに置いていこうかと私が思い始めた頃、ようやく変化が訪れた。

「よし、復活！」

そう言って顔を上げた時には、本当に復活したらしく疲労の色は感じられなかった。

「いやー、おねーさん足早いねー。おにーさん疲れちゃったよ」

そして回復後の第一声がそれだった。

「……助けに入ってくれた事には礼を言う。ありがとう」

それじゃあ、と立ち去ろうとすると、慌てた声に引き留められた。

「ちょ、ちょっと待ってよおねーさん」

「……何？」

「ここで会ったのも何かの縁だ。名前教えてよ。ちなみにオレはアルバートね」

「……クレア」

「おっけー。クレアちゃんね」
「……それじゃ」

クレアちゃん、と云う呼び名に抵抗を覚えたものの、もう会う事は無いのだからとそのまま流して立ち去ろうとすると、またも呼び止められた。

「……何」
「そんな不機嫌そうな顔しないでよ。訊きたい事があるんだって」
「……何？」
「最後のやつ。あれやったのクレアちゃんでしょ？　一体何をどうしたのか是非訊きたいんだけど」
「……最後のやつ？」
「ほら、オレ達を追っ掛けようとしたゴロツキ連中に矢が降り注いだアレの事」

……あぁ。

「……矢を上空に向かって打ち上げただけ」
「いやいやいや、それだけってのはオカシイでしょーよ」
「……何が」
「単純に打ち上げただけなら、放たれた矢も落ちるだけ。だけどキミが射った矢は、それにしちゃあ滞空時間が長過ぎるし、落下地点も精確過ぎた」
「……そう？」
「そだよ。あいつらの鼻先を掠める様に降って来たあの場所、ちょっと前までオレが立ってた場所だよ？　どこにどれだけ移動するか計算したと考えるのが自然っしょ」

去り際に背後で起こった事なのに、よく見えている。

「……あなたを狙ったとは思わなかった？」
「いや全然」
直前まで自分が居た地点に矢が降って来れば、狙われたのは自分ではないかと考えてもおかしくない。
だと云うのに、彼はあまりにもあっさりと否定した。
「……どうして？」
そう訊き返したのは、反射の様なものだったが。
「キミみたいな可愛い子に嫌われる様な事、オレがするワケないから」
訊くんじゃなかった、と後悔した。

０２３）彼女の休養日２

無言でその場を去ろうとしたら、三度（みたび）引き留められた。

「……何」

「え、何でいきなり怒ってんの！？　なんかしたならごめんなさい！」

自分に非があるのに認めようとしない人間は山ほど見て来たが、自身に非があるかどうかも不確定な状況でとりあえず頭を下げると云う人間は初めて見た。

「……別に怒ってない」

「ホントに？」

足を止めて振り返れば、顔の前で両手を合わせて謝罪のポーズをした彼が、その手の向こうから窺う様に見つめて来た。

「……本当に。呆れてただけ」

「えぇー？　それはそれで何かショックだなぁ」

私が怒っていないと云う事にほっとしたらしい彼は、合わせていた手を戻しながら複雑そうな顔をした。

「女の子に呆れられてしまうとは、オレとした事が……」

「……それで？」

何やらぶつぶつと言っていたが、流しても全く問題の無い事柄の気がした為、無視して問い掛けた。

「ん？　何かな、クレアちゃん」
「……クレアで良い」
引き留めた理由を訊こうとしていたのだが、再び「クレアちゃん」と言われた事で、思わずその訂正をしてしまった。
「え、良いの？　ひゃっほう、呼び捨て許可をもらったぜー！」
「……やっぱり駄目」
ちゃん付けをやめてもらいたいと云う意思表示だったのだが、返って来た反応に何となく不安を覚えて撤回する。
「え、ダメなの？　うむむ、残念だが仕方ない」
肩を落として気落ちしていると云う仕草を見せながら、大してがっかりしていそうもない声だった。
「んじゃあ、クレアちゃん」
「……それも駄目」
しかしやっぱり「クレアちゃん」と云う呼び名には馴染めそうもなかった。
「えぇー？　じゃあ、何て呼べば良い？　クレアさん？　お嬢さん？　意表を突いてクレア君？」
訊かれて少し考えてみる。
クレアちゃんは論外。呼び捨ても却下した。クレアさん、と云うのもむずがゆいし、お嬢さんはその上を行く。クレア君、ではまる

で少年の様だ。

「……全部却下。それ以外で考えて」

特に良い案が思い付かなかった為、呼び名については相手に丸投げする事にした。

「おっと、これまた難題を！　むーん……よし、クレア様でどうだ！」

顎に手を充てて考える様な仕草をした後で、膝頭をぱしんと打ちながら出して来た案がそれだった。

「……却下」

「あっさりー！」

ややオーバーリアクションでがっくりと大地に手を着いた彼を見下ろしつつ、仕方ないかと思い直す。

「……分かった。クレアで良い」

「え、良いの！？」

四肢を地に着けたままで、がばっと顔を上げてこちらを見上げた彼からこの後のリアクションが想像出来てしまったが、他に案が無いのだからしようがないと頷いて見せる。

「……仕方ない」

「その渋々感が気になると言えば気になるが、とりあえずはやったと言わせてもらおう！」

素早く立ち上がって予想通り歓喜の声を上げる相手を見ていると、やっぱり早まったかなと感じたが、他に良い案がある訳でもない。

「……それで？」

「ん？　何が？」

文字通り飛び跳ねて喜んでいた相手に声を掛けると、首を傾げられてしまった。

「……何か用があったんじゃないの？」

彼が私を呼び止めたのに、私が用があるかの様な構図になっているのは何故だろう。

「んー？　おー、そうだったそうだった」

考えながら傾げた首を更にそのまま傾け続け、顔が地面と水平になってしまう所まで行ってようやく思い出したらしく、一瞬で角度が元に戻った。

「クレアはこれからどーするのかな、と」

「……どう？」

私が言った通り「クレアちゃん」から呼び捨てになっていたが、最初に感じた様な不安はもう感じなかった。

「誰かと合流するんだったら良いんだけど、ひとりなんだったらしばらくお供させてもらおーかと」

「……どうして？」

「またさっきみたいなのに絡まれたら危ないでしょー。クレアみた

いな美人さんは特に」

さらりと。

当たり前の様に言われた言葉に、どう返して良いのか分からなかった。

「クレア？　どーかした？」

「……何でもない」

彼とは少ししか話していないが、軽いノリの男だと云う事は間違いない。

少し前にも可愛い子がどうのと言っていたし、深い意味は無いのだろうと結論を下す。

そう。

社交辞令の様なものだ。

「……あなたは、どうしてあそこに居たの？」

「ん、オレ？」

質問に対して質問を返した私に不快感を感じた様子もなく、彼は自分の顔を指差した後、バツが悪そうに頭を掻いた。

「いやー、実はさ、どーも迷子になっちゃったみたいで」

「……迷子？」

「お恥ずかしい限りっす」

恥ずかしい、と言ってはいるが大して恥じている様子もない彼は、この街に着いてまだ数日なのだと言った。

「んで、どっか演奏させてくれる酒場でも探そーかとふらふらして

たら、さっきのキミとその他のヤロウ共の対立シーンに出くわしたってワケ」
「……それのどこが、迷子？」
つまり彼は意図的にぶらついていた訳だから、迷子とは違う様な気がしたのだが。
「んにゃ、迷子だよ。こっからどーやって宿まで戻れば良いのか分かんねーし」
あっけらかんと言ったその言葉で、私も彼の言葉を認めざるを得なくなった。
「……分かった」
「ん、何が？　オレの魅力が？」
道に迷ったと云う割に、困った様子が見られないのは何故だろう。
「……こっち」
「無反応！？　せめてバカ言うな、くらいのツッコミは欲しかったよ！」
その場で何やら騒いでいる彼へと足を止めて振り返れば、今歩いた数歩分だけ、彼との距離が空いていた。
「……ついて来て」
「はい喜んでー」
声を掛けると、あっさりと騒ぐのを切り上げてやって来た。

「……それで良いの？」
「ん？　何が？」
「……何でもない」
本人が構わないらしいので、何も言わない事にした。

０２４）彼女の休養日３

「んで、オレはどこへお供するのかな？」

狭い裏路地を歩き出した私に付いて来ながらの問いに、黙って前方を指差した。

その先には、はるかに霞む大樹が聳（そび）える。

「世界樹？　あれがどーかした？」

「……この街で迷ったら、とりあえず世界樹を目指せば良い」

エトリアの街は、元々は小さな集落に過ぎなかった。

けれどある時「世界樹の迷宮」が発見され、訪れる人口が爆発的に増えた。

街としての発展が急務となり、初期過程では都市計画も練られないまま、ひたすら街を肥大化させた。

結果として街の一部は迷路の様になり、下手をすると住人でも抜け出せなくなるほど複雑化した。

「……下手に戻ろうとするよりも、一旦街を出た方が確実」

そう云った説明をするのが面倒だった私は、結論だけを彼に伝えた。

「なるほどねー。目的地を目指す前に、まずは迷路を抜けださないとってワケだな」

うんうん、と何度も頷いている様子が見える様だと感じていると、あれ、と何かに気付いた様な声がした。

「……何？」

今歩いている路地は、ふたりが並んで歩く事も難しいほど狭い通りの為、後ろを歩く彼の方へと少しだけ振り向いて訊ねる。

「いや、迷子なのはオレであってクレアじゃないだろ？　そっちの目的地は良いワケ？」

「……問題無い。元々、世界樹に向かうつもりだった」

私の言葉をじっくりと吟味する様な沈黙の後、恐る恐る、と云った声が訊ねて来た。

「それってつまり、クレアも迷子だって事？」

「……そうとも言う」

「いやそうとしか言わないよね！？」

「……適当に走っても自分の位置を見失わないほど、ここの地理に詳しくないから」

元々、後ろの彼と別れた後は、世界樹の方向に街を抜けるつもりだった。

迷った時は世界樹を目指せば良いと云うのは私の経験則であって、それが正解だと知った方が後だったくらいだ。

そんな街の事情を教えてくれたのは、金鹿の女将だったと思う。

「いや、まあそれはしようがないとは思うけど。でもだったら、自分も迷子だって教えてくれたっていーんじゃないの？」

「……訊かれなかったから」

「確かにオレからは訊いてないけどっ。むう、分かった。訊いたら教えてくれるんだな？」

「……答えられる事なら」
「そりゃー分かってるよ。女の子には色々とヒミツがあるって事くらいはさ」
「……そう云う意味じゃない」
「ありゃ、また呆れられちゃった」

彼からは私の後ろ姿しか見えない筈なのに、呆れたとよく分かるものだ。
そんな風に思ってから、そう云えばと気が付いた。

「……私からも、訊いて良い？」
「え、何なに、オレに興味ある？　嬉しいねえ、何でも訊いて！」

その弾む様な声音に、やっぱり訊くのはやめておこうか、と云う考えが頭を掠める。

「えー、何だよ訊いてよー。何でも教えちゃうよー？　あ、でもスリーサイズは秘密よ？　いっつあ、とっぷしーくれっと！」
「……もう良い」

私の気が変わりそうなのを即座に感じ取ったらしい所は鋭い気がする。
けれど直後の言動は馬鹿じゃないのかと思わずにはいられない。
切れ者なのかと思った直後に、脱力する様な挙動が待っている。

「え、ちょっと待って。ふざけたのはごめんなさい、謝るんでぜひ訊いて！？　そんな途中で止められたら、オレもう気になって夜も寝られないから！」

後ろから慌てた様に懇願する声が聞こえて来たが、既に訊く気が

失せている私は黙って歩き続けた。

「ちょ、ホントに何だったの！？　すんごい気になるんだけど！？
クレア？　クレアちゃん、いやクレア様！」
「……うるさい」
「ひどっ！？」

なおも後ろでひとり騒ぎつつも付いて来ている事から、私が本気では怒っていないと察しているのだろう。
読めない人間だな、と思った。
私は、あまり感情が表に出ないらしい。
幼い頃はそうでもなかった筈だから、故郷を出てからそうなってしまったのだろう。
だと云うのに。

――そんな不機嫌そうな顔しないでよ――

彼は、初見から私の感情を読んでいた。
立ち止まって、後ろを振り返る。
きょとんとした顔でこちらを見ている彼の姿が視界に入った。
騒ぎながら振り回していたのだろう両手が、おかしな形で停止している。

「……分かった。質問する」

私がいきなり振り返った事で固まっていたらしい彼は、私の言葉を理解すると再び動き始めた。

「おう、何でも訊いて！」

質問をされるだけでこれだけ嬉しそうに出来る人間と云うのも珍しいと思いつつ、口を開く。

「……あなたの名前は？」

さきほど訊こうとしていた事ではないし、最初に名乗られた様な気もするのだが、覚えていないのだからしようがない。

そんな私の質問に、一拍置いて路地に崩れ落ちてしまった彼を見て、やはり名乗られているらしいと確認できた。

それにしても、よく膝や手を地に着く人だ。

「名乗ったのに。最初に名乗ったのにー」

「……ごめんなさい」

さすがにここまで落ち込まれると悪い気がして謝ると、いきなりすくっと立ち上がった。

「いや、むしろオレが悪かった！　女性に謝らせるなんて男が廃る！　忘れてしまったものは仕方ないってモンだ！」

読めない人だと分かっていたつもりだったけど、このいきなりの思考の切り替えには、少しびっくりした。

「逆に！　今！　改めて名前を知りたいと思ってもらえた事にオレは喜ぼうと思います！　どうもありがとう！」

叫ぶ様にそう言うと、本当に頭を下げてしまったものだから、対処に困った。

「……大袈裟」

「おっと、女性を困らせてしまうとは。オレとした事がオレ失格」
言っている事はよく分からないけれど、とりあえず妙なテンションからは落ち着いてくれたらしい。
「そんじゃ改めまして。アルバートと申します、以後よろしくお見知りおきを」
そう改めて名乗りつつ、彼――アルバートは、芝居がかった仕草で一礼して見せた。
「……分かった。ありがとう」
「それだけ？」
お礼を言って再び歩き出した私に、不満そうな声が掛けられた。
振り向くと、声の通りに不満気な顔をしたアルバートが立っている。
「……何？」
「せっかく名乗ったんだから、一度くらい呼んでくれないとオレの名前がかわいそーだとは思いませんか？」
名前が可哀想、と云う発想はよく分からないけれど、言いたい事は伝わった。
「……アルバート」
「はい何でしょう！」
どこかの軍隊の様に、びしっと敬礼しながら返事をしたアルバートは、妙に嬉しそうだった。

「……気持ち悪い」
「ひどっ！？」

思わず漏らした私の本音に、傷付いた様に一歩下がる姿を見て、少し愉快な気持ちになる。

「ちょ、クレアさん？　何で笑ってるの？　笑っちゃうほど気持ち悪いとかそーゆー事？　傷付いちゃうよオレ！？」
「……うるさい」
「クレア？　あれ、キミそんなキャラだっけ？　そんな冷たい子だったっけ？　オレ泣いちゃうよ？」

騒いでいるアルバートを放置して、再び歩き出す。
少し先で道が分かれていたので立ち止まって振り向くと、アルバートとは数メートル程の開きが出来ていた。

「……こっちに行くけど」
「はいお供しまーす」

短く声を掛けると、騒いでいたのが嘘の様にあっさりとやって来る。

「……本当にそれで良いの？」
「ん？　何が？」
「……何でもない」

本人が構わなくても、周りが構った方が良いのかも知れない。

０２５）俺の休養日１

「セツ」
「何だい、イアーク？」
先頭を歩いていたセツに声を掛け、振り向いたその視線を更に後方へと促すと、気付いたらしいセツの片眉が微(かす)かに上がった。
「はぐれたのかい？」
「みたいだね」
最後尾を歩いていた筈の、クレアの姿がなくなっていた。

＊　＊　＊

「それじゃオトー、よろしくね」
「はいです。まかさったです」
俺が手を振って告げた言葉に、張り切った声で返って来たのがそんな返事だった。
「オトー。まかさった、じゃなくて、まかされた、ね」
「まからせた、です？」
オトーが、こてんと首を傾げて俺の言葉を復唱するも、言えてない。

「惜しい。ま・か・さ・れ・た」
「ま・か・さ・ら・た？」
「うん、もうひと息」
「何まだるっこしい事してるんだい。そう云う時はね、任せろ、のひと言で良いんだよ」
「まかせろ、です？」
「そうそう。それじゃ、イーゼンを頼んだよ、オトー」
「はい、まかせろです！」
「ちょっと、セツ？」

元気良く答えたオトーをおいて、セツはさっさと部屋を出る。うっかりしてると平気で単独行動を取り兼ねないセツを追い掛けて、俺も慌てて廊下へと出た。

「待たせたね、クレア」

この時確かに、セツはクレアに声を掛けた。

＊　＊　＊

「ハバキと言ったな。君たちを一人前の冒険者として認めよう」

メガネを掛けた背の高い男は、そう言って一枚の紙を出して来た。

「これを持って、シリカ商店へ行くと良い。いつ行くかは君たちの自由だが、樹海に潜る前に行く事を勧めておこう」

こころなし偉そうな喋り方をするその男は、執政院の樹海対策部

情報室長と云う肩書きらしい。
それがどの程度の役職なのかは知らないが、仮にも「長」と付く人間が窓口業務をしているとは。
そう云えば、冒険者ギルドのカウンターに居たのもギルド長だった。

「何だここ」

ついぼそりと呟くと、それを拾ったクレアがこちらを向いたんで、
「気にしないで」とか何とか言ったと思う。
つまり、クレアはまだ一緒に居た。

＊　＊　＊

「それじゃあ、一体何を以て樹海と外界の区別を付けてるんだい？」
「さあ？　糸を作ったのはボクじゃないからね。詳しくは知らないんだよ」
「気にならないのかい？　こんな面白い素材が手許にあるんだよ？
私だったら刻んで融かして培養して、元素分析でもするけどねぇ」

店主に次から次へと質問を浴びせていたセツが、乗り出していたカウンターからようやく身体を引き揚げた。
何を聞かれても「企業秘密」か「よく知らない」でセツの好奇心をかわし切った女店主の頑張りに、心中こっそり拍手を送る。

「……糸を、培養？」

隣から、ぽつりとそんな声がした。

「ああ、セツの言ってる事は気にしなくて良いよ。アレは大抵ノリと思い付きで言ってるだけだから」

抑揚皆無だから分かりにくいが、多分疑問に思ったんだろうと、俺はクレアにそう返した。

＊　＊　＊

「つまり、シリカ商店までは確かに一緒に居た訳だね？」

「そーゆー事だね」

クレアが居ないと気付いた俺とセツは、いつどこではぐれたのか考えてみたのだが、特にこれと云った収穫は無かった。

「ようするに、裏路地をふらふらしてる時にはぐれたんだね」

何か用があって別行動に移ったと云う考え方もあるが、その場合、俺かセツに一言くらいあるだろう。

数日の付き合いしかないが、さすがにそれくらいは分かる。

「どうしよっか？」

はぐれたなら探せば良いんだろうが、はぐれた場所が問題だ。

俺とセツが居るのは、そこかしこに分岐点のあるやたら入り組んだ上に細いわ曲がりくねってるわと云う、人を迷わせたくてしようがない奴が設計したとしか思えない通路の一角だった。

ここから広場へひとりで戻れと言われたら、俺は無理だと即答す

る。
　同じ様な景色が続く、薄暗い上に人通りのない路地を延々歩いて来て迷わない人間なんて、俺は会った事がない。
「通った道を戻るだけなら可能だけどね。あの子だって同じ場所でじっとしてはいないだろうし」
「戻れるんだ？」
　思わず訊いた俺の言葉に、セツは何当たり前の事を、と云う顔をした。
「そりゃあそうだよ。戻れなかったら迷子じゃないか」
　……さっきの言葉を訂正しよう。セツ以外には、俺は会った事がない。
　そう云えば小さい頃、俺とゼンが森で迷うと必ずセツが迎えに来てくれたが、帰り道に困ってるのを見た記憶は無い。
　あれは森を熟知してるんだと思っていたが、ひょっとしたら通った所を覚えてただけだったのか？
「ちょいとイアーク」
「何？」
　思わず過去を顧みていたが、呼ばれて見遣ればセツはあさっての方向を見ていた。
　一体何かと俺も同じ方向を見てみれば、どこかの路地から放たれたらしい矢が数本、高々と空を切っている。
　それらはすぐに落下を始めたが、描いた放物線がカーブと呼べないほど鋭角だった。

「何あれ」

あれじゃ射ったヤツのすぐ近くに落ちるだろう。
目の前の標的に放ったとしか考えられない飛距離だが、滞空時間が長過ぎる。
避けてくれと言っている様なものだ。

「クレアかも知れないね」

奇妙な軌跡が描かれた後の空を見上げたまま、セツが言った。

「クレアが？」

さっきの射手（いて）がクレアだと仮定して考える。
まず、俺達への合図って訳じゃ無いだろう。
音が鳴る鏑矢（かぶらや）じゃないんだから、気付かないと考えるのが自然だ。
他に矢を射る様な状況を考え、セツをちらりと横目で見る。

「それ、やばくない？」
「そうだねぇ」

わざわざ街中で武器を振るうなんて、良い状況である筈が無い。
にも関わらず、セツに慌てた様子は無かった。

「……その落ち着きは、何か根拠があっての事？」
「まあ、そうだね」

俺の問い掛けをあっさり肯定した上で「でも」と続けた。

「念の為に行ってみようか。私の予想が当たっていると云う確証は

無いんだし」

セツの予想では、さっきの矢の射手はクレアで、何らかの良くない状況だろうが、危険は大して無いらしい。

射手がクレアじゃないなら俺達には関係無いし、クレアだったとしても問題無いなら別に行かなくても良いだろう。

つまりセツの言う「念の為」は、射手がクレアで、しかも危機的状況にあると云う、予想が半分だけ当たった場合を言ってるんだろうが……。

「セツが危険な橋を渡るだけかもよ？」

そんな見事に都合の悪い状況は、都合が良いだけの状況と同じ程度にあり得ない。

一番あり得る悪いパターンは、クレアは全く関係無い、ならず者同士の喧嘩だったりした場合。

冒険者とは云え、女子供がのこのこ顔を出すのは無謀過ぎる状況だ。

「イアーク、あんたがいるじゃないか」

だけどセツはそれだけ言うと、矢が見えた方向へ向かってしまった。

それは、俺が居るから安心だと云う意味か、それとも俺に丸投げすると云う宣言なのか。

どっちの解釈が正解なのかは分からない。

だけどどっちにしろ俺のやる事に変わりは無いので、深く考えるのはやめて、離れつつあるセツを追った。

０２６）俺の休養日２

矢が消えていった路地は、割とすぐに見付かった。
これだけ距離が近かったならクレアだった可能性が高くなるな、と思いつつ辿り着いたのは、一本の道が行き止まりになっている細い三叉路だった。
明らかに路地の途中でしかないそこが目的地だと判断した理由はふたつ。
ひとつめは、一目で頭が足りないと分かる男が三人居て、ぎゃあぎゃあと口論していたから。街中で矢を放った原因は、十中八九こいつらだろう。
ふたつめが決定的な理由で、野郎共の足元に無造作に突き立った複数の矢があったからだ。

「てめぇら、あの女が矢を射るのを何で気付かなかったんだぁ！？」
「そりゃあ背中向けてたからっすよぉ」
「エモノに背中を見せるんじゃねぇよばかやろおぉ！」
「兄貴だってあのヤローに振り向いて怒鳴ってたじゃないっすかぁ」
「うるせぇ！　口答えすんじゃねぇよボケェ！」

騒いでいる男達は、口論と云うよりひとりが怒鳴り散らしているだけらしい。
しかも、内容と喋りがバカっぽい。
「どうやら巧く逃げたみたいだねぇ」
「だね」

クレアだったのかどうかは確認出来なかったが、とりあえず矢を放った人間は無事らしい。

「セツ、俺達もさっさと行かない？」
気付かれたら面倒だし、と言外に込めて問い掛けると、セツが首を横に振った。
「少し遅かったねぇ」
その言葉に振り返ると、内輪揉めをしていた三人が揃って俺とセツを見ていた。
「おぅおぅ何だ、今日はツイてるなぁ？」
「美人の姉ちゃんには逃げられたが、あれはあれで上モノじゃねぇ？」
「てめぇら、今度は逃がすなよぉ？」
怒鳴り怒鳴られだった三人が、揃ってにやにやしながら近付いて来る。
「なぁ姉ちゃん、悪いようにはしねぇからよぉ？」
「黙ってついてくるだけで良いんだぜぇ？」
使い古した定型句の様な言葉を吐きながら、じりじりと距離を詰めて来る。
どうやら、連中に見えているのはセツだけらしい。
「はぁ……仕方ない。セツ、下がってて」
「おや、任せて良いのかい？」
「俺が何の為に付いて来たと思ってんの？」
「そうだったね」

愉しげに言って数歩下がるセツとは反対に、俺は一歩前に出た。
「あん？　何だ坊主ぅ？」
やっと俺を視認したらしく足を止めた連中は、今度は俺に向かって言葉を投げて来る。
「邪魔しようってのかぁ？」
「ナイトごっこなら相手見てやんねぇとなぁ？」
「痛い目見るだけだぞ坊主ぅ？」
口々に言って、ぎゃははとバカっぽく笑う。
「痛い目見るのはそっちでしょ？」
聞こえる様に呟いてやると、バカ笑いをぴたりと止めて睨んで来た。
「今、なんつったガキィ？」
「痛い目見るのはそっちでしょ、て言ったんだけど？」
首を傾げてもう一度繰り返してから、ああ、とわざとらしく手を叩いてみせる。
「そっか、一度じゃ理解出来なかったか。バカだから」
「あぁ！？」
「んだとぉ！？」
「どうやら痛い目みてぇらしいなぁ坊主ぅ！？」
「だから、痛い目見るのはそっちだって」

やれやれと云う顔をして、腰に手を当てて溜息を吐いて見せる。
「上ォ等だぁ！」
「ほいっと」
正面から特攻して来た一人目の胴を鞭で横薙ぎに打つと、あっさりと後方へ吹っ飛んだ。
しかも残りのふたりもその後に続いて突っ込んで来ていたらしく、三人揃って地面を転がる。
「な、何ぃ！？」
「坊主ムチなんぞいつの間にぃ！？」
「さっき腰に手を当てた時に」
て云うか、俺が鞭をぶら提げてるのはずっと見えてた筈なんだが。
「バカなのこいつら？」
「んだとこらぁ！？」
「おっと、うっかり心の声が」
気を付けな……くても良いか。だってこいつらホントにバカだし。
「何だその残念なものを見るような目はぁ！？」
「バカなのに変な所で敏いな。ある意味感心するよ」
「そんな感心いらんわあぁ！」
「こんの若白髪ぁ！」
「……へぇ？」
勢いを付けて鞭を振り切ると、あっさりと音速に達した鞭の先端

が、空気を裂いて鋭い音を立てた。

『へ……？』

団子状に転がったまま、間の抜けた声で綺麗にハモった三バカに向かって、ゆったりと歩み寄る。

「誰が、若白髪だって？」

にっこり笑って問い掛けたのに、なぜか見る見る青褪める三バカ。

「誰が、爺さんみたいな白髪頭、だって？」

胸の前で鞭を両手で持ち、これ見よがしに扱(しご)いてやると、慌てた様子でそれぞれ口を開き出した。

「い、いやぁそこまでは言ってねぇよぉ」

「そ、そうだぜぇ？」

「お、俺はただ若し」

「くたばれ」

何か言ってたが、最後まで聞いてやる義理は無い。

＊　＊　＊

「気は済んだかい？」

「多少はね」

背後から掛けられたセツの言葉にそう答えて立ち上がる。

「どうしようか、これ」

左手に持っていた鞭を適当に丸めて腰のホルダーに戻しつつ、気絶した歪な三バカを顎で示してセツに意見を訊いてみる。

「放っておいて良いんじゃないかい。死んじゃいないんだから、目が覚めたら自力で帰るだろうさ」

かなり容赦ない案が出された。

「分かった」

だが、ぼっこぼこにした犯人（おれ）にそれをどうこう言う気は勿論無い。こんな裏路地で気絶してたら確実に身包（みぐる）み剥がされるだろうが、それで死にはしないだろうし。

そもそも向こうが先に絡んで来たんだから、自業自得だ。

「さて、それじゃあ世界樹へ行こうか」

宣言通りに三バカを放置して踵を返したセツは、意気込みも新たにそう言った。

「本気？」

現在セツは、シリカ商店で購入したとあるアイテムに興味津々だ。店主に色々と訊ねるも、のらりくらりとかわされた為、実際に使ってみたくてしようがないらしい。

だけど使うには一度樹海に入る必要がある為、これから向かうと

言い出した。
その時はもうひとり戦力があったが、俺とセツのふたりになってもまだ樹海に向かう気だとは。

「私が冗談を言った事なんかあったかい？」
「ひょっとしたらあるかもよ？」
「私の記憶には無いねぇ」

話しながらもすたすたと歩を進めるセツを追い掛けながら、これは無理だと判断した。
ゼンも居るならまだしも、俺ひとりでセツの暴走を止めるのは、はっきり言って不可能だ。

「はぁ……分かったよ」
「それは何より」

諦めの溜息と了承の返事を一緒に吐き出すと、簡素な返事が返って来た。
これはかなり入り込んでる証拠で、探究モードに近い状態だ。
今はまだ情報収集の段階だからこの程度だけど、完全に入り込んだら寝食は勿論、俺たち三人も思考の外へ放り出される。
そうなる前にと、俺はセツへと釘を刺しにかかる。

「その代わり、入口までだからね」
「はいよ」
「試すのも一度だけにしてよ？」
「そうかい」
「ちゃんと聞いてる？」
「はいはい」

セツの返事にそこはかとなく不安を抱きつつ、はるか前方に聳(そび)える世界樹を見遣った。

０２７）僕らの休養日１【稽古】

正面から向かって来る相手を見据える。
身構えつつ注視していると、ふいに相手の体が左へぶれた。
その小さな動きに釣られて、僕の体も微かに左へと重心が動く。
刹那、武器を持つ右手に鈍い衝撃が走った。
一拍遅れてやって来た痛みに感覚が一瞬麻痺してしまい、迎撃までにタイムラグが生まれる。
しまった、と思う間もなく。
僕の首許（くびもと）に、木剣（ぼっけん）が突きつけられていた。

「……参りました」

降参の言葉を告げながら、木剣を手放してホールドアップしてみせる。
すると肉薄していた切っ先が離れ、文字通り目の前に迫っていた人物から、鋭い空気が霧散する。

「ゼン君、なかなかやるねー」

いつも通りの雰囲気に戻ったキルシェさんは、ふにゃりとした笑顔を見せてそう言った。

「瞬殺されちゃいましたけどね」

傍らに転がっている木剣を拾いつつそう返す。
ここは街外れの開けた土地で、手合わせ出来る広さを求めて移動した結果、辿り着いた場所だった。
少し離れて僕らの手合わせを見ているオトーの遥か後方には、悠

然と聳える世界樹が見えている。

「フェイントを混ぜると弱いよねー」

「返す言葉もありません……」

キルシェさんと何度か手合わせして気付かされた事だけど、僕はフェイントに無茶苦茶弱かった。

正面から真っ向勝負をすれば何合か打ち合いも出来るんだけど、一度でもフェイントを入れられるともう駄目で、例外無くあっさり一本取られてしまうのだ。

こんなに釣られ易くて、パーティーの壁となる前衛なんか務まるんだろうか。

「でも、フェイントに反応するって事は、ある程度の実力があるって事でもあるんだよー」

僕が内心落ち込んだ事に気付いたのか、キルシェさんがそんな事を言い出した。

「釣られるって事は、言い換えれば動きが見えてる、反応出来てるって事でしょー？」

「確かにそう云う考え方も出来ますけど……」

いくら見えていても、攻撃させる隙を作る様な反応の仕方しか出来ないんじゃあ、意味が無いのを通り越してマイナス要素にしかならない。

そんなネガティブ気味な僕の反論を気にする事もなく、キルシェさんはマイペースに話を続ける。

「ゼン君の戦い方って、相手の出方を見てから行動を決めるスタイ

ルでしょー？」
「え？」

言われてみれば確かに、僕は相手の動きを見る待ちの姿勢から入る事が多い様な気がする。
思い返せば、やたらと絡まれるアークに巻き込まれる形で積まれた喧嘩と云う名の実戦経験は、襲いかかってくる相手を捌く所から始まるものが多かった。
だからだろうか。
そう云えば樹海の中でも、よく相手が襲いかかって来るのに合わせてカウンターを仕掛けたし。
相手が人間以外でも変わらず選ぶほど染み付いた戦法なら、確かに僕のスタイルと言えるのかも知れない。

「自覚なかったのー？」

僕が自分の戦闘の癖とも言えるものを初めて知って戸惑っていると、キルシェさんの呆れた様な声がした。
て云うか、呆れられた。

「自分の戦闘スタイルくらいは知っておきなよー」
「すみません……」

なんだかいたたまれないと云うか申し訳ない様な気持ちになって、思わず謝ると「わたしに謝ってどうするのー」と更に呆れられてしまう。

「咄嗟の時に自分がどう動くのか把握しておかないと、困るのはゼン君なんだからねー」
「仰る通りです……」

腰に手を当てて「まったくもー」と言ってひとつ息を吐いたキルシェさんは、それで切り換えが完了したらしい。

「でね、相手の動きを見て反応するまではできてるんだから、後はそれが囮か本気かを判別できれば良いだけでしょー？」

「そうです、けど」

あと少し、みたいにキルシェさんは言うけど、その判別こそ一番重要で一番難しい事だと思う。

「だから、ゼン君はフェイント攻撃を受けまくれば良いと思うのー」

「はい？」

相変わらず気の抜けた感じの笑みを浮かべながら、木剣を構えるキルシェさん。

「習うより慣れろって言うでしょー？　今からわたしがフェイントを入れたり入れなかったりして攻撃するからー」

「え？」

「ゼン君はとにかく、攻撃を受けない様にがんばってねー」

言うだけ言って、いきなり踏み込んで来るキルシェさん。

さっきの手合わせで詰められた距離をほとんど離さないままに会話していたから、構える様な時間は無い。

それでも倒れる様に後ろへ転がると、追撃に備えて跳ね起きる。

「へ？」

キルシェさんは、一歩踏み込んだ位置で止まっていた。

「間に合わなくても諦めないのは、良い姿勢だけどねー」

……やられた。

「気配のフェイントなんて、ありですか？」

今の踏み込みでは攻撃をする気が無かったらしいキルシェさんだけど、踏み込んだ瞬間に強い敵意の様なものを叩き付けられた。

攻撃を当てるどころかする気も無かったにも関わらず、攻撃する気満々の意思だけを発散するとか……なんだそれ。

「そりゃアリだよ、大アリだよー」

僕の愚痴に近い抗議もさらりと流された。大ありらしい。

「まあでも、今のはこう云うフェイントもあるよってパフォーマンスみたいなものだからー」

今日はもうやらないよー、と朗らかに笑うキルシェさん。

「今のゼン君の課題は、動きによるフェイントだからねー。まずはそれを克服しないとー」

再び木剣を構えると「ゼン君も構えてー」と促される。今度はいきなり仕掛けては来ないらしい。

「分かりました」

キルシェさんの言っている事が嘘か本当かは分からない。

本当に動作によるフェイントしか使ってこないかも知れないし、実は今の言葉も布石なのかも知れない。
どちらが正解なのかは分からないけど、どちらにしろ良い訓練には違いない。

「……お願いします」

ひとつ深呼吸をして、僕も木剣を構えた。

０２８）僕らの休養日２【合流】

地面に寝転がって見上げた空は、一面茜色だった。
別にさぼっている訳じゃなく、投げ飛ばされて起き上がれなくなっただけだ。
主に体力の限界で。

「ちょっと休憩しよっかー」
「は……い」

まだ荒い息の下から何とか返事をして、そのままの姿勢で体力回復を図る。
横になったままちらりと見るとキルシェさんはぴんぴんしていて、見学しているオトーに構いに行ったらしかった。
キルシェさんもずっと僕の相手をしていたのに、この体力の差は一体何なんだろう。
とりあえず明日からは更に体力作りをしていこうと決意しながら、ふと街の方へ視線を遣った。

「あ」

西日に照らされた街から出て来たその人物を見て、上半身を何とか起こす。
どうやら座れるくらいには回復したらしいと一息吐いて、左手を振って存在を主張した。

「クレアー」

名前を呼んでも返事は返って来ないものの、まっすぐ僕の方へと

歩いて来るので、気付いてはくれたらしい。

「あ、無表情の美人さんだー」

そう言ったのは、いつのまにか僕のすぐ後ろに立っていたキルシェさんだ。

「うちのレンジャーのクレアです」

オトーがててててっと小走りにクレアに寄って行くのを見ながら、クレアの紹介をした。

ギルドマスターの勧誘に根負けして入ってくれました、とは言わなかった。何となく。

赤い景色の中に立つクレアとオトーをぼんやり眺めていると、キルシェさんが口を開く。

「フェイントの特訓はここまでにしとこうかー」

真っ赤な夕焼けと云うのは日が落ちる直前のほんの数分しか見られないものだから、完全に日が沈むまであまり時間は無いだろう。

それを裏付けるかの様に、東の空の端はもう藍色に染まり始めていた。

「そうですね」

そろそろ大丈夫だろうと判断して、手を付いて立ちあがる。

少しだるさを感じるものの、宿まで歩いて帰るくらいは問題なさそうだ。

並んで立つ形になったキルシェさんへと体を向けて、背筋を伸ばして腰を折る。

「ありがとうございました」

模擬とは云え剣を合わせた相手に対する敬意と、稽古をつけてもらった事に対する感謝を込めて、頭を下げる。

「こちらこそ、ありがとうございました」

少し間を置いて、同じ言葉が返される。

微かに聞こえた鎧の金属が擦(こす)れたのだろう音が、キルシェさんも同じく頭を下げたのだと教えてくれた。

多分、僕と同じく剣を合わせた相手への敬意と、礼儀を尽くされれば返すべきだと云う考えからだろう。

「それじゃ、完全に暗くなる前に帰ろうかー」

「宿まで送りますよ」

「わ、ゼン君が紳士だー」

どちらからともなく顔を上げると、礼には触れずに会話を続ける。

「女性にひとり歩きさせるなって言ったの、キルシェさんじゃないですか」

そう返してから、ふと気付く。

「ねえ、クレア」

「……何？」

「セ・セツとアークは？」

僕は寝ていたけど、クレアはふたりと一緒に出掛けた筈だ。

僕の問い掛けに、オトーもクレアの顔を見上げた。

「……はぐれた」

「え、いつ？　どの辺り？」

「……まだ日の高い頃に、街の北側の区画で。入り組んだ所だから、探すのは多分無理」

「そっか……」

僕はセ・セツのナビゲート能力の高さを知っているから、ふたりが迷う心配はしていない。

心配なのは、好奇心の塊であるセ・セツと絡まれ体質のアークがふたりだけで行動している事だ。

……とりあえず、面倒を持って帰って来ない事を祈ろう。探すのは無理だと言われた事だし。

「クレアはどうしてここに？」

「……道が分からなくなったから、一度街を出ようと思って」

そう言って、僕らの背後の世界樹を指す。

「なるほどねー。世界樹なら街のどこに居ても見えるもんねー」

今度迷ったら真似しよー、とキルシェさんはやたらと感心している。

これは、もう迷った事があるのかも知れない。

「それから、クレア」

「……何？」

「あと、キルシェさんも」

「わたしもー？」

今更だけど、と前置きしてまずはキルシェさんに向かって口を開く。

「さっきも紹介しましたけど、うちのレンジャーのクレアです」

「……どうも」

僕の意図を理解したクレアが、僕の紹介に合わせてキルシェさんに挨拶をする。

「クレア、この人は旅人のキルシェさん」

「よろしくー」

クレアも以前会った事を覚えていたらしく「会うのは二度目だねー」と云うキルシェさんの言葉に無言で頷いていた。

「さて、それじゃあ宿に戻ろうか」

稽古は終わったし、ふたりの紹介も済んだ。

あれだけ真っ赤だった空も西の端を残して暗くなり、星が瞬き始めている。

「……待って」

そのまま街に入ろうとした僕を、クレアが引き留める。

「何、クレア？」

「……そこから街に戻ると、北の区画を通る事になる」

「あ、そっか」

ついさっき、街の北側は入り組んでいると聞いたばかりだ。
「じゃあ、もうちょっと東に周ってから入ろうか」
東を選んだ理由は特に無い。
だけど東から入る事に問題がある訳でもないから、特に反論は出なかった。
行きは西側から出たし、今度暇が出来たら街の南側へ行ってみようかなぁ、なんて考える。
「それで、僕はキルシェさんをどこへ送って行けば良いんですか？」
ここから近いなら、戻る道を少し迂回すれば送って行ける。
遠い場合は、先にクレアとオトーを宿に送って、それから改めて行こうかと考えていた。
「ありがとー。じゃあ、サクヤの店までお願いしようかなー」
「え、まだ飲めるんですか？」
思わず出掛かった「また飲むんですか？」と云う言葉は、ぎりぎりで呑み込んだ。
「飲めるよそりゃあー。お昼のエールなんて、もう体内に一滴も残ってないのさー」
「口調変わってますよ」
「お酒が飲めるとなれば、わたしのテンションも上がるのさー」
「そうですか……」
何かもう突っ込むだけ損な気がして適当に相槌を打っておく。
ふと、傍らのクレアがずっと前方を見ている事に気付いた。

「クレア、どうしたの？」
「……誰か来る」
「誰か……？」

その視線を追ってみると、確かに遥か前方に人影が見える……様な気がする。

「誰だか分かる？」
「……まだ無理。もう少し近付けば分かる」

日はもう完全に落ちたと言って良い。
そんな時刻に街を出て来たって事は、鉢合わせたら面倒な事にならないとも限らない。

「隠れた方が良いのかな……」

僕には人かどうかもよく分からない前方の影を見ながら呟くと、クレアから「必要無い」と云う返事が返って来た。

「クレア、見えたの？」
「……見えた。私が昼にはぐれた二人」
「え、えぇっ？」

クレアに移していた視線をまた前方の影へと向ける。
確かに人の形の影が二つ歩いている……様な気がする。

「駄目だ、僕には見えない」

さすがはレンジャー。夜目と遠目が抜群だ。

「でも、なんで？」

街の外を歩いているのは良いとしても、街の外へと向かっている意味が分からない。

まさか二人だけで樹海へ潜ろうとしているって事は無いだろう。

アークはともかく、セ・セツがそんな無茶をするとは思え……

……あ。

「クレア、二人の様子って見える？　特にセ・セツ」

思い付いてしまった嫌な予想の確認の為に、クレアに二人の様子を訊いてみる。

「……マスターが前を歩いてる。後ろから話し掛けられているけど、ほとんど答えてなくて会話になっていない」

「うわ……」

僕の予想、大正解。

０２９）僕らの休養日３【暴走】

「ゼン君、どうしたのー？」

いきなり天を仰いで目を覆った僕に、キルシェさんから不思議そうな声が掛けられる。

「いえ……今からちょっと大変だなぁ、と」

「大変って、何がー？」

「えーと……すぐに分かりますよ」

こうして話している間も影との距離はぐんぐん縮まっていく。

ふたりも向かって来ているから、近付く速さは単純に歩く速度の倍だろう。

そうして影らしきものは僕の目にも二つの人影として映り、徐々に明確になって行く。

まず確認出来たのは、すでに日が沈んでしまった夜の中に浮かび上がる真っ白な髪だった。

「――、――――、て――っ――？」

「――」

「――も――――、て言っ――――？」

「――？」

「――だよ」

ふたりの声も途切れ途切れに聞こえて来たけど、クレアの言った通りかなり一方通行な遣り取りみたいで、会話しているとは言い難い。

これは、セ・セツの好奇心に火が点いていると見て間違いない。

「だからもう帰らない？　日も暮れちゃったしさ」
「そうだねぇ」
「同意する様な返事なのに、歩く速度と進行方向が全く変わらないのは何でだろうね？」
「不思議だねぇ」
「いや不思議じゃないから。セツが足を止めないのが原因だから」

声がはっきり聞き取れる距離なだけあって、お互いの姿もくっきりと見える。
そんな距離になって、やっと前方の気配に気付いたらしいアークが、そこで初めてこっちを見た。

「ゼン！」

開口一番で僕を呼ぶ。

「手伝ってくれ」

そしてふた言目がそれだった。

「止められるかなぁ……」
「止めないとまずいんだよ」

僕のぼやきに返って来たアークの声が妙に深刻だった気がして、目だけで訊いてみる。

「セツを止めないと、今日の宿代すら足が出る」
「まじで？」
「大マジ」

僕らの懐事情は確かに暖かいとは言えないものだったけど、まだ数日宿泊出来る程度の資金は残っていた筈なのに。
一体何に……て云うか、多分現在進行形で何かに使ってるんだろうけど。

「どうするの？」

詳しい事情は後で訊く事にして、とりあえず最優先事項を確認する。

「セツが樹海に行くのを止めてくれ。とにかく全てはそれからだ」
「分かった」

＊　＊　＊

数十分後。

「ちょ、大地の裂け目じゃないのあれ？」
「間に合わなかったか……！」

無理でした。
まぁ、僕とアークが力を合わせた所で、過去にセ・セツの暴走を止められた事なんてほとんど無いからしようがない。
ちなみに大地の裂け目と云うのは文字通りの意味で、世界樹の根元から少し離れた丘の横腹にある、地下へと続く亀裂の事だ。
簡単に言うと、樹海の入り口。

「しゃーない、諦めるか」
「でもアーク」
「次で止める」

ゼンも合流した事だし、と前髪をちょっと鬱陶しそうに掻き上げながらアークが言う。

「えーと、未だによく分かってないんだけど」
「あぁそうか。それは後で話す。とりあえず、ここから宿まで引きずるのは無理でも、広場から宿までなら何とかなるだろ？」
「それはそうだけど」

引きずる、と云う言葉の主語がセ・セツなのは言うまでもない事だから良いとして。
どうして樹海の入り口と街の広場が比較されるんだろうか。

「今止められなかったのは痛いけどな。まぁ、俺とゼンが野宿になるだけだし」
「あ、セ・セツ達は泊まれるんだ？」

野宿、と云う辺りから声をひそめて話すアークに合わせて、僕も小さな声で返す。オトーに聞こえない様にする為だ。
大地の裂け目に一番近いのが先行と云うか暴走しているセ・セツで、その少し後ろに僕とアーク。更にもう少し離れて、セ・セツ以外の女性陣が固まって歩いて来ている。
後ろは後ろで話をしているし、離れている距離から考えても大丈夫だろうとは思うけど。
聞かれたくない話が小声になってしまうのは、人としてしようがない事だろう。

「当たり前だろ？　オトーまで野宿させるのは、セツが相手でも譲歩出来ない」
「そりゃそうだね。じゃあ、次で最悪気絶でもさせてベッドに縛っておくって事で良い？」
「これで止まらないなら、そうなるだろうな」
「どっか良い場所探さないとね。アーク、どこか心当たりない？」
「ある訳ないだろ。ここに着いてまだ五日だぞ？」
「そうだけど。今日一日セ・セツに引っ張り回されたんでしょ？その間にどこか見付けてたりしないかな、と云う希望を込めて」
「儚い希望だったな」
「じゃあ、セ・セツをベッドに固定してから探すと云う事で」
「それはダメだよー」

僕とアークがぼそぼそと今夜の野宿についての相談を纏(まと)めかけた所で、いきなりキルシェさんが割り込んで来た。

「うわっ」
「え、何だあんた」

僕らの間に文字通り体を割り込ませたキルシェさんは、アークの左腕と僕の右腕をそれぞれ捕まえると、アークに向かってにっこりと笑う。

「話すのは初めましてだねー。キルシェ・カードです、キルシェって呼んでねー」
「いや、別に名前訊いた訳じゃ……」
「わたしは名乗ったよー？」
「……あー、イアーク」
「分かった、アー君だねー」
「あーくん……？」

「アー・イアーク君でしょー？」
「違う、イアークだ。あと俺に家名はない」
「そっか、それはごめんねー？」
「別に」

ほぼ初対面のキルシェさんと話している今のアークは、完全に素だ。
さっきまで素で話していたのと、唐突な上にマイペースなキルシェさんの登場でうっかりしているんだろうけど、普段からとりあえずで猫を被っているアークにしては、珍しい。

「アー君、優しいねー」
「だから違うって」
「うん、だからイアーク君の略で、アー君だよー」

よろしくねー、と笑うキルシェさん越しに僕を見て来るアークの目が、何とかしろと訴えていた。

「こう云う人なんだよ、キルシェさんは」
「ゼン君、それはどう云う意味かなー？」
「いえ、別に大した意味は……所で、ダメって何がですか？」

キルシェさんの問いを誤魔化しがてら話を戻そうとしてみると「あ、そうだったー」と、あっさり乗ってくれた。

「ゼン君達、野宿するつもりなんだよねー？」
「なんのことデショウ？」
「良い場所知ってるよー？」
「え、どこですか」
「やっぱりー」

「あ」

しまった。シラを切るつもりだったのに。

０３０）僕らの休養日４【同類】

「馬鹿ゼン」
「ごめん」

キルシェさんの引っ掛けにあっさりと乗ってしまった僕に、アークが軽く責める様な言葉を投げて来た。
それに僕が謝ると「まぁ、ゼンだからな」と云う、返事かどうかもよくわからないものが返される。

「どーゆー意味かな？」
「そーゆー意味だよ？」

そーゆー意味と言われても僕にはさっぱり分からないとか、訊かれた事に疑問形で返すのはどうかと思うけどとか、小首を傾げてきょとんとされても、とか。
いくつか返す言葉が思い付いたけど、どれも無駄な会話の糸口になりそうで、間にキルシェさんを挟んでいる今わざわざする会話でも無いだろうと、僕はその全ての言葉を飲み込んだ。

「で、何？」

僕がそうするのを見越していたみたいなタイミングで、アークがキルシェさんに話を促す。

「何って、何かなー？」

アークの、余分なものどころか必要なものまで削ぎ落とした質問に、キルシェさんが笑顔で訊き返す。

「えーと、もし仮に僕らが野宿する事にしたとして、キルシェさんはそれについて何かを言いたいんですよね？」

アークの質問を補足しながら、野宿は仮定の話だと云う強調もしておく。

さっき認めた様なものだけど、言質を取られる事を避けておいた方が良い様な気がする。何となく。

僕の言葉に笑顔のキルシェさんが頷きかけた時、「その前に」とアークが口を挟んだ。

「いい加減放してくれない？」

「何をー？」

「腕だよ、腕」

キルシェさんは、僕とアークの間に割り込む時に僕らの腕を掴み、放さないまま今に至っている。

しかもいつの間にか腕を組む形になっている事は僕も気になっていたんだけど、アークには限界だったらしい。

「えー、せっかく組んだのにー」

「知るか。放せ」

取り付く島も無いアークの態度にも、キルシェさんは全く怯まなかった。

「じゃあ代わりに手を繋ごうー」

「嫌だよ」

「それじゃあ放せないなー」

「放せよ」

「それじゃあ手を繋ごうー」
「冗談じゃない」
「我が儘だなー」
「どっちが」

そんな遣り取りを横で見ていた僕は、何となく悟ってしまった。
嫌そうな顔のアークに嬉々として絡む所とか、我が道を突き進む所とか、他にも色々。

「アーク」

渋面のアークがこっちを見た事を確認してから、僕はゆっくりと首を横に振った。
諦めよう、と云う僕のメッセージを理解したアークが何か言う前に、素早く、だけどはっきりと告げる。

「この人、セ・セツの同類だ」

きっとアークは、意識の深い所では気付いていたんだと思う。
だからこそ、ほぼ初対面のキルシェさんに対し、素で話していたんじゃないだろうか。

「そうか」

アークがぽつりと口を開いた。

「それじゃあ、しようがないな」

凪いだ海の様な声だった。

「何だか、もの凄く気になる反応だねー？」
「気にしないでくれ」
「なぁに、その悟った様な表情はー？」
「気にしないで下さい」
「え、ゼン君までー？」

何だか慌てた様子のキルシェさんとは反対に、僕は妙に静かな気持ちになっていた。
きっとアークも同じだろう。

「さて、アークが納得した所で、話を戻しましょうか」

キルシェさんが「わたしは納得してないよー」と言っているけど、気にしない。

「もし仮に万が一、僕とアークが野宿をする事にしたと仮定して、キルシェさんはそれに対して意見があるんですよね？」

さっきは何となく避けようとした野宿の言質を、今度は明確な意志を持って避けにかかる。
キルシェさんがセ・セツの同類だと判明した以上、何が何でも言質を取られる訳には行かないからだ。
更に仮定を強調する僕のその対応に、アークも「良し」と云う顔をしていた。
反対に、キルシェさんはますます何か言いたそうな複雑な顔になる。

「すごく気になるけど、説明してくれる気は無いんだよねー？　時間も無いみたいだしー」

はぁ、と小さく溜息を吐くと、僕とアークの腕を抱え直す。解放する気は無いらしい。
それで切り替えが完了したらしいキルシェさんに、昼間の稽古を思い出した。

「せっかく街にいるんだから、野宿はダメだよー。特にゼン君はちゃんとベッドで休まないと、疲れが取れないよー？」

その言葉に、アークがキルシェさん越しに僕を見遣る。
視線だけの問い掛けに昼間の稽古をざっと説明すると、呆れた声で「何やってんだ」と言われてしまった。

「いや、だって、明日は樹海に潜るだろうから、やたらと寝てた身としては、その前に身体を動かしておかないと、と思って」
「その気持ちは分からなくもないけどさ、休養日に疲れを取らずに溜め込んでどうするんだよ？」
「一晩寝れば消えるよ、多分」
「その、多分、てのが心配なんだけどな？」
「いや、えーと」
「ねー？　野宿はダメでしょー？」

追い詰めるアークと追い詰められる僕の会話は、キルシェさんのその言葉でぶつりと切られた。

「ちゃんとベッドで休む気になったー？」

その問い掛けに、アークは渋面になって口を開いた。

「ゼンを野宿させるのが拙(まず)いと云う事は分かった」
「まぁでも、これはしようがないって云うか……オトーやセ・セツ

を野宿させる訳には行かないし」

別に、アークだって野宿したい訳じゃないだろう。それしか選択肢が無いと云うだけで。

「クーちゃんはー？」

キルシェさんが不思議そうに首を傾げて訊いて来た。

クーちゃんって……あぁ、クレアか。

「クレアは仲間になったばかりなんで、まだ財布が別なんです」

宿代や食費はしばらく自分で賄うからと、本人からも言われている。

だからクレアは問題無く宿に泊まれるだろう。

僕の説明にふんふんと頷くと、僕とアークの腕をぎゅっと掴んで言った。

「要するにー。あのおねーさんを止めれば、ふたりもベッドで休むんだよねー？」

「それはそうですけど」

それが出来なかったからこその野宿の相談だった訳ですが。

と言い掛けて口を噤(つぐ)んだ。

「おっけー」

そう呟くと、僕とアークの腕を解放したキルシェさんがするりと前に出る。

「キルシェさん？」

思わず呼び止めた僕の声に、すたすたと歩き出していたキルシェさんは足を止めて振り返る。

「まかせてー」

にっこり笑顔でそう言って、今度は駆ける様にしてセ・セツの許へと向かって行った。

「まかせてー、と言われても……」

どうしようか？　と隣のアークを見ると、「好きにさせれば？」とその目が言っていた。

０３１）僕らの休養日５【道具】

「で、アーク。今回は何なの？」

セ・セツを止める事を諦めている僕は、今回のセ・セツの暴走の原因についてアークに訊いてみる。

僕らの少し前方では、キルシェさんがセ・セツを呼び止めて何か話している。

大地の裂け目はもう目の前で、キルシェさんの話が終わればセ・セツは突入して行くだろう。

キルシェさんには悪いけど、あの人にセ・セツの気を変えられるとは思っていない。むしろ、セ・セツの足を止められただけでも凄いくらいだ。

僕と同じく諦めているらしいアークが話し出そうとして、ふと何かを思い出した様な顔をした。

「その前に、ひとつ報告がある」

「何？」

「執政院のミッション、覚えてるよな？」

「うん。地下一階の地図を完成させろ、でしょ？」

樹海の最浅層（さいせんそう）である地下一階程度は踏破出来なければ、樹海の探索許可は出せないとか何とか。

「あれ、クリアしてた」

「へ？」

アークの予想外の報告に、思わず間抜けな声を返してしまった。

「でも、まだ調べて無い通路とかあったよね？」
探索に出てすぐに見付けた北へ伸びる道とか、大地の裂け目から見て北東の辺りで見た、やっぱり北へ伸びる道とか。
要するに、僕らは一階の北側を、まだ全然調べていないのだ。
「俺もそう思ってたんだけど……なんか、北は範囲外だったらしい」
「範囲外って……」
それならそうと言っておいてくれれば良いのにと思う僕と、遅かれ早かれ調べるんだから別に良いんだけどと思う僕が、頭の中でせめぎ合う。
アークも微妙な顔をしている辺り、多分同じ様な感想を持ったんだろう。
まぁ、結果としてさっさと許可は下りたんだし、と後者の僕が前者の僕を何とか説得する。
「それで？」
ミッションクリアは確かに知るべき事ではあるけど、それは前置きでしか無いんだろうと、続きを促す。
「あぁ。それで、なんか親書を渡されてさ、それ持ってシリカ商店へ行けって言われた」
「シリカ商店へ？」
なんでまたいきなり、街の行政が一武具屋を名指ししたんだろうか。
「うん、まぁ俺も疑問には思ったんだけど、とりあえず言われた通

りセツと行ってみた訳だよ。シリカ商店へ」

渡された親書を持ってさ、と言ってアークがちらりと前方を見た。

同じ様に僕も見遣ると、セ・セツとキルシェさんは相変わらず足を止めて話し込んでいる。

何を言っているかまでは聞こえないけど、その様子からもう少し掛かりそうだと判断してアークに向き直る。

アークも同じ様に感じたらしく、視線をこっちに戻して話を続けた。

「それで分かったんだけど、執政院がシリカ商店だけに取り扱いを許可している道具（アイテム）があるんだってさ。しかも、その道具を買うには条件がある」

「それが、地図作成のミッションの達成？」

「そう」

なるほど。

「つまり、セ・セツの興味は買える様になったそのアイテムにある訳だ？」

「ああ。樹海から一瞬でエトリアの街へ戻る事の出来るびっくりアイテム。『アリアドネの糸』て言ってたかな」

……えーと？

「一瞬、で？」

思わず首を傾げた僕を見て、アークがちょっと笑った。

「意味分かんないよな。俺も最初そう思ったよ、何かの比喩かなん

かだろうって」

アークのその言い方から判断すると、比喩じゃなかったと云う事だろう。

つまり、言葉通りに瞬間移動が出来るアイテムだと。

「何その不思議アイテム」

そう言うと、アークの笑みが更に深くなった。

どうやら僕の考えで正解らしい。

「そりゃ、セ・セツが興味持つ筈だね」

「だろ？」

むしろ持たない方がおかしい。

「で、色々店主に問い詰めたんだけど、のらりくらりと逃げられてさ。その次には自分で試したいと言い出して」

そこまで聞けばさすがに後は想像が付いた。

今ざっと話を聞いただけの僕でさえ、いくつか疑問が浮かぶ様な道具だ。

セ・セツなら僕の何倍もの疑問と推測と検査方法が思い浮かんでいる事だろう。

「糸を買って樹海へ行き、糸を使って街へ戻る。これを繰り返したもんだから」

「今日の宿代まで危うくなった、と」

「ああ。道具の効果が効果だからさ、次樹海に潜る時にひとつは持って行きたいだろ？」

「確かに。一晩野宿してでも買っておく価値はあるね」
瞬間移動で街まで戻れるって事は、帰りの体力を考えなくて良いって事だ。
何より毒にやられた状態で全力疾走、なんて無茶もしなくて済むだろう事が大きい。
「ちなみに、その糸を使って出るのが街の広場のどこからしい。多分、他の使用者と被らない様になってるんだろうな。微妙に毎回場所が違うから」
「あぁ、それで広場から宿までって言ってたんだ」
「そーゆー事」
やっと事情が呑み込めた所で、ふと前を見るとキルシェさんがぶんぶんと手を振っていた。
「え？」
「どーした、ゼン？」
何も言わずに指差して、アークの注意をそっちへ向かわせる。
僕が指差したものに気付いたアークも、うそだろ、とぽろりとこぼす。
手を振るキルシェさんは、話していた場所から動いていない。
だけどその傍らにセ・セツは居なかった。
大地の裂け目に背を向けて、セ・セツは僕とアークへ向かって来ていた。
「えっと、セ・セツ止めたのキルシェさん？」
「すっげ……」

セ・セツは呆然としていた僕とアークの目の前までやって来ると、何も言わずに僕とアークの頭をはたいた。

「え、何、え？」

「いきなり何なの？」

いきなりはたかれて軽いパニックに陥る僕と、不服そうにするアーク。

「何じゃないよこのバカタレ共！」

そんな僕らに対し、何故かセ・セツは激怒していた。

「何あっさり野宿なんてしようとしてるんだい！　いくら私に見境が無くてもね、あんたたちを野晒(のざら)しにしてまで調べる気は無いんだよ！」

ちらりと横目でアークを見ると、アークも丁度僕を見て来た。

（キルシェさん、そこから攻めたんだね）

（だな。これは保護者モード激怒版とでも名付けるか？）

（あ、やっぱり保護者モードだと思った？）

（これはどう考えてもそうだろう）

「アイコンタクト取ってないでこっち見な！」

『はいっ』

アークと揃って返事をしながら、直立不動の姿勢を取る。

セ・セツはどうやら樹海に行くのは断念したみたいだから、僕らも宿には泊まれるだろう。

だけど今日は眠れないかもと、頭の片隅で覚悟した。

これまでの登場人物紹介（前書き）

これまでに出て来たキャラクターの紹介とまとめです。

これまでの登場人物紹介

【セ・セツ】
新米ギルド〈ハバキ〉のギルドマスター。アルケミスト。
金髪碧眼で、腰まである髪をゆるく三つ編みにしている。
顔立ちは、一言で言うとあっさり顔。なのに何故か人目を引く。
イーゼン、イアーク、オトーの保護者的存在。
さばさばした姉御肌だが、スイッチが入ると途端に話がくどくなる。
しかも長い。
自分が興味のある事柄になると延々と語り続けて終わらない「探究者モード」と、自らの保護下にある三人が無茶無謀をした時に懇々と諭す「保護者モード」の二通りがある。
この二つの命名者はイーゼンとイアーク。
食事は、かなりしっかり火を通したものを好む。

【イアーク】
新米ギルド〈ハバキ〉のダークハンター。
白髪金目の地黒少年。
服装は黒っぽいものを好む為、髪の毛だけが浮いている。
人畜無害そうに見えて常に何かを企んでいる、様に見られる人畜無害な少年。
慣れない人間は、何となく落ち着かない気持ちになる。
普段は猫を被っている。
食事の席で、自分より先にオトーの食べる分を用意したりする点から、面倒見は良い様子。

彼に「白髪（しらが）」と云う言葉はタブー。

【イーゼン】
新米ギルド〈ハバキ〉のソードマン。
鮮やかな紅い髪をした、穏やかそうな少年。
冒険者だと見破られる事はよくあるが、前衛職とは思われない。
「バードかと思った」は日常茶飯事。
武器に斧を選ぶ事からも分かる様に、そこそこ腕力がある。

【オトー】
新米ギルド〈ハバキ〉のメディック。
気が付くと寝ている、イーゼンとイアークの妹の様な存在。
マスコット的扱いだが、ギルド唯一の回復スキル持ち。
栗色の髪を、肩に付かない程度で切り揃えている。
十三歳前後に見えるが、その割には幼い喋り方をする。語尾に「～です」とよく付く。
セ・セツを「セーセ」、イーゼンを「イーゼ」など、独特の呼び方で呼ぶ。

【クレア】
セ・セツの勧誘に根負けして〈ハバキ〉入りした五人目の仲間。レンジャー。

鳶色の髪を腰まで伸ばしている。
羽飾りの付いた帽子を被り、右目は黒い布で隠している。
それでも一目で分かるほどの美人だが、常に無表情で声にも抑揚皆無。
話し出すのがワンテンポ遅い。
冒険者になって半年で、しばらく単身樹海に潜って日銭を稼いでいた。

【キルシェ】
エトリアの街に逗留(とうりゅう)中の旅人。

くすんだ赤毛に淡いモスグリーンの瞳、褐色の肌を持つ長身の女性。
本人曰く騎士の真似事をしていたが、窮屈に感じて旅に出た。
常に語尾を伸ばして喋る。
一メートル以上ある巨大な盾を持ち歩いている。
イーゼンよりも、数段強いらしい。
大の酒好きで、イーゼンと再会した時も、昼間からエールを呑んでいた。
エールは常温、ビールは冷やしたものを好む。
初対面のイーゼンに「キルシェ・カード」と名乗るも、その場で偽名だと匂わせる発言をしており、正確な所は不明。

【アルバート】
エトリアに来て数日の吟遊詩人。

灰色の髪で、使い込んだリュートを背負っている。
クレアが柄の悪い男達に絡まれている時に、助けようと首を突っ込んで来た青年。
軽いノリで口数が多く、ややオーバーリアクション。

〜エトリアの住人たち〜

・冒険者ギルドのギルド長。
左目に眼帯をした筋骨隆々な人。
イーゼン曰く「絶対、元冒険者」
ギルド長なのにカウンター業務をやっている。仕事が好きなのか人員不足なのかは不明。
冒険者についてセ・セツに一からきちんと説明したり、解散したギルド数を把握しているなど、仕事はきちんとこなしている様子。

・金鹿の酒場の店主
落ち着いた色合いの服を着崩した、おっとりした雰囲気の女性。
「女将」と呼ばれるのが好きではなく、客にも「サクヤ」と名前で呼ばせている。
〈ハバキ〉にクレアを紹介した人物。

・シリカ商店店主
父から店を継いだばかりの二代目店主。
黒髪黒眼に褐色の肌で、自分の事を「ボク」と云う女性。
イーゼンを冒険者だとは見抜きつつ「出たがりのバード」だと思っていた。
初代店主である父は他界した訳ではなく、店の工房で職人をやっている。

・巡回兵
女性を淑女と言っちゃう兵士さんその一と、女性をレディと呼んじゃう兵士さんその二。

・長鳴鶏の宿の店員
起床時刻になると、客の部屋に勝手に入って来て起こしてしまう。
明らかに睡眠不足の客でも容赦なく起こす。
余談だが、この宿は冒険者専用宿。

・執政院の樹海対策部情報室長。
メガネを掛けた背の高い男。
イアーク曰く「こころなし偉そう」
仮にも「長」と付く人間が窓口業務をしている点は、冒険者ギルドと共通する。

これまでの登場人物紹介（後書き）

エトリアの住人はまだ名前が出ていない人が多い為、肩書での紹介にしてあります。

032）はじめてのクエスト

「クレア、あの逃げたの仕留められる？　胴体は傷付けない様に」
「……分かった」
「出来ればで良いから、ってセ・セツ！？　雷は待って雷は！　黒焦げにしちゃったら意味無いから！」

休養日の翌々日。
予定から一日遅れで樹海に潜った僕らは、急遽決定した狩りをしていた。

「そう言うゼンも、斧で真っ二つは止めてくれ。それこそ台無しだ」
「うっ……ごめん。気を付ける」

どうして僕らが狩りをしているのかと云うと、話は一昨日の夜に遡る。
キルシェさんが探究者モードのセ・セツを止めると云う、僕とアークからすれば奇跡を起こした後。
どうせなら夕飯を一緒に食べようと云う話になり、そのまま六人で金鹿の酒場へと向かった。
そこで僕らが執政院のミッションをクリアしたと知ったサクヤさんが、それじゃあと教えてくれたのがクエストについてだった。
クエストと云うのは主に街の住人が冒険者へと依頼する仕事の事で、大抵の酒場にその為の連絡板があるらしい。
言われてみればサクヤさんの店でも、何枚もの紙が無造作に張り付けられた大きな板が店の一角に見えていた。
僕らの席からは距離があったからその内容までは分からなかったけど、依頼を物色しているらしい冒険者の姿もあった。
冒険者に頼むだけあって樹海関連のものばかりだけど、内容は素

材集めから魔物退治まで様々らしい。
難易度も勿論ピンからキリまである為、クエストを受ける時は実力と要相談だとも言われた。
このクエストと云うのも、エトリアの冒険者として執政院に認められるまでは受ける事が出来ないそうだ。
受けたいクエストがあれば、店主に声を掛けて受託手続きをすれば良い。
そこまでざっと説明をすると「よかったら依頼を引き受けてね」と言って、サクヤさんは他の客の相手をするべく去って行った。
アークを見ると丁度目が合ったので、軽く頷いて見せる。向こうも同じく頷いた。
今日の宿代は何とかなったとは云え、僕らの財布の中身が心許ないのは変わらないのだ。
そこにクエストと云う資金稼ぎの手段が見つかったのは、正に渡りに船だろう。
ちなみにどうして樹海に潜るまでに一日空(あ)いているのかと云うと、単に僕とアークが使い物にならなかったからだ。
休養日の晩から翌日の昼近くまで、保護者モードのセ・セツに延々と叱られてしまった為、その日の午後は睡眠で潰れたのだ。
泥の様に眠る僕とアークをよそに、同じく徹夜だった筈のセ・セツは、部屋に閉じこもって何やら書き物をしていたらしい。
ほとんど睡眠時間を必要としない体質は、どうやら今も健在の様だ。

「そろそろ正午だねぇ」
「お昼です！」

戦闘が一段落して一息吐いた所で、セ・セツとオトーのそんな会話が聞こえて来る。
僕らが受けたのは、樹海に住む獣から獲れる『柔らかい皮』を七

枚、と云う素材調達のクエストだ。
具体的にどんな獣の皮が良いのか訊ねてみると、森ネズミやひっかきモグラと云う獣の皮がよく使われているらしかった。
そうして僕らは朝早くから、ネズミとモグラを求めて樹海の一階をうろついている訳だけど。
僕としては、サクヤさんがさらりと言った「魔物」て単語が凄く気になっている。
あの後すぐに店が混み始め、店主であるサクヤさんを長く引き留めるのは難しくなってしまったから、詳しい事は分からない。
樹海の生態系は、下層へ行くほど食物連鎖の上位種が居るらしい。
魔物なんて物騒な響きの生物なら居るのはまず下層だろうから、新米冒険者の僕らにはまだ関係無いだろうとは思う。
だけど万が一と云う事もあるから、近いうちに訊いておかないと。

「ゼン？」
「あ、ごめん何でもない」

いつの間にか考え事に没頭していたらしく、怪訝そうなアークの声で我に返る。

「えぇと、これで合計三匹、かな」
「……違う、四匹」

今回仕留めた中で、皮を獲れそうな状態の獲物を確認してそう言うと、クレアにぽつりと訂正された。

「……あれも仕留めた」

短い言葉である方向を指し示すクレアの指先を辿ると、矢が刺さって倒れている森ネズミらしいものが見える。

「凄いね、クレア」
「……何が？」

僕が頼んだ通り胴体への攻撃を避けてくれたらしく、頭部らしき位置から矢が生えている。
しかも刺さっているのは一本だけで、その付近に落ちている矢は無かった。

「一発で仕留めたんでしょ？」
「……大した事じゃない」
「そうなの？　僕は大した事だと思うけど」
「……そうでもない。基本を押さえたレンジャーなら、誰でも出来る」

逃げる四足動物の頭って見えにくいから、やっぱり結構凄い事だと思うんだけど。
何となく、クレアが褒められて困っている様に見えたから、それ以上の追究はやめておく。

「頼もしいね」
「……そう？」

僕の言葉が腑に落ちていないらしいクレアは、小さく首を傾げていた。

「とりあえず、半分は越えたって事だね」
「日が落ちるまでには終えたいな」
「このペースなら何とか揃うんじゃない？」
「いや、もっと早く終わるだろうさ」

唐突にそう言ったセ・セツは、全員の視線を集めた事を確認してから再び口を開く。

「午前中の効率が悪過ぎたんだよ」

「それは、まぁ」

「確かに、ねぇ」

早朝から樹海に潜った僕らは、目的の獣を見付けられなかった訳ではなく、何度か遭遇して倒してはいた。

だけど皮を獲る為には、胴体を傷付けないで倒さなければならない。

それが結構難しく、大きな傷を付けずに倒せる様になったのが、本当についさっきの事だったりする。

「皆、もう皮を採集出来る様に倒せるだろう？　なら後は見付ければ良いだけなんだから、もっと早く達成出来る筈だよ」

何となく、セ・セツの言い出す事が分かった気がする。

「つまり？」

同じく予想が付いたらしいアークが促すと、待ってましたと云う顔でセ・セツは言った。

「午後は探索を進めようじゃないか」

やっぱり。

「そんなに進むつもりは無いよ。北側に、まだ調べていない通路が

二本あるだろう？　そのどちらかだけでも行ってみないかい？」

アークとクレアの顔を見ると、ふたりとも黙って頷いた。特に異論は無いらしい。

僕も特に反対する理由は思い付かなかった。

「じゃあ、行こうか」

ちなみにオトーは終始にこにこしていて、口を挟む事は無かった。こう云う時のオトーはどちらでも構わないと思っているから、満場一致と見て良いだろう。

「よし、それじゃあ皮を採集したらすぐ探索に向かうよ」

「待ったです！」

これまで黙って話を聞いていたオトーが、唐突に挙手をした。

「お昼です！」

「うん、そうだね？」

同意しつつも首を傾げたアークに、更に「ご飯です！」と言い募るオトー。

「つまり、先にご飯にしたいって事？」

「はいです！」

僕の確認に、オトーは大きく首を縦に振る。

「それもそうだね」

「それじゃあ、皮を回収したら、場所を変えてお昼にしようか」

「はいです！」
「異議なーし」
クレアは何も言わなかったけど、自分の意思はちゃんと言う人だから、異議は無いって事で良さそうだ。

０３３）見た目に騙されてはいけない

採集した皮を丸めて束ねて移動して、携帯食を食べながら午後からの探索について話し合う。
とりあえず皮を七枚揃えようと云う事で、探索する予定の北側の通路の近くでうろうろしている時だった。

「クレア、どうかした？」
「……あそこで、何か光った」

南に少し下ると行き止まりになっている通路。その突き当たる場所で何かが光ったらしい。

「僕は気付かなかったけど……」
「俺も」
「……そう」

クレアはレンジャーと云う職業柄、僕らよりも遥かに目が良い。
そのクレアが何かあったと言うなら、確認しておいた方が良いだろう。
何かの生き物の目が反射して光っていたんだったりしたら、背後から襲われる事になりかねないし。

「ちょっと待ってて。様子見て来る」
「俺も行くよ」

同じ結論に達したらしいアークが、僕の少し後ろを付いて来た。
ふたりで草が生い茂った足元を見ながら、樹上にも注意を払いつつ進んで行く。

クレアが指したのは草むらだけど、樹海の獣ならいつの間にか木に登っていると云う可能性も考えておいた方が良い。

「ん……？」

「何かあった？」

草むらの少し奥まった所に、光を反射する小さな何かが見えた。何なのかまでは分からないけど、とりあえず生き物じゃないのは確かだ。

「届くかなぁ、っと」

手を伸ばせば届きそうだったから、膝を付いて手を差し入れる。

「ゼン！」

いきなりぐいっと襟首を後ろへ引かれたと思ったら、目の前を白い軌跡が走った。

それが何かを理解する前に、体が自然と臨戦態勢へと移行する。

「ありがとアーク。助かった」

現れたのは、鋭い爪を持った獣が三匹。

黒い顔に赤い頭部、下半身へ下がる程紫っぽい色へとグラデーションの様に変わっている胴体。

普段土の中で生活しているだけあって、その黄色い目の視力は低そうだ。

僕らが森ネズミと並行して捜していた、ひっかきモグラがそこに居た。

「ひっかき、とかって可愛い響きじゃ済まないよね。あれにひっかかれたら」

たった今目の前を走った爪の残像を思い出す。

位置的に頭に攻撃を受けただろうし、アークが気付いてくれなかったら、間違いなく致命傷だ。

「攻撃は受けなきゃ問題無いよ」

「そりゃあ、そうだけど」

「俺はどちらかと云うと、午前中一杯捜しても森ネズミしか見なかったのに、今になって出て来たこいつらの間の悪さの方を問題にしたいね」

「そればっかりは、しようがないんじゃない？」

探していると見付からないのに気を抜いた瞬間襲われるなんて、樹海ではきっとよくある事だ。

「とりあえずまずは倒さないとね。愚痴は後で聞いてあげるから」

「分かってるよ。俺は右から行くから、ゼンは左よろしく」

「りょーかい。クレア、援護お願いね！」

振り向かずにそう叫んで、僕とアークは弾かれる様にして動き出した。

＊　＊　＊

結論から言うと、無事三匹とも倒す事は出来た。

それも、三匹とも皮を獲れる状態で。

それ自体は喜ぶべき事だけど。

「きっつ……」

「も、むり……っ」

前衛の僕とアークの疲労は、ピークに達していた。

「もう、しばらく、やりたく、ないっ……」

「ゼンに、おなじく」

膝を付いて切れ切れな息の合間にぼやいた僕の言葉に、隣で座り込んでいたアークも短く同意した。

倒せた事は倒せたけど、ひっかきモグラは森ネズミよりも明らかに強かった。

それを胴体に大きな傷を残さない様に倒そうとしたものだから、元から掛かっただろう時間が更に掛かるわ攻撃は入れにくいわで大変だった。

黒焦げにする訳にはいかないからセ・セツに援護は頼めないし。

ほんと、何度死ぬかと思ったか。

「……お疲れ」

「あり、がと」

「おー」

クレアの短い労(ねぎら)いの言葉にやっぱり短く返す。

「……皮の採集は、私たちでやっておく」

それはつまり休んでいて良いって事だろう。

皮を剥ぐのって結構重労働だから、女性陣に任せ切ってしまうの

は申し訳ない。
だけど今のぐだんぐだんな僕らじゃあ、手伝う事すら難しそうだ。
「ありがたく、休ませてもらい、ます」
「俺もー」
皆の厚意に甘える事にした僕とアークは、そのまま倒れる様に転がった。
その後、二匹の皮を剥ぎ終わった辺りで僕とアークも何とか復活して、三匹めの処理はふたりでやった。
「これで探索に移れるねっ」
獲った皮を他の皮と一緒にやっぱり丸めて束ねている時、活き活きと嬉しそうにセ・セツが言った。
ちなみに、光った何かは白い石だった。
価値があるのかどうかは分からないけど、せっかく見付けたんだからとそれも拾っておく事にした。
元々近くをうろついていた為、少し歩いただけで目的の通路へと辿り着く。
周りを警戒しながら進んで行くと、通路が左に折れ曲がった所に出た。
曲がった途端に戦闘開始、なんて事は避けたい為、前衛職の僕とアークが皆から離れてそろっと通路の先を覗くと、初めて見る生き物が居た。
「こんな水場から離れた所に？」
「この先に水場があるのかもよ？」
「それって、この先にあれと同じものがわらわら居るかも、て事になるんだけど……」

僕とアークだけで話していてもしようがないから、そのまま気付かれない様に引き返して後衛メンバーと合流する。

「何か居たのかい？」

「えっとね」

すぐそこで見た生物の特徴をざっと話す。

全身を包むくすんだ色の硬そうな殻に、ちょっと変則的だったけど確かにあったハサミ。

多分カニだろうと云う僕らの推測も話した。

カニにしては大きかったけど、ネズミと云いモグラと云い、樹海の生物は外よりも大型みたいだから、あり得ない事じゃないと思う。

「……違う」

僕とアークの話が終わるまで黙って聞いていたクレアが、ぼそりと否定した。

抑揚の無いその声は、大きくはないけどよく通るから、聞き逃した事はまだない。

「……それは多分、はさみカブト」

「カブトって、カブト虫の？　て事は、あれって昆虫なの？」

「まぁ、名前にハサミが付いてるなら、ハサミが無い方が問題だよな」

「そりゃあ、そうだけど」

何となく問題の論点が違う気がするなぁ、なんて考えていると、クレアが再び口を開く。

「……はさみカブトなら、私は役に立てない」
「あれと戦った事あるの？」
やけにきっぱりと言い切るからそう訊いてみる。
「……私の弓では、全く歯が立たなかった」
こっくり頷いて言ったクレアの言葉に、以前話に出た物理耐性の事を思い出す。
勿論持っていると決まった訳じゃないから、とりあえず攻撃はしてみるつもりだけど。
どちらにしても、どの程度の固さなのか自分で確かめておいた方が良いだろうし。
「セツの予想が当たったな」
アークも同じ事を思い出したらしく、そんな事を言った。
「物理耐性の事？」
「それもあるけど。外骨格を持った輩（やから）、とか言ってただろ？」
「あぁ、そう云えば」
それでカニとか昆虫とか予想を立てて、最終的に巨大ムカデ説で大騒ぎしたんだった。
結果としてカニっぽいカブト虫が居た訳だから、あの時の僕らの憶測はそう的を外してはいなかったらしい。
「とりあえず、巨大ムカデじゃなくて良かったよね」
「そうだな」

僕の言葉に、アークが大きく頷いた。アークも覚えていたらしい。

「巨大ムカデがこの森に居ないって、決まった訳じゃないけどね」

「いない事を祈っておこう」

「そうだね」

これぱっかりはアークの言う通り、祈るくらいしか出来る事は無いだろう。

０３４）見た目通りはよくある事

ガィン、と鈍い音が響く。
まるで鉄の塊を殴り付けた様な反動に、斧を持つ両手に痺れが走る。

「うわ、ほんとに硬いし」
「分かってた事だろ」
「そうだけどっ」

独り言に突っ込まないでよ、と返す時間を惜しんでその場を飛び退く。
そこへ突っ込んで来たはさみカブトは、やっぱりどう見てもカニにしか見えない。

「あの翅（はね）で飛べるとか反則だよねっ」
「下手したらオトーより重そうなのにな」

はさみカブトの体の両脇には、小さな薄い翅があった。
昆虫らしさあふれるその翅で空を切り、斧すら弾く硬質の体で体当たりを仕掛けてくる。
正直、勘弁して欲しい。
僕が避けても突っ込んだ勢いは急には殺せなかったらしく、少し後ろの地面に軽くめり込んでいる。

「生身で受けたら、致命傷くらいそうだなっ」
「軽装のアークは特に、ねっ」

軽口を叩き合いながらも、アークが鞭で絡め取って動きに制限を

掛け、僕がもう一度斧を叩き込む。
更に力を込めた一撃だったけど、さっきと同じ様に鈍い音を立てて弾かれた。

「一体何で出来てるんだかっ」
「予想してた事だろ？」
「そうだけどさ。今の、一応関節狙ったんだよ？」

殻の継ぎ目ならどうかと思ったけど、結果は多少食い込んだ気がしなくもないかな、と云う程度だった。

「っと。ゼン、合図だ」
「りょーかい」

ふたり揃ってはさみカブトから距離を取る。
その直後、鋭い閃光がはさみカブトへと突き刺さった。

「さすが。派手だね雷撃は」
「さっきまでの苦戦は何だったんだ、て感じだよね」

目に見えてダメージを負ったはさみカブトを見ながら、アークとそんな感想を交わす。

「もう一発、かな」
「だろうね」

明らかに鈍くなったけれどまだ斃(たお)れる様子を見せないはさみカブトに、僕とアークは構え直す。
僕らの攻撃がほとんど効かない事は、すでに身に沁みて理解している。

だから僕らの役割は、セ・セツがもう一度術を起動するまでの時間稼ぎだ。
今の様子なら、もう一発当たれば止(とど)めになるだろう。
攻撃を仕掛ける。
逆に、相手からの攻撃を誘導する。
常に後衛陣との距離を測り、近寄りも遠ざかりもしない距離を保ちつつ、僕らはセ・セツからの合図を待つ。

「来た、合図だ」

アークが呟き、二人同時にはさみカブトから距離を取る。
僕らが下がると同時に、一発目と同じ閃光がはさみカブトに直撃する。

「さっきより早くなかった？」
「遅いより良いだろ」

念の為に間違いなく死んでいる事を確認してから、セ・セツ達に合図を送った。

＊　＊　＊

初遭遇のはさみカブトを倒して進んだ先は、行き止まりだった。
行き止まりだったのは残念だけど、そこに水場が無かった事に少しだけほっとしている自分も居た。
あれが昆虫だと分かっていても、この先に水場があって、そこがはさみカブトの生息地でわらわらと居たりしたらどうしよう、なんて妄想が脳内に残っていたからだ。

行き止まりと言っても、木々が生い茂って通路が途切れたものではなく、ちょっとした広場になっている。
以前毒蝶（毒吹きアゲハと言うらしい）と遭遇した広場よりも明らかに広く、だけど二倍は無いかな、といった程度だ。
そして、東西より南北に広い。目測だけど。
その目測を実測にする為の測量の途中、広場の西にそれはあった。

「何これ」
「箱だね」

アークの言う通り、そこにあるのは箱だ。
三つ並んだそれは年季の入った苔にびっしりと覆われ、鎮座していると言っても良いくらい、どっしりとそこにあった。
落ちている、とか捨てられた、て感じじゃない。
明らかに、意図的に、明確な意思を持ってここに設置されている。
そんな感じだ。

「この樹海って、人の手が入ってないんだよね？」
「人跡未踏の地下世界、て触れ込みなんだから、そうなんじゃないか？」
「でも……明らかに人の手によるよね、これ」
「冒険小説だと宝が入ってるんだよな」

そんな事は、言ったアークが一番信じていないんだろう。
少し警戒する足取りで箱のひとつに近付くと、腰に差していたナイフの柄で軽く叩いた。

「他の冒険者が仕掛けたトラップ、て訳じゃなさそうだな。開けてみる？」

罠や仕掛けに関しては、僕らの中ではアークが一番詳しい。
ふと、レンジャーもトラップ関係には詳しそうだなと視線をやると、丁度クレアと目が合った。
「クレア、これについて何か知ってる？」
「……宝箱」
箱を指差しながら訊ねると、一言で答えが返って来た。
「宝箱？」
「……そう」
そのまま繰り返したアークの言葉にクレアが静かに頷く。
「……冒険者の間では、そう呼ばれている。樹海の中で時々見付かるけど、誰がいつ置いたのかは、分かっていない」
「何で宝箱って呼ばれてるの？」
「……開けてみれば分かる」
「危険は無いってコト？」
無言で頷いたクレアを信じて、とりあえず端のひとつを開けてみる事にする。
小さな子供なら入りそうな大きさと長い間放置されていただろう事から、開けるのに苦労するだろうと思った僕の予想はあっさり外れた。
「うわ、軽」
錆びてすらいない蓋を手に、思わず呆気に取られてしまった僕を余所に、アークがひょいっと中を覗き込む。

「剣、か？」
「剣？」

アークの横から覗き込むと、確かにナイフと呼ぶには大きい刃物が入っている。
取り出して鞘から抜いてみる。
大体五十センチくらいの長さの、片刃の直刀（ちょくとう）だった。

「何か、包丁とか鉈（なた）に似てるね」
「あぁ、言われてみれば」

包丁を戦闘用に改造してみました、と言われたら納得してしまいそうだ。

「それで？　この剣と宝箱と云う名の関係は？」

僕から剣を受け取って眺めながら、アークがクレアに訊ねる。

「……宝箱の中身は、それぞれ違う。残り二つには、違うものが入っている筈」
「つまり、剣である事に大して意味は無いって事だね」

これまで会話に全く参加していなかったセ・セツが唐突にそう言った。
一言も話さず何をしていたのかと思えば、いつの間にか残りの箱を開けて中身を確認していたらしい。
どうやら実際に開けたのはオトーみたいだけど。
想像よりも軽かったとは云え、ろくに筋力の無いセ・セツにはきつい重さだったらしい。

「こっちには薬とお金が入ってたよ」

右手に小瓶、左手に硬貨を持ったセ・セツがそれぞれをかざして見せる。

「……樹海で見付けたものは、発見者のものになる」

「今回で言うと、全部僕らのものって事？」

「……そう」

「でも、この剣どうしようか？」

僕らの誰も、剣を武器に選んでいない。

使わない武器が増えてもしようがない。むしろ邪魔だ。

「……武具を扱っている店へ持って行けば、下取りの一環として買い取ってもらえる」

「なるほど」

「武器も資金源のひとつ、て事か」

剣については、街に戻ったらシリカ商店にでも持ち込むと云う事にして。

「アークの予想、当たったね」

宝、と最初に言ったアークにそう言うと「俺が一番びっくりだよ」と返って来た。

０３４）見た目通りはよくある事（後書き）

宝箱の剣はスクラマサクスです。

０３５）はじめてのクエスト達成

「はい、お疲れさまでした。柔らかい皮を七枚、確かに受け取ったわ」

報酬を用意するから少し待ってね、と言ってサクヤさんが奥に引っ込んで行く。

その背中を見送るとクエストを完了した実感が一気に湧いて来て、何だかどっと疲れた。

「何だい、だらしないねぇ。しゃきっとしな、しゃきっと」

セ・セツが呆れた様子でそう言って来たけど、一度自覚してしまった疲労感を無かった事にするのは僕には無理だ。

そのままカウンターに両手を付いて、深い溜息を細く長く吐き出した。

「情けないねぇ。あんたたちは私より体力あるってのに」

「そりゃあ体力は、あるけどね……」

「精神的に疲れたんだよ。俺達にセツほどのバイタリティは無いからね」

いつの間にか椅子に座っているアークが会話に加わったのを良い事に、そのままセ・セツの相手を任せる。

そう、とにかく疲れた。精神的に。

敵襲を警戒しながら樹海の中を歩き回ると云うのは、分かっていた事だからまぁ良いとして。

問題は、獣の倒し方に掛けられた制限だったり、物理攻撃が全く効かない敵の出現だったり。

トドメと云うか、一番疲れたのがセ・セツの探究者モードだ。
スイッチが入りそうになった時の、僕とアークが感じた精神的負荷は凄かった。
すり減った。
目減りした。
とにかく気が休まらなかった。
詳しく語るのは勘弁して欲しい。
結果として探究者モードのスイッチが入る事は無かったから、何とか無事日没には樹海を出る事が出来たけど。
ただ、キルシェさんを冒険者に勧誘しようかとかなり切実に考えた。
ぼーっとつらつらと、流れるままに任せて考えて行く。
全員無事に樹海を出て、受けていたクエストも完了した。
これで気が緩むなと云うのは、もう無理難題の領域に入るんじゃないだろうか。
そう云えば、樹海を出るのにアリアドネの糸を使ったけど。

「ほんとに一瞬だったなぁ」
「何が？」

アークが不思議そうに訊いて来た。
どうやら考えていた事を口に出してしまったらしい。

「あー、うん。アリアドネの糸での移動の事」

いくらなんでも気を抜き過ぎだろうと、少し気合いを入れ直して答える。

「ああ。瞬きひとつ、て感じだったろ」
「うん、まさにそんな感じ」

確かに樹海の中に居たのに、気付けば街の広場に居た。
「間違いなく便利だけど、慣れないとちょっと気持ち悪いかも」
お腹の中だけぶわんと浮く様な、頭の中だけぐわんと揺すられたみたいな、変な感じ。
言葉にすると、何か違う気がするけど。
「移動する瞬間だろ？　独特の空間って云うか」
「そうそう。しかもなんか酔いそうだし」
表現するのが難しいそれを感じるのは一瞬だけど、その前後で視界が完全に変わるもんだから、色々と追い付けなくなる。
「すぐ慣れるさ。俺はもう慣れた」
「やけに早いね？　あ、そっか。アークは」
「そう。昨日散々セツと一緒に飛んだからな」
昨日の苦労を思い出したのか、更に疲れた感じになってしまったアークに「お疲れ様」と労(ねぎら)いの言葉を掛けていると。
「お待たせ。これが報酬の……どうかしたの？」
サクヤさんが報酬を持って戻って来た。
「ご心配なく。街に戻って気が抜けただけなんで」
心配そうに訊ねるサクヤさんに、猫を被ったアークが笑顔で返す。
それを見ていて、樹海の中では猫を被っていなかったな、と今更

気付いた。
アークはある意味で人見知りをするから、仲間になって浅いクレアが一緒なのに素で行動していたのは結構意外だ。
そう云えば一昨日もほぼ初対面のキルシェさんと素で話していた。
クレアやキルシェさんに気を許したのか、それとも猫を被る余裕も無かったのか。
セ・セツは気付いているか訊いてみようと思ったら、さっきまで居た場所から消えていて。

「やっぱり、動いた後はこれに限るねぇ」

いつの間にか、近くの丸テーブルでビールを飲んでいた。
何だか見覚えのある、赤毛の人と一緒に。

「かんぱいー」

彼女は笑顔でジョッキを掲げ、間延びした口調で音頭を取ると、手にしたアルコールをぐいっと飲み干す。
やっぱり酒豪だなぁ、としみじみ思わせる飲みっぷりだ。
たった二日で弱くはならないだろうから、当たり前の事だけど。

０３６）宝箱の不思議

「みんな、ずいぶん運が良いのね」

報酬を受け取ったら用件は終わりだけど、そのまま夕飯も食べて行く事になった。キルシェさんともまた会った事だし。

何だか常連になりそうな流れだけど、それも良いかと思いながら、次々と運ばれて来る料理にそれぞれ手を伸ばして行く。

そうして食事をしながら、何となくサクヤさんに今日の探索について話していると、言われたのがそんな言葉だった。

「運が良い？」

「ええ」

僕の問い掛けにひとつ頷くと「だって」と続けるサクヤさん。

「三箱ともカラッポだった冒険者だっているのよ？　全部入っていたのなら、運が良いと言えるんじゃないかしら」

その言葉の意味を掴みかねて、皆の顔を見回してみる。

セ・セツは手にしたビールを飲み干した所で、クレアは黙々とサイコロステーキを口に運んでいる。アークは焼き魚の骨を取って身をほぐしていて、オトーはそんなアークの手許をじーっと見つめていた。

樹海の情報がゼロに等しいキルシェさんがきょとんとしているのは良いとして、うちのメンバーはマイペース過ぎないだろうか。

「えっと、どう云う意味でしょう？」

とりあえずメンバーの反応に付いては後で考える事にして、サクヤさんに質問してみる。
今の言い方だと、僕らの知らない情報がある感じだし。
「俺達の運と云うより」
半身をほぐし終わったアークが、それを盛った皿をオトーの前に置きながら言う。
「あれだけ目立つモノが今まで発見されなかったって、ちょっと無理がありませんか？」
オトーが嬉々としてほぐされた身に箸を着けるのを見てから、手元の魚をひっくり返してまた同じ作業を始める。
「僕やろうか？　アークまだ一口も食べてないでしょ？」
「良いよ。すぐ終わるし」
あっさりと言ったその言葉通り、アジらしき魚はさくさくと背骨だけになっていく。
少しして丸々一匹ほぐし終えたアークは、二枚目の皿もオトーの前へと移動させて、やっと自分の食事を始めた。
「キミ、手慣れてるわねぇ」
何故か一緒にアークの手元を観察していたサクヤさんが、感心した様に言う。
「実際、慣れてますから」

さらりと返してハンバーガーにかぶりつくアーク。

「それで、運が良いってどう云う事ですか？」

そのまま三口で平らげると、次のハンバーガーに手を伸ばす。

一口が大きいと云うより、飲み込むのが早いんだよね。ちゃんと噛んでるのか心配になる。オトーが真似しないと良いんだけど。

「どうって言われてもねぇ」

うーん、と首を傾げていたサクヤさんは何かに思い当たったらしく、ぽんと両手を合わせた。

「もしかして、みんなあの話を知らないのかしら？」

「あの話？」

「どの話ですか？」

「もちろん、宝箱の話よ。樹海の宝箱には不思議な話があるの」

思わずアークと顔を見合わせる。

「誰がいつ置いたのか、とか？」

「でも、それは分かってないんじゃなかった？」

確かに、クレアがそんな事を言っていた。

「それじゃあ、その目的とか」

宝箱のシステムで得をするのは冒険者だけに思える。

だけどそれを設置した人にとっては、何らかのメリットがある行為なんだと思う。どんなメリットなのかは謎だけど。

置いたのが人間じゃないと云う可能性は、さすがに却下しても良いだろう。

「そうね。もちろんそれも不思議だけれど」

サクヤさんのその言い回しからすると、どうやら違ったみたいだ。

「クレアちゃん、教えてあげなかったの？」

サクヤさんの言葉と視線を追って、僕とアークもクレアの方を見る。

グラスをテーブルに置いたクレアは、いつも通りワンテンポ遅れて口を開いた。

「……訊かれなかったから」

「いや、確かに訊かなかったけど」

「知ってたなら教えてよ。何の事か知らないけど」

「……じゃあ、忘れてた」

「じゃあ、て何。じゃあ、て」

「明らかに取って付けてるよね、その言い訳」

僕らの遣り取りをほほえましげに見ていたサクヤさんは、ふいに「あら」と何かに気付いた様子で店内を見た。

「呼ばれているみたい。ちょっと行ってくるわ。詳しい事はクレアちゃんから訊いてちょうだい」

ごめんなさいね、と言い残してサクヤさんは店の奥へと去って行く。

「なんか、そーゆー事らしいけど？」

サクヤさんが消えて行った方角を指差しながら、アークがクレアに問い掛ける。

見るといつから話を聞いていたのか、全員がクレアに注目していた。

「……分かった」

ずれたテンポでひとつ頷いて、クレアが静かに話し始める。

その内容をまとめてしまうと、宝箱の中身は、時々誰かの手で補充されているらしいと云う事。

僕らが見付けた宝箱からアイテムや武器を入手した人と云うのは、他にも相当数居るらしい。

そして、同じ宝箱からアイテムを取っていると気付いた冒険者達は、誰かが補充しているのではないかと考えた。一体何のメリットがあってそんな事をしているのかは分からないが、その人物が分かればタダで色々手に入るんじゃないかと考え、すぐに調査を開始。

まずは目撃者を捜したけれど、アイテムを取り出すのではなく入れている人物なんて、誰も目撃していない。そこで、宝箱がからっぽである事を確認した上で見張ってみたりもしたけど、それらしい人物は現れない。ずっと宝箱を見張っていては仕事にならない為、交代制にして見張り始めてしばらく経ったある日、誰かがぽつりと漏らした。

――「誰か」を突き止めたら、もう宝箱の補充はされなくなるんじゃないか？――

樹海の箱に様々なものを放置するなんて財産の一部を捨てるに等しい。

そんな物好きを捕まえたくて見張っていたが、対象者が絶対に宝箱の補充をしなければならない道理は無い。見付かるのは面倒だと、そのまま補充を止めてしまう可能性の方がはるかに高いと気付いた彼らは、それ以降ぱったりと見張りを止めた。

「……だから、宝箱に中身が入っているかどうかは、運任せ」

クレアの話はそれで終わりらしく、僕らのテーブルに沈黙が流れた。

周りのテーブルが騒がしいから、静かとは間違っても言えない状況だけど。

「えー、と」

何だか、なんとも言えない話だ。誰が何の為に、と云う謎ととても近いけど、どこか軸がずれている。

「その人達はそれで良い訳？」

「良いんだろうさ、そいつらにとっちゃあね」

アークの戸惑った様な感想に、ずーっとぐびぐびとビールを飲みながら話を聞いていたセ・セツが答える。

「分からなくても実害は無い。分かってしまえばデメリットがあるかも知れない。利益だけを求めるなら、都合の悪い真実はそっと埋めておくに限るんだろうさ」

危険だって無さそうだしねぇ、と言うセ・セツの口調はどうでも良さそうなものだった。

「セ・セツは気にならないの？」

その冒険者達はともかく、セ・セツは気になった事は解明するべく追及しないと気が済まない人種の筈だ。

僕の質問に「そうだねぇ」と少し考えてから、答えてくれた。

「気にならない、と言ったら嘘になるかねぇ。でも今の所、それについて調べる気は無いよ」

「今の所？」

「そう、今の所さ」

いずれ調べるつもりなんだとしたら、どうして今じゃないんだろう。

そんな疑問が顔に出ていたらしい。

足りないんだよ、と補足する様にセ・セツが言った。

「足りない？」

「何が？」

「パーツが、さ」

「それは、いつか揃うものなの？」

「さあねぇ。そればっかりは、集めてみないと分からないよ」

セ・セツは楽しそうにそう言うと、手元のアルコールをぐいっと呷(あお)った。

037）おりる

「何これ」
「茎とか？」
「それ雄大にも程があるよね」
「まあな。フツーに考えたら木の洞（うろ）だと思うけど」
「でも、なんかちょっと違和感ない？」

僕らの目の前には、人が余裕で立って歩けるだけの大きな空洞が根元に空いた植物がある。ぱっと見には樹齢三桁どころか四桁あるだろうって感じの巨木だけど、なんとなく木と呼ぶのがためらわれる不思議な植物だ。

宝箱と云う存在とそれにまつわる不思議話を聞いた、その翌日。朝から樹海に潜った僕達は、大地の裂け目から入って真っ直ぐ北にある、おそらく最後の未探索通路へと足を進めた。広場然とした場所があったり折れ曲がったりしていたもののずっと一本道だったその通路の突き当たり、そこに今僕達はいる。

「……ただの樹洞（じゅどう）にしては、人が多く入り過ぎてる。しかも、ほとんど出て来ていない」

洞の前で屈（かが）み込んで、足元の土や苔に残った痕跡を見ていたクレアが言う。

「この中にやたら強い上におそろしく凶暴な何かが居て、入って行った奴はみんなやられた、なんてのはどう？」
「無いとは言い切れないけど、そんなのが一階に居たら噂ぐらいは流れてるもんじゃないの？」

エトリアの街に来てから一週間経つけど、そんなものが地下一階に居ると云う話は、噂でも聞いた事が無い。

「うーん。じゃあ、やっぱりこれがそうなんじゃないか？」
「ここから二階へ降りるって事？」
「他に怪しいものも無かったしねぇ。少なくとも入ってみる価値はあるだろうさ」

不思議植物の周りをぐるっと一周して来たらしいセ・セツが、ペシペシとその表面を叩きながら言う。

「それにしても興味深いね。これだけ巨大に生長して木質化せずにいるなんて。分枝が一切見当たらないのも気になるけど、ムブユの例もある事だし」

天井を睨んでひとり呟くセ・セツは放っておいて、相談を続ける。声に出して考えてる内は、呼べばちゃんと戻ってくるから問題無い。セ・セツの探究者モードは、黙り込んだ時が一番危険だ。

「少なくとも、人が通れるだけの幅がある通路は全部調べたよね」
「ああ。ここまで、下に続いてそうな場所は無かった筈だ」

クレアを見ると、無言でこくりと頷かれた。
セ・セツはまだぶつぶつ言ってるけど、入ってみると云う意見だったし。

「よし、入ってみよう。行き止まりだったら戻れば良いよね」
「やばそうだったら糸で街まで逃げても良いしな」
「そっか、そう云う使い道もあるね」

やっぱりアリアドネの糸って便利だなと思いながら、セ・セツに声をかけて空洞の中へと足を踏み入れる。
外から見ると真っ暗に見えたけど、入ってみると光のカーテンがぼんやりと降りていて、あんまり歩くのに支障は無さそうだった。

「これ、苔かな？」
「ぽいな。オトー、滑らない様に気を付けろよ」
「はいです」
「セ・セツもだよ。考え事に没頭しすぎて転ばないでね」
「イーゼン、あんた私をなんだと思ってんだい」

入って少しすると下り坂になっていて、下へ下へと続いていた。ふかっとした感触を靴底に感じながら、滑らない様にゆっくりと歩く。

「ゆるーくカーブしてるな」
「うん。螺旋（らせん）状になってるのかも」

しばらく黙々と降（くだ）っていたけど、ふと気になった事があって、最後尾を歩いているクレアに声を掛ける。

「ねぇ、クレア」
「……何？」

普段は返事をせずに顔を向けてくるだけの事も多いクレアだけど、暗がりだからなのか返事が返って来た。

「ちょっと訊いておきたいんだけど、クレアってどこまで進んだ事があるの？」

短いとは云え、以前は別のメンバーと一緒に潜っていたと聞いている。
だからこそ宝箱の話なんかも知っていたんだろうけど、どこまで潜った事があるのかをきちんと聞いてなかった事に今頃気付いたのだ。

「……もう、来た事が無い領域に入ってる」
「え、そうなの？」
「……そう。私が知っていたのは、この上の樹洞(じゅどう)までの一本道があった、小さめの広場まで」

そう云えば上の洞(ほら)を調べてたし、そもそもここまで来た事があったら、調べてる時にそう言うだろうって事に、遅ればせながら気付いた。

「そっか。それじゃあ、ここから先は、全員にとって未知の領域って事だね」
「……そうなる」

これでひとまず会話は終わって、また黙々と進んでいると、その内通路の先が明るくなって来た。

「そろそろかな」
「飛び出すんじゃないよ。目を慣らしてからじゃないと危ないからね」
「りょーかい」

セ・セツの注意にアークが軽く答えて、射し込む光が当たらない所で立ち止まる。
そこから外を眺めて、それなりに光に目を慣れさせてから、外を

警戒しながらじりじりと進んで行く。
「見える範囲には、何もいないよな？」
「多分ね」

視界も気配も、知覚出来る範囲には危険を感じさせるようなものはいないと告げている。
気配を消して隠れているって事もありえるけど、一階と二階でそこまで生息生物の実力差があるとは考え難い。
可能性を言えばいくらでも考えられるし、それに怖じ気付いていたら、いつまで経っても進めない。

「行くよ、アーク」
「おう」

ちらっとアークと視線を交わし、スリーカウントで大地を蹴って飛び出した。
ばっと周囲を見渡して、何も襲って来ない事を確認してから振り返る。

「問題無し」
「出て来て良いよ」

何かあった時のサポートとして待機していた後衛陣に声を掛けると、暗がりからゆっくりと三人の姿が現れる。
いつの間に入れ替わったのか、最後尾を歩いていたクレアが前に立ち、セ・セツとオトーがその後から出て来た。
「中からちょっと援護をね。必要なかったみたいで何よりだよ」

不思議に思ったのが顔に出ていたのか、セ・セツが種明かしをするみたいにそう言った。
どうやら援護射撃の準備をしてくれていたらしい。

「ああ、なるほど」

僕と同じく疑問に思っていたらしいアークが、納得した様に相槌を打つ。

「ありがとね、クレア」

僕の言葉に、クレアは黙って首を横に振った。
多分、気にするなって事だろう。

「さて、それじゃあ進んでみますか」

軽い調子でアークが言って、特に反論がある人も居ないので先へと進む。
最後にふと振り返ると、苔生(むす)した坂へ光のカーテンが柔らかく降り注ぐと云う、とても幻想的な空間がそこにはあった。

「ゼン、どうした？」
「何でもない。今行く」

アークの声で我に返った。
一階の入口とは大違いなその景色に、無意識に足を止めていたらしい。
少し離れた皆との距離を詰めるべく、軽く駆けた。

０３８）逃げる

「さて。それじゃあ、何があったのかしら？」

そう言ったのは、金鹿の酒場の女将ことサクヤさんだ。
僕らが座ったテーブル席に一緒になって腰を落ち着け、完全に話を聞く体勢になっている。

「仕事は良いんですか？」
「あなたたちしかいないもの」

サクヤさんの言う通り、僕ら以外にお客さんの姿は無い。
昼食には遅いが夕食にはまだまだ早いと云う、中途半端な時間帯のせいだろう。
その内誰かやって来るかも知れないけど、店の主人が良いと言っている以上、客の僕らがこれ以上気にしてもしようがない。

「別に面白くないですよ？」
「聞いてみないと分からないわ」

ゆったりと構えたサクヤさんに、どうぞ、と云う風に掌を見せて話を促される。
実は、この時点で既にセ・セツの手にはジョッキが握られている。
クレアは僕へと視線を投げてから同じくジョッキを手にセ・セツと乾杯を始めるし、アークもオトーに構っていて説明する気はなさそうだ。
クレアまで明るい内からアルコールを飲み出してしまった事に地味にショックを受けつつ、僕はゆっくりと口を開く。
それは本当に他愛無い話で、僕らが二階の道を進み始めて間もな

くの事だ。
耳に届いた激しい咆哮(ほうこう)と、大地の震動が伝えて来る荒々しい蹄の音。
それらの発生源らしき存在の怒り狂った気配と、それを感じて糸を使って街まで逃げ帰った僕ら。
「今冷静になってみると、何やってんだってって思わなくもないですけど」
大して長くもない僕の話が終わるまで、酒場に新たな客が入って来る事は無かった。
なるほどねぇ、と呟いたサクヤさんの声が呆れていると感じたのは、気のせいだろうか。
今なら、あの怒りは僕らに向けられたものではなく、ただ無秩序に撒き散らされていただけだと分かる。
けれどあの時はそんな事には気付かず、いきなり現れたその気配にうろたえて、とにかくその場から逃げ出したのだ。
街へと戻って落ち着いてからは、そんな呑まれた自分が情けなくて仕方がない。
「それは、逃げて正解よ」
「そうですか？」
「ええ」
聞いた話になるんだけど、と前置きするサクヤさんに、黙って続きを促した。
「それは魔物だと思うわ」
「魔物？」

まさかと思う反面、やっぱり、と納得した。

「二階に入ってすぐだったのなら、おそらく『狂える角鹿』でしょうね」

「シカですか？　あれが？」

鹿と云うと、臆病なくらい用心深い草食動物だ。

僕らが感じたあの気配とは、あまりにも違い過ぎている。

「『狂える角鹿』はね、名前の通り、狂った様に見るもの全てに攻撃をしかけてくるの。一階を攻略したばかりの腕じゃ、絶対に敵わないだろう強敵よ」

サクヤさんはぴっと右手の人差し指を立てると、真剣な目をして続ける。

「いいこと。一番大切なのは、生きて帰ってくることよ。勝つことなんて二の次でいいの」

「二の次、ですか」

「そうよ」

サクヤさんの言っている事は、それが正論だって事も含めてよく分かる。

冒険者の仕事は、未知の領域の探索だ。

それが危険な場所である事が多い為、結果として命懸けの戦闘が多く、その敗北は死と直結する。

だから、負ける訳にはいかない。

けれど傭兵じゃないから、必ずしも勝つ必要は無い。

逃げる事で生き延びるのは、冒険者にとって恥でも何でもない。

そう云った事はきちんと理解しているつもりだけど、どこか納得

出来ていない自分が居る。
何がそんなに納得出来ないのか、自分でもよく分からないんだけど。

「意外ね」

そんな言葉に我に返る。
いつの間にか、自分の思考にどっぷり浸かってしまっていたらしい。
声のした方へと顔を上げると、じーっと僕を見るサクヤさんが居た。

「いえ。この場合、やっぱりと言うべきかしら？」

観察していた様な視線が緩んだと思ったら、頬に手を当ててそんな事を言い出した。

「えーと。その、何がでしょう？」
「ソードマンは伊達じゃないってことね」
「あの、サクヤさん？」

僕の疑問に答える事なく、しみじみとした口調でひとり納得するサクヤさん。

「ゼンがゼンらしいって事だよ」

ここまで一言も口を挟んで来なかったアークだけど、話は聞いていたらしい。

「そう、あなたは気付いてるのね」

「まあ、長い付き合いなんで」

二人は分かっているみたいだけど、何の事だか僕にはさっぱりだ。

「イーゼ、イーゼ」

「ん、何オトー？」

アークがサクヤさんと話し始めた事で、これまでアークが構っていたオトーが僕に話し掛けて来る。

オトーが座っていたのはほぼ向かいの席なので、自然とテーブル越しの会話になっている。

「イーゼ勝ちたかったです？」

「え？」

「イーゼ、シカさんと勝負したかったです」

アークが話を聞いていた以上、オトーも聞いていたとしてもおかしくない。

おかしくはないけど、後半が質問じゃなくて断定なのは変じゃないだろうか。

「ほら、オトーだって分かってる」

「何が？」

「お前が無茶な勝負が好きだって事だよ」

「えぇ！？」

そんな訳ないでしょっ、と言う前に。

「挑んでみたかった、と顔に書いてあるものね」

サクヤさんにまでそんな事を言われてしまった。

「いや、僕にそんな戦闘狂な性質は」

「あるよ」

「あるです」

「あるようね」

最後まで言い切る前に、口々に三人に肯定されてしまう。

「いや無いから。そんな死に急ぐ様な性格してないから」

サクヤさんもいると云うのに敬語を忘れる程度には、僕はうろたえているらしい。

「自覚がないのね」

「そーなんですよ。困ったヤツでしょ？」

「確かに困った子だわ」

アークとアークの言葉に相槌を打ったサクヤさんが、揃って僕を見遣る。

そんな問題児を見る様な目で見られても。

オトーは僕と二人をきょろきょろと見たあと、僕に視線を固定した。二人の真似をする事にしたらしい。

「残念だけど、今はいくら言っても伝わる気がしないわ」

「ですね」

何だか通じ合っているアークとサクヤさん。

人の事を、しつけに悩む両親みたいな風情で語り合わないで欲しい。

ふと、親と云えばで僕らの保護者へと意識をやると、クレア共々消えている。
どこへ行ったのかと見回せば、二人でカウンター席に移動していた。
おそらくカウンターへと注文に行って、そのままそっちで飲み始めてしまったんだろう。
サクヤさんが僕らと話し込んでいたから気を使ったんだろうけど、いつの間に。

「上の空になってきたわね」
「そーですね」

視線がサクヤさんの背後へと飛んでいるのがバレたらしい。

「それじゃあ、イーゼン君は戦闘狂だってことでひとまず置いておくとして」
「いえ僕としてはその変な誤解はぜひとも今この場で解いておきたいんですが」

あまりと言えばあんまりなサクヤさんの言葉に、思わず息継ぎを忘れて反論した。

「オトーちゃんって云うカワイイ子もいるんだから、くれぐれも無理しちゃダメよ？」
「それは肝に銘じておきますが、僕としては戦闘狂の誤解をですね」
「あせらず無理せず、がんばりなさい」

僕の発言を見事にスルーして話をまとめたサクヤさんは、ふわりと笑うと席を立って行ってしまった。

０３８）逃げる（後書き）

※魔物＝Ｆ．Ｏ．Ｅ．

０３９）考える

何だか一気にどっと疲れて、目の前のテーブルにへろへろと突っ伏す。

「良かったな、ゼン」

「何がだよ」

視線は向けないままに、語調を強めて反論する。

「ちょっとは気が晴れただろ？」

どこが、と言い掛けて、抱えていたもやもやを忘れている自分に気付く。

完全に晴れた訳じゃないから、思い出すとやっぱり情けないなと感じはする。

それでも、ただ情けないと俯くんじゃなく、少しだけ前向きに考えようとしている僕が居る。

そんな切り替えのきっかけがサクヤさんと話した事だろう事は、すぐに思い至る事が出来た。

つまりはアークの言う通り、サクヤさんに気を遣わせてしまったって事なんだろう。

「悪い事したな」

「そうか？」

ぼそりと呟いた言葉を、しっかりと拾ったアークが投げ返す。

「話を聞きたがったのは向こうだろ。多分、好きでやってるんだよ」

「そーかなあ」
「そーだよ。少なくともゼンは、自分が情けなくて仕方ない、なんてオーラ出してた訳じゃないから安心しろ」
「うん、ありがと」

とりあえず、自己嫌悪を振り撒いていた訳ではない事にほっとする。

「じゃあ、何で分かったんだろ？」

アークにも気付かれてたみたいだけど、アークの場合はむしろ当然で、立場が反対なら僕だって気付く。
だけどそれは、それなりに長い付き合いをして来て互いの事を知っているからで、サクヤさんとの付き合いはまだまだ短い。
エトリアに来て十日も経っていない事を考えれば、せいぜい顔見知り程度の筈だ。

「あの女将が鋭いんだろ、単純に」

さらりとアークが答えをくれた。
だけどそうすると、今後どう足掻いてもサクヤさんにはお見通し、と云う事になる。

「勝てない女の人が、また増えた気がする」

この前、キルシェさんて人が増えたばっかりなのに。

「確かにな」

多分、アークも同じ人を連想してるんだろう。

苦笑混じりの声にそう思いつつ、だらーんと伸びていると、誰かが僕の頭に触った。
その手の伸びて来た方向へと顔を向けると、テーブルに乗り出すオトーの姿がある。

「オトー？」

なぜかそのまま僕の頭を撫で始めるオトーに、疑問を込めて呼び掛ける。

「よしよし、です」

何だかよく分からないけど、どうも、オトーなりに僕を労(ねぎら)ってくれているらしい。
それだけは何となく分かったので、しばらくおとなしく撫でられておこうか、なんて考えていて。

「忘れてたっ」
「何を？」

いきなりがばっと起き上がった僕に対して、アークが驚きもせずに聞き返し。

「イーゼ、もう元気です？」

その手を弾く様に起き上がった僕に対して、撫でていたオトーが怒る事も無かった。

「サクヤさんに訊く事があったのを思い出した。うん、もう大丈夫。急に立ち上がってごめんね」

前半はアークに、後半はオトーに向かって言う。
「イーゼが元気ならいーのです」
「ありがと、オトー」
にこにことそんな事を言ってくれるので、僕もつられて笑顔になる。
「で、あの女将に何を訊く訳？」
「あ、うん」
アークの言葉で我に返る。
うっかりオトーに癒され過ぎて、また忘れる所だった。
「魔物について、もう少し訊きたいな、と」
言いながら、店内をきょろきょろと見回す。
そろそろ夕方になるからか、お客さんは徐々に増え始めている。
「これは、今日は厳しいかなあ」
これから更にお客さんは増えるだろうから、店主であるサクヤさんはどんどん忙しくなるだろう。
そんな中で、ひと言ふた言では終わりそうにない話は持ち掛け難い。
だからと言って、また今度とは割り切れないものがある。
世界樹の迷宮を更に奥へと進む為には、魔物を倒すかその脇をすり抜けるかしなければならない。
相手を知らない状態では、そのどちらも酷く困難だ。

「別に、女将からじゃなくても良いんじゃないか？」
僕が考え込んでいると、アークがあっさりそう言ってくる。
「そりゃそうだけど。アーク、誰か当てとかある？」
「冒険者ギルドとか」
それを聞いて、窓口業務をしていた筋骨隆々なギルド長の事を思い出した。
「あのギルド長、絶対冒険者やってたと思わないか？　それも、中堅から一流どころの」
「あー、確かに」
引退してもあれだけの筋肉を保っている人が底辺だったとは、ちょっと思いたくない。
「もしその予想が外れてたとしてもだ。冒険者の手助けだって冒険者ギルドの役割の筈だし、魔物の基本情報くらいは扱ってるんじゃないか？」
そう言われれば、そんな気もする。
まさか、ギルドでやる事が冒険者の登録管理だけって事は無いだろう。
「後は執政院も可能性はあると思う」
「ああ、樹海に潜る許可は執政院が出してるんだっけ」
「確か樹海対策部って言ってたかな。そこで樹海の調査をやってるらしい」

「へー、そうなんだ」

どんな所だろうと考えていて、ふと気付いた。
ハバキで執政院に行った事が無いのって、もしかして僕だけじゃないだろうか。

「そう云えば、そこのカウンターにも居たぞ」
「何が？　じゃなくて、誰が？」

思い出した様なアークの言葉に、気付いた事はとりあえず保留にしておく。
気になるなら暇を見付けて行ってみれば良いだけだし。

「肩書に『長』の付くヤツ」
「え、ホントに？」
「ホントホント」
「その人、執政院長とか言わないよね？」

さすがにそれは無いとは思う。
だけど冒険者ギルドの窓口と云う前例がある以上、確認せずにはいられなかった。

「多分違うだろ。なんたら室長とか言ってたし」
「そっか。良かった」

院長とか町長とかがカウンターに居たら、ちょっと利用しにくいものがある。
冒険者ギルドはどうなんだと言われそうだけど、あのギルド長は叩き上げっぽくて身近に感じるので問題無い。

「で、どっち行く？　俺としては冒険者ギルドを推すけど」
「あ、そうだね。せっかく近いんだし」

金鹿の酒場と冒険者ギルドは、割と近い場所にある。

「ああ、そう云やそうだな」
「あれ、他に何かあったの？」

てっきり、近い場所から行ってみようって意図なんだと思ったけど。

「いや、なんかメガネが微妙に偉そうだったから」
「メガネって、もしかしてさっきのなんとか室長さん？」
「そう。ビミョーに偉そうな口調だったから、なんとなく気に食わない」
「ふーん」

その室長さんを僕は実際に見ていないから、アークの感想にはノーコメントで。

「冒険者ギルドが駄目だった場合、執政院にも行く事になるんだけど」
「分かってる。その場合は大人しく行くよ」

一応釘を刺しておこうと言ってみたら、すんなり了解してくれた。

「じゃあ、日が落ちる前に行ってみようか」
「そうだな、と同意したい所だけど。その前に、アレ」

そう言って、つい、とずれたアークの視線の先を見る。

「何だい、もうおしまいかい？」
「くそっ、これで三人目だぞ！？」
「いいや、まだだ！　まだ俺がっ」
「諦めの悪い男共だねぇ」
「悪いかこんちくしょー！」

カウンターでクレアと飲んでいた筈のセ・セツが、なぜか奥のテーブルで他のお客さんと酒合戦を繰り広げていた。

０４０）尋ねる

日がそれなりに傾いて街が紅く染まる頃、僕はクレアと二人で冒険者ギルドへとやって来た。

本当はアークも来るつもりだったけど、セ・セツの酒合戦が何故か酒場全体を巻き込んだ大規模なものになってしまった為、セ・セツの護衛兼介抱兼見張り役として、オトーと一緒に酒場に残っている。

初めはセ・セツの不戦敗って事で抜けさせようとしたんだけど、負けたら酒代を払う事になっていると知り、それは諦めた。

その時点で、既に僕らの所持金では足りそうにない量のお酒が消費されていたからだ。

クレアは自分が残るからって言ってくれたけど、女性陣だけにするのは良くないだろうと相談した結果、アークが残る事になった。

アーク曰く、酔っ払いを煙に巻くのは自分の方が向いているから、らしい。

確かにアークは僕より口が回るけど、それを攻撃に回す可能性もそれなりにあるから、ちょっと不安だ。

だけど僕が残ると、酔っ払いに売られた喧嘩をかわし切れずに乱闘になる事が目に見えていた。

そしてオトーはいざとなったらセ・セツの運搬役をすると言って残り、僕とクレアの二人だけが酒場を後にしたのだった。

「そんな訳で、魔物について何か知ってたら教えて下さい」

冒険者ギルドの受付には、相変わらず自己主張の激しい筋肉を持ったギルド長が座っていた。

「何か、つってもなあ」

僕の話を聞き終えたギルド長は、組んでいた腕をほどいて、少し困った様に右手で軽く顎を掻く。

「魔物の生態なんかは、ほとんど分かってないってのが正直な話でな」

「それでも、魔物だって認定される条件みたいなものはありますよね？」

「まあ、それくらいはな」

再び腕を組みながらギルド長が言う。

「魔物と動物を分ける大きな要因は、その強さと狂暴性だ。お前らも遭遇したなら分かるだろうが、あいつらの強さは異常だ。そしてどうやら、人間を目の敵にしている」

凄い勢いでやって来ただろ、と言われて、黙って頷いた。

「食う為だってんなら分からんでもないが、そうじゃねえ。あいつらは死体にゃ目もくれねえんだ。まるで人間を排除するのが目的みたいにな」

そこまで言って、ふっと息を吐く。

「なあ。今の話で、おかしいと思った事はないか？」

そう訊いて来たギルド長の目がどこか探る様な光を放っていて、これは試されているんだろうか、と思った時だった。

「……理由が、弱い」

小さいけどよく通る声で、クレアがぽつりと呟いた。

「……強さだけなら、下層にはもっと強い『動物』も居る筈」

確かに、どんなに強いと言っても、地下二階なんて浅い所に居る魔物よりも、更に深い層に居る動物の方が強い可能性は充分にある。

そしてそう云う事なら、僕にも言える事はある。

「狂暴な動物だって居ないとは限りませんよね？　出産直後の母親とか、人間に過剰反応する場合も多いし」

昔、子供を産んだばかりの母イノシシに遭遇した事がある。

その時の僕にその親子を狩る意思は無かったけれど、子を守ろうとするその姿には鬼気迫るものがあった。

「ああ、その通りだ。そもそも関係ねえんだよ。魔物であろうがなかろうが、強かろうが弱かろうが、命のやり取りである事は変わらねえ。魔物が魔物と呼ばれるのは、そう呼ばれるだけの異常があいつらにあるからだ」

魔物と呼ばれるだけの、異常。

それに比べれば、その強さや狂暴性なんて可愛いものだと、そう云う事なんだろうか。

「何があるんですか？」

「死なねえんだよ」

言ってから、いや違うな、とギルド長はすぐに言い直した。

「倒せはする、実力が伴えばな。だがしばらくすると、いつのまにか同じ種類の魔物が同じ縄張りに居座ってやがるんだ」
「単に他の場所から移って来たって可能性は無いんですか？」
近くの縄張りが空いたから自分のものにする。縄張りを追われて他の場所に行く。動物の世界じゃよくある事だ。
「いや、それがどうもそうじゃねえ。あー、お前らのやる気を下げちまうかも知れないんだが」
それでも聞くかと訊ねられて、即答する。
「聞きます」
どうせセ・セツのやる気はちょっとやそっとじゃ揺らがない。だったら身の安全の為に、少しでも情報を仕入れて置くべきだろう。
「なら言うが。実は昔、第一階層でちょっとした実験をした事があってな」
「実験、ですか？」
「ああ。執政院が腕利きの兵士とお抱え冒険者を一斉投入して、魔物と思われるヤツを片っ端から狩って行ったんだ」
「え、ちょっ、それ生態系とか大丈夫なんですか！？」
「おう。魔物は生態系の外に居る事がほぼ確実視されてたからな」
それを確定させる意味もあったらしいけど、また随分と思い切った事をする。
もしもその仮説が外れてたら、どうするつもりだったんだろう。

「さすがに狩り尽くしたと断言はできんが、種としての存続が厳しい程度まで減らしたとは言い切れる」
「なのに絶滅しなかった、と」
「まあそうなんだが。実際はもっと極端でな」
「極端？」
「定期的に魔物が居た付近へ偵察をやってたんだが。ある日、全ての場所に倒したのと同じ魔物が湧いて出たんだ」
「一斉に、ですか？」
「いや、数日のずれはあったな。だが、そこまでの数は居なかった筈なんだ」
「それでも魔物は現れた、と」
「そう云うこった」

えーと、つまり。

「魔物は、倒されてから一定の時間が経つと、自然発生する？」
「当時の執政院も、そう結論付けた」

自分でも無いなと思いながら言ってみた事が、あっさりと肯定されてしまった。

「いやでも、それだと明らかに生物の範疇（はんちゅう）を超えてませ、ん？」

反射的に反論をほとんど口に出した後で、ようやく気付く。

「だから、ですか」
「そう。だから、魔物と呼ばれるんだよ」

なるほど。
何となくだけど、理解した。

「じゃあそれはそれとして。魔物を相手にする時の心得とか、魔物に共通する逆鱗情報とかありません？」

魔物と云う存在の理不尽性が分かったからと言って、遭遇した場合の生存率を上げるヒントにはなりそうに無い。

更に戦闘になったりしたら、今聞いた話なんて何の武器にもならないと思う。

「あると思うか？」

片眉をぴくりと上げたギルド長は、質問に質問を返して来た。

「あったら良いなと云う願望です」

僕は基本的に、何でも訊くだけ訊いてみる事にしている。

駄目で元々。言うだけならタダ。訊いて分かれば儲けものだ。

「残念ながら、願望を叶える様な情報は無いな」

「そうですか」

特にがっかりする事もなく、お礼を言って出ようとした所で呼び止められた。

「何でしょう？」

「樹海の動植物について、執政院が情報を集めてるのは知ってるか？」

「らしいですね」

それなら酒場でアークに聞いたばかりだ。

「じゃあ、その集められた情報を整理したものが冒険者に公開されてるってのは、」
「そうなんですか！？」

ギルド長の言葉を最後まで聞かずに、思わず叫んだ。
そう云う事はもっと早く知りたかった。

「認可されたギルドに所属してる冒険者に限られるけどな。お前らはもうクリアしてんだろ？」

言葉が出て来ず、黙って首を縦に振る。
僕らが認可を受けたのは、三日前の事だ。

「今日はもう日も落ちちまったから、明日にでも見に行ってみな」
「ぜひともそうします」

ありがとうございます、と改めてお礼を言って、今度こそ冒険者ギルドを後にする。

「クレアも知らなかったの？」
「……ギルドに所属してなかったから」
「あ、そっか」

とりあえず、クレアは一緒に行く事になった。

０４１）賭ける

「おれは……もう、だめ、だ」

背を丸めて今にも倒れそうな男が、息も絶え絶えにそう告げる。

「待て、まだだ！　まだ諦めるなっ」

そんな男の肩を掴んで必死に語り掛ける、仲間らしき男。

「もう、休んでも、いい……よ、な……？」

しかしそんな彼らのやり取りを余所に、反対側に居た男が静かに崩れ落ちる。

「なっ、お前まで！？　待て、待ってくれ、まだやれるだろう！？」

唯一声高に戦意を叫ぶ男の両側で、無情にも仲間達は戦線から離脱した。

「なあ、頼む。待ってくれ。俺を……俺をひとりにしないでくれっ！」

残された男の絶望に染まった叫びを聞いて、僕は思った。

どこの戦場だ、と。

＊　＊　＊

冒険者ギルドへ行ったら、僕とクレアはそのまま宿に戻る事になっていた。
だけど何となく嫌な予感がして、クレアから了解を貰って様子を見に酒場に戻ってみた。
そうしたら酒場の中で繰り広げられていたのが、さっきの一幕だ。
名付けるなら「合戦場の悲劇」とかで良いと思う。合戦と言っても酒合戦(のみくらべ)だけど。

「今度は二人まとめてかよ」
「あの女、バケモンか……」

信じられない、と云った感じのざわめきが周囲から聞こえてくる。
それらは全て、たったひとりに向けられている。
店の中心に据えられた丸テーブルの一席で、悠然と足を組み、手にしたグラスを愉しげに揺らしている人物に。
腰より長いだろう金の髪をざっくりと三つ編みにした、妙に存在感のあるその女性。
まあ、要するにセ・セツなんだけど。

「だれか、だれかこのねえちゃんを、た、おし……っ」

残っていたひとりも、ついに限界が来たらしい。
最後まで言い切る事なく、ばったーん、とかなり派手な音を立てて床に倒れた。
それでも右手のグラスを割りも落としもせず握ったままなのは、執念の賜物だろうか。

「で、次は誰だい？」

顔面から盛大に床にぶつかった男をスルーしたセ・セツの発言に、周囲のざわめきが大きくなる。

「おい、誰か行けよ」
「無茶言うな」
「もう相当飲んでんだから、そろそろつぶれんじゃねーのか？」
「バカ言え。そう言って挑んだヤツらが、あのありさまなんだぞ？」

近場で交わされた会話で指し示された方向を見遣る。
店の壁際に、ぴくりとも動かない男達がごろごろ転がっていた。
多分、撃沈した端から次の挑戦者が適当に除(よ)けていった結果だろう。
そんな感じに余所見をしている間もざわざわと会話は交わされるものの、誰も進み出る者は居ない。

「もう打ち止めかい？」

セ・セツのその言葉にざわめきは増すものの、結局、誰も名乗り出る事は無かった。

「あのねえちゃんの一人勝ちか……」
「ちっ、十人抜きで止まるかと思ったんだが」
「一人くらい引き分けろよな」
「じゃあ手前(テメエ)が勝負しろや」
「バカ言うな！」

勝負が着いて人の輪がバラバラと解(ほど)けていく中、するりと耳に入って来たその会話。

「おーい胴元。ちゃんとねーちゃんにも払ってやれよー」
「おー、分ぁってんよ」

胴元、と呼ばれて返した人の声が、アークの声に聞こえたのは気のせいだろうか。
アークがこの場に居るのは当たり前と云うか、居なかったらむしろ問題なんだけど、それにしたって、胴元って。

「ボロいよなー、ツレが酒豪だと」
「何言ってやがんだ。条件はこっちのが不利じゃねーかよ」
「まあなー。なー、マジで仕込みとかないのかよ？」

不自然なくらい崩した言葉遣いをしているけど、間違いなくアークの声だ。
尚も続けられるその会話を頼りに、散開する人の波間を縫って進んで行く。

「あ？　見てなかったのか？」
「ジョーダンだよジョーダン。そんな睨むなよー」
「冗談で済みゃいーけどな。イチャモン付けられたら責任とらすぞ」
「おーコエー」

恐いと言いつつ全く気にせず笑う男と、その隣に立つアークの姿を見付けた。
僕が声を掛けようと息を吸った直後、ふと目線を上げたアークがこちらに気付いて顔を上げる。

「よー、おかえり」
「あ、うん。ただいま？」

何も言うなと目で訴えられたので、とりあえず話を合わせて様子を見る。

「何だ、連れか？」

「悪いか？」

僕とアークを見比べて訊ねて来る冒険者らしき男へと、アークが悪ガキみたいな顔で返す。

僕が聞いた範囲の会話だと結構失礼な事言ってるのに、語調と態度で懐っこい少年みたいに見えるから不思議だ。

「ん、おー？」

アークと話していた人が、ふと気付いた様に僕の全身をじろじろと観察する。

「お前アレか？　ひょっとしてソードマンか？」

「へ？　まあ、一応は」

「そーかそーか。俺もだ！」

そう言って何が楽しいのか、にかっと笑った顔を見て、あれこの人意外と若いかも知れない、とどうでも良い事を思う。

何となく三十手前だと判断してたけど、笑うと二十代半ばくらいに見える。笑うと童顔になる人も居るらしいから、そっちなのかも知れないけど。

「んなの、斧持（ハチェット）ってんだから丸分かりだろーが」

「分からんぞー？　木樵（きこり）かも知れんじゃないか」

「斧持って夜の酒場に現れる木樵？　二流怪談でもねーよ」

「それもそーだ！」

アークのツッコミにしばらくひとりで大笑いした後、じゃーな、と軽く手を振ってそのソードマンは去って行った。

「何だったの、あの人」
「知らん、ただのカモだ」
「カモって……あ、そうだよアーク。胴元って何？」
「胴元っつったら、賭けの元締めに決まってんじゃねーか」

何を当たり前の事を、みたいな調子で返された。

「その喋り方、まだ続けるの？」
「あ？　っと、悪い。この話し方が色々と便利だったもんで」
「いや、別に悪いとは言わないけど」

聞きなれないから、僕が何となく落ち着かないだけで。

「ところでオトーは？」
「女将に預けた。子供連れで胴元をやるのは、さすがに色々拙（まず）いだろうし」
「それはそうだけど。そもそもどうして賭けなんて始めたのさ？」
「セ・セツの酒合戦が、酒場全体を巻き込んでたろ？」
「うん。僕らが店を出る時にはそうなってたね」
「それだけ大事（オオゴト）になったんだから、いっそ娯楽まで提供するべきかと思って」

それが当然と云う風に言うもんだから、因果関係がさっぱり見えていないにも関わらず、うっかり納得しかけてしまった。

「ちなみに、賭けの内容は？」

「一人二エン、賭ける対象は挑戦者のみ。飛び入り歓迎で、一人でも残れば挑戦者の勝ち。全員酔い潰せばセツの勝ちで、その場合に限り胴元の総取り」
「なにその勝つ気ゼロの勝負」

一対多なのはともかく、飲み比べで飛び入りを認めるなんて、負けたいとしか思えない。

「だから、娯楽だったんだって」

アーク曰く、こう云う事は金が懸かった方が盛り上がる、だそうだ。
金額はエール一杯分と小さいし、発案者は生意気盛りの少年だ。
お酒が入って多少なりとも気が大きくなった客達は、ここは大人の余裕で乗ってやろうと考えた、らしい。

「それは分かったけど、どこに演技をする必要があったの？」

この賭けに問題があるとすれば、その「生意気だけど憎めない少年」がアークの演技だったって事くらいだろう。
そんな僕の疑問に、アークは「別に無いな」とあっさり答えた。
そうやって、よく分からない所で無意味に演技とかするから、何企んでるか分からないとか言われて絡まれるんだよ。

０４２）離れる

とりあえず、すっぽりと抜けていたアークが胴元をやろうと思った経緯を、もう少し詳しく話してもらう事にした。
すると、負けたら酒代を持つ事になっていた勝負は、あの後割とすぐに決着が着いていた事が分かった。
恐る恐る勝敗を訊いてみると、アークからは「問題無い」と云う返事。

「つまり、セ・セツが勝ったって事だよね？」
「ああ」
「良かったぁ」

確信を得る為にはっきりと言葉にして訊ねた僕は、アークがしっかりと頷くのを見て、ようやく安堵の息を吐く事が出来た。
だけどその後すぐ、じゃあさっきまでの勝負は一体何だったんだと云う疑問が湧いて、またアークに訊ねる。
アークは「ああ、それな」とちょっと面倒そうな顔をした。

「勝負を見物してた他の冒険者が、決着後にセツに勝負を持ち掛けたんだよ」
「ひと勝負終わったばかりの女性（セ・セツ）に？」
「そう。楽に勝てるとでも思ったんじゃないか？」
「うわ、せこっ」
「全くだ」

そんな卑怯っぽい申し出を、しかしセ・セツはあっさりと受けてしまい、アークが止める間も無く再び酒合戦が開幕。
それでも何とか酒代を掛けるのだけは阻止したらしいから、それ

だけでもアークが残っていた意味はあっただろう。
もし残っていたのが僕だったら、阻止しようとして喧嘩を売られ、最終的に大乱闘に発展していた可能性が高い。

「で、セツが再び飲み出したんで帰る訳には行かないけど、ただ待ってるのも暇だなーと思って」
「暇潰しに胴元になった、と？」
「そう。さすがにセツが勝つとは思ってなかったから、胴元（おれ）は単なる集金係のつもりだったんだけど」
「それがまさかの勝っちゃった、と」
「そーゆー事」

最終的にセ・セツに勝負を挑んで敗れていった人数は、はっきりとは分からない。
そこら辺に転がっている人の数を数えれば分かる事だけど、具体的な数字を出すのは心臓に悪い気がするから数えてない。と云うか、数えたくない。

「アルコールに強いって云うのは、知ってたつもりだけど」
「なんかもう、人類の範疇に居るか怪しい強さだな」
「まあ、チェイサーにテキーラ選ぶ様な人だし」

風味が強過ぎて味覚がリセットされないとかで、すぐに止（や）めてたけど。度数の高さは問題じゃないらしいのが、恐い所だ。
「蒸留酒（テキーラ）と云えば、自分で蒸留酒（スピリッツ）造ってたよな」
「ああ、造ってたね」

ある日いきなり「蒸留酒（スピリッツ）は精神（スピリット）の源であり生命（アクアヴィテ）の水なんだよ」とか言い出したと思ったら、地下の一室を醸造用に改造してしまった

のだ。

「良いけどな、別に」

「うん、元気だしね」

恐ろしい事に、それだけのアルコールを摂っているにも関わらず、セ・セツの健康に悪影響は無いらしい。

僕らとしては、飲兵衛だろうと何だろうと、セ・セツが元気なら止(と)める気は無い。

「探究者モードに入ってる方が、よっぽど不健康だしね」

「酒飲んでる時はちゃんと食べるし、その後ちゃんと寝るもんな」

探究者モードのセ・セツは、文字通り寝食を忘れてしまう。

それに比べれば、どれだけお酒を飲んだとしても、ちゃんと食事や睡眠を摂ってくれるだけ随分とマシなのだ。

「醸造部屋は参ったけどね」

「ああ、探究者モード入ったもんな」

「何故か最終的に味噌と醤油と米酢作ってたし」

「しかも出来たものが美味かったり」

「地味に性質(たち)が悪いよね」

『はぁ』

アークと二人で過去の苦労話をしていると、どちらからともなく吐いた溜息が綺麗に揃ってしまった。

「イーゼ、おかえりです」

その時ふいに横手から掛けられた声に、咄嗟に意識を切り換えて

向き直る。

「ただいま、オトー」

酒場でただいまと言うのもおかしな話だけど、さっきアークにも「おかえり」と言われているから今更だ。

オトーの隣にはクレアが立っていた。多分、さっきの「女将に預けた」と云うアークの言葉を聞いて、迎えに行ってくれたんだろう。

クレアに「ありがとう」と言うと、黙ってこくりと頷かれた。構わない、と云う肯定の様だ。

「突然だが、とりあえず宿に向かおうそうしよう。それも今すぐ一刻も早く」

「急にどしたの、アーク」

本当に突然なその言葉に思わず訊き返すと、すっとアークは腕を伸ばしてそれを指した。

示されたのは視界の斜め前方、酒場の中心。

「ねーちゃん酒に強ぇんだって？」

「どうよ、今からオレらともう一杯」

新たに店に入って来たらしい人達に、再びアルコールを勧められるセ・セツの姿だった。

「うん、とりあえず酒場から離れよう」

このままだとキリが無いに違いないと、アークと目だけで頷き合う。

（ちょっとあいつら煙に巻いて来る）
（分かった。僕らは絡まれない様に、先に店出とくね）
（おう。オトーは任せた）
（そっちはセ・セツをよろしく。何かあったら合図して）
（ああ）

これくらいの内容なら、一瞬のアイコンタクトで可能だったりする。

「じゃ、行こうか二人とも」

アークは不自然じゃない程度に急いでセ・セツの許へ、僕はオトーの背を押しながらクレアを促して店の出口へと向かう。
食事代は僕とクレアが出る時に支払い済みだし、賭けで消費した酒代は転がっている挑戦者集団が払ってくれるだろう。
金鹿の酒場から出て少し離れた街灯の下で、セ・セツとアークを待つ事にする。迷宮からの帰還ラッシュは過ぎているから、合流出来ないって事は無いだろう。

「執政院の話、言いそびれたね」
「……明日でも、特に問題ない」
「それもそうか」

そんな事を話していると、大して待たずにセ・セツを連れたアークが酒場から出て来た。
すぐに街灯の明かりに照らされた僕らに気付き、歩み寄って合流する。

「おつかれ、アーク」
「ああ」

「問題は？」
「特に無い」
「そう」
「オトー、大丈夫か？」

眠いらしく頭がふらふらしているオトーは、アークの問い掛けに無言でこっくり頷く。
僕が宿まで背負って帰ろうかと訊けば、ふらふらしながら頭をぶんぶんと左右に振った。自分で歩いて帰りたいらしい。

「それじゃ、オトーの限界が来る前に、さっさと部屋に戻ろうかね」

オトー以上に千鳥足になっていておかしくない筈のセ・セツは、いつもの調子で話し、いつもの足取りで宿へ向かって歩き出す。
さっさと戻ると言いながら、ふわふわ歩くオトーに合わせて、歩く速度はゆっくりだ。

「お酒残ってないのかな？」
「そもそも残る残らんと言えるほど、時間も経ってないんだが」
「……底無し」
「だね」
「だな」

残った僕ら三人は、そんな感じにこそこそと話しながら、セ・セツの後を少し遅れて付いて行く。
僕とアークの中で、セ・セツのアルコール限界値が今まで以上に上方修正されたのは、言うまでもない。

０４２）離れる（後書き）

※チェイサー：強いお酒を飲む時に、口直しに飲む水の事。

０４３）鍛える

翌日、執政院で得られた狂える角鹿についての情報は、大きく言って三つ。
一つ、巨大な角を持つ牡鹿である。
一つ、見る者全てに攻撃してくる。
一つ、危険極まりない魔物である。

「全部、見れば分かるよって事ばっかりだな」
「最後のなんて、もう情報と言えるのかどうかすら怪しいよ」
狂える角鹿が危険だなんて事は、見なくても分かっていた事だ。
別に、撃退法や弱点が分かると思っていた訳ではないけど。

「あんまり来た意味なかったね」
ここまで得られるものが無かったと云うのも、少し予想外ではあった。

「そうでもないさ」
唐突に割って入ったその声に振り向くと、数枚の羊皮紙を持ったセ・セツが居た。

「セ・セツ？」
「何か分かったの？」
「角鹿に付いては特に無いけどね。来た意味は少しは得られたよ」
そう言うセ・セツから羊皮紙を受け取り、アークと二人で覗き込

んで一拍後。

『怒れる野牛ぅ！？』

思わず揃って叫んだ後でここが執政院の一角である事を思い出し、声を潜めて会話を続ける。

「何これ、こんなのも居るのっ？」

「しかも角鹿と同じ地下二階って、いつ遭遇してもおかしくないって事だよな？」

狂える角鹿だけでも正直言って遠慮したいのに、同じ階に別の魔物が居るなんて。

「こっちも大した事は分からないけどね。でもまあ、そう云うのが居る、と知ってるだけで違うだろう？」

「それは、まあ」

「そうだけど」

セ・セツの言う通り、怒れる野牛と呼ばれる魔物の情報も角鹿に負けず微々たるもので。

一つ、巨大な野牛である。

一つ、常に興奮状態にあり、突撃を繰り返す。

一つ、危険で厄介な魔物である。

「角鹿が危険極まりない魔物で、こっちは危険で厄介な魔物かよ」

「相手取ったら、どっちの方が危ないかな？」

「実力とパーティ構成と遭遇した時のコンディションによるな」

「いや、そりゃそうだけど」

たった一階下りただけで、魔物が二種類も出てくるなんて。
この先更に下りていく事を思うと、ちょっとぞっとするものがある。

「どうしよう。僕、生き残る自信が持てないんだけど」
「安心しろ、俺もだ」
「アーク、それ安心要素になりようがない」

むしろ不安感が増した。

「情けないねぇ、二人揃って。不甲斐無いったらありゃしない」
「いや、そんな事言われても」
「地下二階で二種類なら、最下層までに何十種類居るんだって考えちゃって」

現在、世界樹の迷宮は地下十六階が最深到達記録とされている。
そして十六階には更に地下へと続く通路が確認されているらしいから、十七階以上あるのは間違いない。
しかもこの記録も、過去に到達したギルドがあると言うだけで、今現在そこまで潜れるギルドが果たしてあるのかどうか。

「少なくとも今の僕らの実力じゃ、完全に自殺行為だよね」
「つまり、突撃する気は無いんだね？」

なんだか妙に真剣に訊くセ・セツに、嫌な考えが浮かんでしまう。

「まさかセ・セツ、特攻するつもりとか言わないよね？」
「言わないよ」
「なら良いけど」

即答したって事は、本当に考えてないんだろう。ちょっとほっとした。

「で、答えは？」

尚も真剣に訊いてくるセ・セツの態度は少し気になるけど、誤魔化す必要もないので素直に答える。

「僕だって無いよ。そんな無謀通り越して決死隊みたいな事」

「そりゃ良かった」

「え？　何が？」

今の会話で、良かったと思える要素なんてあっただろうか。

「死ぬかも知れない事態は回避したい、と思っている辺りだね」

それって普通の事じゃ？

僕はそう思ったけどアークは違ったらしく、ああ確かに、と妙に納得している。

「でもまだまだ最善には遠いよね？　むしろ捉え方によっては、かなり性質（たち）が悪い気もするし」

「まあね。だけど物事は一歩ずつ進むもんだからね。ある日いきなり、我が身可愛さに逃げ出す様になったりする訳もないだろう？」

「そんなゼンはさすがに嫌だなあ」

「私だってお断りだよ」

何がどうなったのかは分からないけど、どうやら僕の話をしていたらしい。

え、何で？

「ほらセツ、ゼンがきょとんとしてる。どうして自分の名前が出たのか、絶対分かってない顔だよね」

確かにさっぱり分かってないけど。とりあえず、僕の目の前で僕を除け者にして僕の話をするのは勘弁して欲しい。

「要するに、親は子に長生きして欲しいって話だよ。例えその子自身が望んでいなくともね」

今の話のどこをどう取ったら、そんな親の心子知らず、みたいな話になるんだろうか。

しかもその言い方だと、まるで僕が刹那主義みたいなんだけど。違うからね。

「子供だって、親に長生きして欲しいと思ってるからね」

とりあえず、はっきりしてる事としてそれだけ言うと、セ・セツは「そうかい」と言って、僕の頭をぐりぐりと撫でた。

多少乱暴ではあるものの小さい子を褒めるみたいなその行為は、この年でされるとちょっと恥ずかしい。

だからと云ってセ・セツの手を振り払うなんて選択を出来そうにない僕は、助けを求めてアークを見る。

にやにやした笑みが返って来た。どうやら助けてくれないらしい。

いつかアークが同じ事態になったら、絶対見捨ててやる。

「さて。それじゃあ、さっそく明日から敢行しようかね」

一頻り撫でて満足したらしいセ・セツの手が離れた事にほっとする間もなく、そのセ・セツがなんか言いだした。

「敢行って、何を？」
「おや、言わなかったかい？」
聞いてない、と首を横に振る僕とアーク。
「知らないなら学べば良い、出来ないなら練習すれば良い」
だろう？　と訊かれた僕とアークは、今度は首を縦に振る。
それに満足気に頷いたセ・セツは、つまり、と更に言葉を続ける。
「実力不足だって言うなら、実力が足るまで鍛えるまでだよ」
そう言い切ったセ・セツの言葉は、確かにその通りではある。
その通りではあるものの、同時に嫌な予感を果てしなく感じる。
そんな僕の隣から、アークが問いを投げ掛けた。
「具体的には？」
セ・セツは「そうだねぇ」と考える様に呟きはしたものの、大して悩む事もなく、その答えを口にした。
「狂える角鹿の近くで、ひとつ狩りでもしようかね」
嫌な予感が、見事に当たった。

０４４）Ｄｒ．キタザキの診療簿

「んじゃ、いんちょーセンセ。どーもあざーっしたっ」
「次は石化を受けない様に気を付けるんだね」
「ういっス」

無事退院して行く患者を見送りついでに空を見上げると、そろそろ太陽が中天に差しかかろうと云う時刻だ。
来るとすればそろそろだろう。
私がそう考えるのを待っていたかの様なタイミングで、バタバタと騒がしい足音が表の通りから近付いて来る。

「やれやれ、今日も来てしまったか」

予想通りではあるのだが、いい加減来なくなっても良い頃合いだろうにとも思ってしまう。

「懲りませんねぇ、あの人達も」
「もう慣れた、とか言ってましたよ」

周りのスタッフ達も慣れたもので、騒音の主について呆れた様子で話しながらも、彼らを迎える準備を始めている。
ここ最近の恒例行事の様なものではあるが、処置が遅れれば人命が失われてしまうのだから、油断や手抜きは許されない。
そうしてすぐに正面扉が勢いよく開かれ、予想通りの面々が現れる。

「すいません急患お願いしますっ」
「症状と人数は？」

「被毒が二人です！」
「分かった。いつもの部屋へ運んでくれ」
「はいっ！」
「オトー、そこの扉開けてっ」
「はいですっ」

慌ただしく駆けこんで来た彼らと短く話して指示をすると、彼らはそのまま処置室のひとつへと駆けて行った。

「では私も行こうかな。患者は二名だそうだから、誰かひとり一緒に来てくれ」
「あ、私が行きます」
「ではお願いしよう」

慌てず焦らずしかし素早くを心掛けつつ、ここ最近常連となっている冒険者達の治療へと向かった。

＊　＊　＊

「ありがとうございました」
「今日も助かりました、キタザキ先生」

無事解毒の治療が間に合い、患者二名の容態は落ち着いている。

「被毒と云う事は、今日の相手は毒吹きアゲハかな？」

患者の意識が戻るのを待つ間、ここに駆け込むまでの話を訊くのもいつもの事だ。

「ええ、そうです」

ダークハンターのイアーク君が静かに首肯した。

速さを活かした攻撃に重点を置いている彼は、前衛を務めるにしては軽装だ。

彼がはさみカブトの体当たりを真正面から受けて運び込まれたのは、彼らハバキが毎日の様に施薬院に駆け込みだして間もない頃の事だった。

その時は肋骨が三本折れていたが、運ばれる時の振動で内臓が傷付く事が無かったのは僥倖（ぎょうこう）だったとしか言い様がない。

「風下には回らない様に注意してたんですけど」

イアーク君の言葉を補足する様に口を開いたのは、同じく前衛のイーゼン君だ。

武器が斧である事からも分かるが、彼の戦闘スタイルはイアーク君とは真逆のスピードを捨てた威力重視のものの為、それなりの鎧を着込んでいる。

それにも関わらず、患者として連れて来られる回数が最も多い人物だ。

「急に風向きでも変わったのかい？」

「いえ、風上からもう一匹出て来てしまって」

「なるほど、風下を正面にしていた訳だ」

今日患者として運ばれて来たのは、アルケミストとレンジャーと云う後衛の二人だった。

正面からぶつかればまず前衛の人間がやられるだろうから、毒を含んだ鱗粉（りんぷん）は背後から運ばれて来たのだろう。

「後衛の中でオトー君だけ無事だったのは、何か訳があるのかな」
「オトーは、挟まれたと気付いたセ・セツが真っ先に地面に伏せさせたんです。布を口にあてさせて」
「そうか」

セ・セツ君が眠るベッド脇で椅子に座っているオトー君の頭を撫でて、イーゼン君が言った。
自分の名前が出た事でこちらに意識を向けた彼女は、頭を撫でられた事に対して笑顔を見せ、イーゼン君もほほ笑んで返した。
彼らはオトー君に対して、どうにも過保護である様に感じられる。
発育の個人差を踏まえて考えても、彼女の年齢は十代前半で間違いないだろう。だがそれにしては、会話や動作から読み取れる精神年齢が幼すぎる。
彼らの過保護もその辺りに由来しているのではないかと考えているが、私からその事について訊ねた事は無い。
医者が割り込まねばならないほど切迫した状況には見えない上に、私自身がそう云った精神面の専門医ではないからだ。
もちろん彼らから相談される様な事があれば、診断するなり専門医を紹介するなりの用意はあるが。

「これは、毒吹きアゲハに限った事ではないが」

詮無い思考を切り替える意味も込めて、彼らにひとつアドバイスをしておく事にする。

「樹海で蝶を一頭見たら、他にも一、二頭は近くにいると考えた方が良い」
「群れで行動するんですか？」
「群れと云うほど明確な集まりではないがね。蝶の習性のひとつと

して、開けた場所や餌となる花の多い場所に集まる傾向がある様だ」

私がそう言うと、思い当たる事があったらしい。少年達が揃って納得した様な顔になった。

「あそこ、開けた上に花畑だったもんね」

「そんなトコで休憩してたら、そりゃ遭遇もするわな」

ふむ。

「それはひょっとして、地下一階の南西にある広場の事じゃないか？」

「そうです、けど」

「何で分かったんですか？」

訝(いぶか)しげに肯定するイアーク君と不思議そうに訊き返して来るイーゼン君に対し、隠す事でも無いので早々に種明かしをしてみせる。

「そこは一階では唯一毒吹きアゲハが出る場所なんだが、知らずに休憩地点にしてしまう新米冒険者がよくいるんだよ」

私の返事を聞いて何とも言えない顔をしたふたりを見ながら、そう云えばと思い出した様に続ける。

「君達も、あそこでうっかり休憩したんだったね。しかし君達は運が良かった方だよ」

「ゼンは生死の境をさ迷ったんですけど」

「だが生還したじゃないか」

仲間がひとり意識不明に陥った過去を運が良いと言われれば、誰

だって気持ちの良いものではない。
その感情のままに不愉快だと前面に押し出していたイアーク君は、私の言葉にはじかれた様にイーゼン君を見た。

「それって、つまり」

同じく私の言いたい事が伝わったらしいイーゼン君に「そうだ」と頷いて続きを述べる。

「あそこで毒吹きアゲハに襲われて命を落とす冒険者は、山ほどいる。昏睡状態にまで陥ったにも関わらず、命が助かり後遺症も残らなかったイーゼン君は、運が良いと言って構わないだろうと私は思っているよ」

「そ、そうですか。ところでちょっとお訊きしたいんですけど」

毒に冒された身で行った無茶をこってりと絞られたと云うイーゼン君としては、話が蒸し返される事を避けようとしたのだろう。早々に話題転換を試み始めた。

「さっき蝶の事を一頭、二頭と数えていたと思うんですけど」
「そうだっけ？」
「そうだよ」

彼の図った話題転換に、イアーク君があっさりと乗って来た。
その事に目に見えてにほっとしているイーゼン君だったが、その様子には触れずに私も流れに沿った発言をする。

「学術的には一頭二頭と数えるのが正しいが、一匹二匹と数えるのも間違いではないな」

「そうなんですか？」
「ああ。他にも一羽二羽と数えたりもする様だが」
「ハネがあるからですか？」
「おそらくはそうだろう」
「ハネ……翅（はね）か」
「ゼン、どうした？」
「翅があったら羽（わ）って数えるなら、はさみカブトも一羽って数えたりするのかなって」
「いや、あれはどう考えても匹だろ」
「だって翅があるよ？」
「だったらいっそ一杯二杯の方が良くないか？　カニっぽいんだし」

駆け込んで来た彼らと最終的にはたわいない会話をして終わる。
この恒例行事の様な出来事が、彼らの死ではなく強さを得た事により終わる事を、私は心から願っている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1397m/

エトリアの冒険者

2011年12月24日03時48分発行